千葉県文化財センター調査報告 第239集

袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成４年度

財団法人　千葉県文化財センター

袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成４年度

財団法人　千葉県文化財センター

序

千葉県内には、２万５千か所にのぼる多数の遺跡が所在しますが、その中で縄文時代の貝塚は647か所確認されています。これらの貝塚の個々の外見、規模などは周知のところですが、一部の著名な貝塚を除いてはその実態があきらかにされた例が数少ないのが実情です。

また、首都圏に位置する本県では、近年のめざましい開発に伴い、地理的景観や歴史的風土に急激な変貌が見られ、城館跡、貝塚、古墳などの埋蔵文化財にも大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和63年度から国庫補助を得て、重要遺跡確認調査の一環として県内に所在する貝塚のうち、歴史的に貴重なもので、開発等により破壊されるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための基礎資料を得ることを目的に、測量及び確認調査を実施し、実態を明らかにしてきました。

今年度は、現存する大規模貝塚では本県の最南端に位置する袖ヶ浦市山野貝塚の調査を財団法人千葉県文化財センターへ委託し実施しました。その結果、貝塚は大規模な馬蹄形を呈し、その外側には居住域、内側には広場的な空間があり、縄文時代後期の大規模な集落の一般的な様相を呈していたことが判明しました。

このように今回の調査では、小規模な調査であったにもかかわらず、これまで不確定であった貝層の分布範囲と居住域が確認でき、貝塚の全体像の把握に予想以上の大きな成果を得ることができました。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財保護、活用の一助として、広く一般県民の方々にも活用されることを願ってやみません。

終りに、文化庁をはじめ、地元袖ヶ浦市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成５年３月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長　白　石　竹　雄

凡　例

1．本書は、千葉県袖ヶ浦市飯富3545－5他に所在する山野貝塚（遺跡コード481－013）の発掘調査報告書である。

2．本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚確認調査の第5年次にあたるもので、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。

3．発掘調査は、平成4年10月1日から同年10月30日まで実施した。

4．整理および報告書作成は、平成4年11月1日から同年12月28日まで実施した。

5．調査および整理・報告書作成は、研究部長　天野　努、部長補佐　渡辺智信の指導のもとに、主任技師　上守秀明が担当した。

6．本書に使用した地形図および空中写真は、以下の通りである。

第1図　国土地理院発行の1：50,000地形図　姉崎（NI－54－19－16）と木更津（NI－54－25－4）を合成して使用。

第48図　袖ヶ浦市発行の1：2,500地形図　袖ヶ浦市地形図 NO.18（Ⅸ－ME 13－2）を1：5,000に縮尺して使用。

図版1　京葉測量株式会社による昭和47年撮影の空中写真を使用。

7．本書に使用した方位は、座標北を示すものである。

8．調査の実施にあたっては、袖ヶ浦市教育委員会、飯富区長　伊藤昭二氏、所有地を快く貸してくださった西沢直文、鈴木克士、都築敬二、在原清一、宮崎正雄、上田幸一、高橋房男の各氏、深井邦康、深井保司、小泉正雄の各氏をはじめとする地元の皆様から多大なる御協力を賜った。記して深謝の意を表する次第です。

9．現地調査から報告書執筆にいたるまで、下記の諸機関、諸氏から多くの御協力または御指導をいただいた。特に脊椎動物の同定については、千葉県立中央博物館　小宮　孟氏、石材の鑑定については、千葉県立姉崎高等学校教諭　沢野　弘氏の協力を得た。各々記して深謝の意を表する次第です（敬称略、順不同）。

袖ヶ浦市角山配水場、袖ヶ浦市郷土博物館、財団法人　君津郡市文化財センター
井口　崇、大谷克己、小宮　孟、沢野　弘、田井知二、菅谷通保、能城秀喜、
高橋龍三郎、小笠原永隆、鈴木佐智子、安藤七重

目　次

序　文
凡　例

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．遺跡の位置と環境 …… 1
　2．周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ　調査の概要 …… 2
　1．調査研究略史 …… 2
　2．調査経過 …… 3
　3．調査方法 …… 3
Ⅲ　各トレンチの状況と出土遺物 …… 4
　1．トレンチの状況 …… 4
　2．出土遺物の概要 …… 8
　3．土　器 …… 8
　4．土製品 …… 19
　5．石　器 …… 21
　6．骨角牙製品 …… 26
　7．動物遺体 …… 27
　8．貝サンプル …… 28
Ⅳ　検出遺構と出土遺物 …… 32
　1．住居跡 …… 32
　2．土　坑 …… 39
Ⅴ　ま　と　め …… 40
　1．貝層の分布 …… 40
　2．遺構分布と集落の範囲 …… 41
　3．出土土器にみられる集落の形成時期 …… 42
　4．生産活動 …… 42
　5．柄鏡形住居跡 …… 43
　6．おわりに …… 45

挿図目次

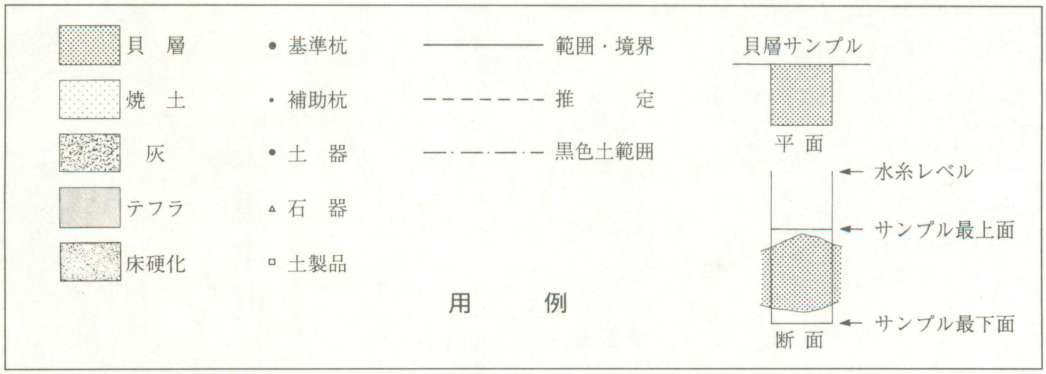
第１図　山野貝塚の位置と周辺遺跡…図版目次裏
第２図　1973年の調査……2
第３図　１Ｔ・３Ｔおよび検出遺構……4
第４図　２Ｔ……5
第５図　４Ｔ……5
第６図　５Ｔ……5
第７図　７Ｔ……6
第８図　８Ｔ……6
第９図　９Ｔ……6
第10図　10Ｔ・11Ｔ……7
第11図　12Ｔ・13Ｔ……7
第12図　１Ｔ出土土器……9
第13図　３Ｔ出土土器……9
第14図　１Ｔ・３Ｔ拡張区出土土器……10
第15図　ＳＩ－１出土土器……10
第16図　ＳＩ－３出土土器……10
第17図　ＳＫ３・４・５出土土器……11
第18図　２Ｔ出土土器（１）……11
第19図　２Ｔ出土土器（２）……12
第20図　４Ｔ・ＳＩ－８出土土器……13
第21図　５Ｔ出土土器……14
第22図　７Ｔ出土土器……15
第23図　８Ｔ出土土器……16
第24図　９Ｔ出土土器……16
第25図　10Ｔ出土土器（１）……16
第26図　10Ｔ出土土器（２）……17
第27図　11Ｔ出土土器（１）……17
第28図　11Ｔ出土土器（２）……18
第29図　12Ｔ出土土器……18
第30図　各グリッド出土土器……18
第31図　土製品……19
第32図　土製円板……20
第33図　土器片錘……21
第34図　石器（１）……22
第35図　石器（２）……23
第36図　骨角牙製品……26
第37図　ＳＩ－２（１）……33
第38図　ＳＩ－２（２）……34
第39図　ＳＩ－２（３）……35
第40図　ＳＩ－６（１）……36
第41図　ＳＩ－６（２）……37
第42図　ＳＩ－６（３）……38
第43図　ＳＩ－６（４）……39
第44図　ＳＫ－１……39
第45図　貝層調査範囲……40
第46図　遺構分布概念……41
第47図　ＳＩ－２立替の想定……44
第48図　山野貝塚周辺の地形……図版扉裏
折込付図　山野貝塚地形測量図……巻末

表目次

表１．基準点の座標値……3
表２．トレンチ杭の座標値……3
表３．土製品属性……21
表４．石器組成……25
表５．石器属性……25
表６．骨角牙製品属性……26
表７．動物遺存体種名一覧……27
表８．貝サンプル一覧……29
表９．貝類の組成比率（１）……30
表10．貝類の組成比率（２）……31
表11．貝類計測値分布……31

図 版 目 次

図版１．山野貝塚周辺地形の航空写真－昭和47年撮影－（約１：5,000）
図版２．１．遺跡遠景（西から）
２．遺跡近景（東から）
３．遺跡近景（東南の谷から）
図版３．各トレンチの状況（１）
図版４．各トレンチの状況（２）
図版５．各トレンチの状況（３）SI－１・SI－２（１）
図版６．SI－２（２）・SI－６・SK－１
図版７．土器（１T・２T・３T・SI－１・SI－３・SK－３・SK－４）
図版８．土器（４T・５T）
図版９．土器（７T・８T・10T・11T）
図版10．土器（SI－２・SI－６）
図版11．土器（４T・７T・11T・SI－２）
図版12．土器（SI－６・SK－１）
図版13．土製品・土製円板・土器片錘・骨角牙製品
図版14．石器（１）尖頭器・石鏃・石錘・楔形石器・UR－fl・削器・石核
石器（２）打製石斧・磨製石斧・礫斧・磨石類



第1図　山野貝塚の位置と周辺遺跡

Ⅰ はじめに

1．位置と周辺の環境（第１図、図版１・２）

山野貝塚は、袖ヶ浦市飯富3545-５他に所在する。遺跡はＪＲ線長浦駅の南方へ約2.4kmの標高約35～36ｍの台地上に立地するが、ここは下総台地最南端の縁辺部にあたる。つまり清澄山系の元清澄に源を発し、袖ヶ浦市と木更津市との間で東京湾に注ぐ、全長約88kmの小櫃川下流域の右岸台地上に位置するわけである。遺跡の南には小櫃川の氾濫原から湾入した谷よりさらに枝分かれしたやや急な支谷が入り、北東は境川から細かく枝分かれした小支谷に向かってなだらかに続く。このため小櫃川水系の小支谷に面した貝塚とはいえ、実際は分水界になる平坦面上に立地しているので、当時の生産活動は両水系に依拠していたのかもしれない。

氾濫原から湾入する谷口には、上池・下池と呼称される溜池が所在するが、この水源は主に雨水と思われる。周辺台地で保水された雨水は、谷に向かう斜面から「しぼり水」となって流出し溜め水となったと考えられ、現在でも谷津田で利用されている。遺跡の現況は、一部の山林・宅地を除き、畑地である。一部には深耕がおよんでいる部分があるが、概して貝層の遺存状況は良好である。山林は南側の谷に面した台地縁辺に所在するが、これは春から夏にかけて、谷から吹き上げる強風に対する防風林の役目を幾分か果たしていると思われる。しかしながら、遺跡北側から東側にかけての緩斜面は、土層の厚い状況が看取されており、これは次第に風によって表土が移動した結果とも考えられる。1973年調査の東側貝層の外縁はこの位置にあたり堆積土は厚かったが、遺物包含層の形成と土の運搬作用が相まった結果かも知れない。

2．周辺の遺跡（第１図）

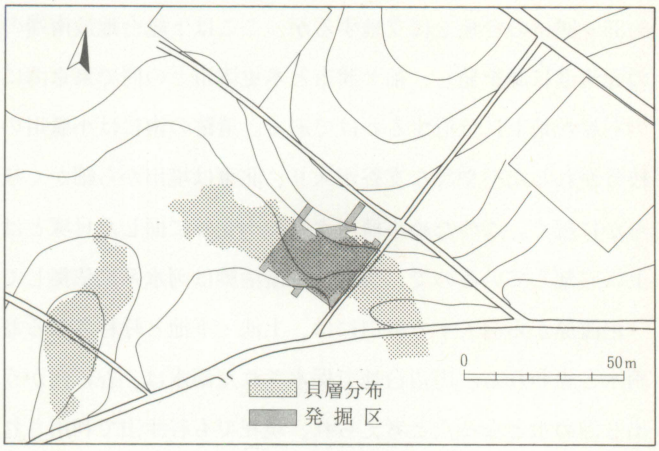
調査などで明らかになったものを中心に、貝塚と縄文時代後・晩期の遺跡について第１図に示してみた。右岸地域では、まず山野貝塚の北東部に位置する伊丹山遺跡（２）が挙げられる。称名寺式～堀之内式期にかけて形成され、該期の柄鏡形住居跡２軒他が検出されている。該期の遺物を出土する谷頭に面した角山遺跡（３）とともに、本来は山野貝塚の範囲を含んだ同一遺跡群の可能性が指摘される。また、山野貝塚と向山野遺跡（４）との限界は、今回の調査結果から改めて検討される必要があろう。次いで上池を挟んだ谷口に面した宮ノ越貝塚（６）が挙げられる。中期前半～後期後半に貝塚は形成されるようだが、境№２遺跡や西ノ窪遺跡を含んで堀之内式期を中心に遺跡群を形成している。他に貝塚では早期後半の大宮台貝塚（６）を示すが、三ツ作貝塚、飯富貝塚、下野田貝塚などは現在、所在不明のため図示しなかった。

小櫃川左岸地域では、充分な成果が報告されずに既に消滅した祇園貝塚（７）をはじめ、永井作貝塚（８）、伊豆島貝塚（９）などの著名な中期～晩期の貝塚が挙げられる。この他に堀之内式期の柄鏡形住居跡１軒が検出された嘉登遺跡（10）が所在する。

Ⅱ 調査の概要

1．調査研究略史

本貝塚の存在は、大正時代末期の開墾以降、地元では少なからず認識され、詳細は不明であるが私的な小発掘が試みられたようである。その後、遺跡地図には記載されるが[1]、本貝塚が周知されるにいたったのは、1973年の発掘調査の成果が公表されてからである。



第２図　1973年の調査

発掘調査は、1973年５月～７月に東京電力電線塔建設に伴って、東貝層のほぼ中央にあたる約900㎡が調査され（第２図）、以下の成果が挙げられた[2]。

まず、畑地内の貝層のボーリング探査を行った結果、東西約120ｍ×南北約70ｍの範囲に、北側が若干途切れ、南側が大きく開口する平面形が相弧状を呈す貝塚であることが判明した。しかし山林内は探査できなかったため、相弧状の貝層の南限は未確定であった。次いで貝塚集落の形成時期は、貝層や遺物包含層から出土した土器から、後期前半堀之内１式～晩期前半前浦式期であることがわかった。また、質量とも豊富な獣・鳥骨や魚骨の出土が報告された。遺構の検出は、貝層下の不整形土坑が１基だけで居住域は把握されなかったが、県南部においては現存する大規模な貝塚を伴った、該期の貴重な集落遺跡であることが認識された。

本貝塚に関する主な研究成果としては、関東地方出土の関西系有文土器を論じるなかで、発掘報告書掲載資料から当該資料を抽出され、これを層位的な検討から晩期前半安行３ｂ式期に併行するものとし、該期の関東地方遺跡例の示標とした論考[3]と、掲載資料に未掲載分を加え、合計13点の加曽利Ｂ式～晩期安行式の土偶を再報告され（報告掲載分の１点は土板に変更）、調査面積に比しての点数から、多量の土偶を包蔵する遺跡と考えられた論考[4]が挙げられる。

1．文化財保護委員会刊『全国遺跡地図』1967年
　千葉県教育委員会刊『千葉県記念物所在地図』1971年
2．野村幸希・西山太郎・千葉健造・金子浩昌『袖ヶ浦町山野貝塚』1973年
3．鈴木加津子「関東北の関西系晩期有文土器小考」『古代』第80号　1985年
4．山本哲也「君津地方出土の土偶」『君津郡市文化財センター　研究紀要Ⅲ』1989年

2．調査経過

今回の確認調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要貝塚調査の第５年次にあたる。(財）千葉県文化財センターが委託を受け、平成４年10月１日～31日まで調査を実施した。

発掘調査は、土地所有者より借地できた部分に限られたため、必ずしも当初意図した位置にトレンチを設定できたわけではない。また、作物の収穫前であった畑地は、地主の協力で調査できた部分もあったが、位置を変更せざるをえない場合もあった。なお、併行して行ったボーリング探査の結果によって、予定した位置を変更した場合もある。トレンチは、例えば第１トレンチであれば「１T」というように呼称して、最終的には１T～13T（６Tは欠番）の合計12本のトレンチを調査した（折込付図)。限られた時間のなかで、しかも悪天候が続いたため、たいへん厳しい調査であったが、次項以降に記するように貝層や遺構の分布など集落の状態を考えるうえでの貴重な成果を挙げ、完了することができた。

3．調査方法

貝層のボーリング探査は、長さ１mのステッキを用い１mメッシュの間隔で実施し、分布範囲を確認した。「貝層あり」の基準は、貝殻の厚みを認識できるものとしたが、純度が低くかつ層も薄いため判断に迷う感触の場合、今回は範囲としなかった。この結果、従来から認識されている貝層については、南限の範囲を追加することができ、東西の相弧状と大きく捉えられていた形状は、是非はともかく、それぞれがさらに分断された貝層の集合として把握された。一方、この精度を保ったことで、従来把握されなかった遺構内堆積貝層と考えられる小範囲の貝層を、相弧状の貝層の周縁で20か所以上も確認することができた。

杭名	X 座 標	Y 座 標
No.1	−63620.000	14900.000
No.2	−63660.000	14860.000
No.3	−63660.000	14900.000
No.4	−63700.000	14980.000
No.5	−63735.000	14900.000

表１　基準点の座標値

分布範囲の測量は、貝層表面散布範囲とともに基準点（表１）に光波測距機を設定して行い、業者委託による地形図に併せ、縮尺：1／1,000で掲載した（折込付図)。

トレンチの設定は任意に行い、地形測量に際して各々の２点の公共座標値（第Ⅸ座標系）を測定した（表２)。遺構名で種別のわかるものについては、全体で種別ごとに通し番号を付し、それ以外はトレンチごとに番号を付けた。

杭　名	X 座 標	Y 座 標	杭　名	X 座 標	Y 座 標
1T−N	−63616.000	14893.000	1T−S	−63620.000	14893.000
2T−N	−63651.340	14890.000	2T−S	−63660.000	14895.000
3T−N	−63612.000	14902.000	3T−S	−63616.000	14902.000
4T−E	−63690.000	14878.000	4T−W	−63690.000	14870.000
5T−E	−63690.000	14903.500	5T−W	−63690.000	14895.500
7T−E	−63653.500	14990.000	7T−W	−63658.000	14983.386
8T−E	−63722.500	14882.599	8T−W	−63725.000	14875.000
9T−E	−63697.000	14920.000	9T−W	−63701.000	14913.072
10T−N	−63735.000	14891.000	10T−S	−63743.000	14891.000
11T−E	−63678.500	14983.858	11T−W	−63680.000	14976.000
12T−N	−63725.000	14925.000	12T−S	−63733.660	14930.000
13T−N	−63718.000	14845.000	13T−S	−63724.000	14845.000

表２　トレンチ杭の座標値

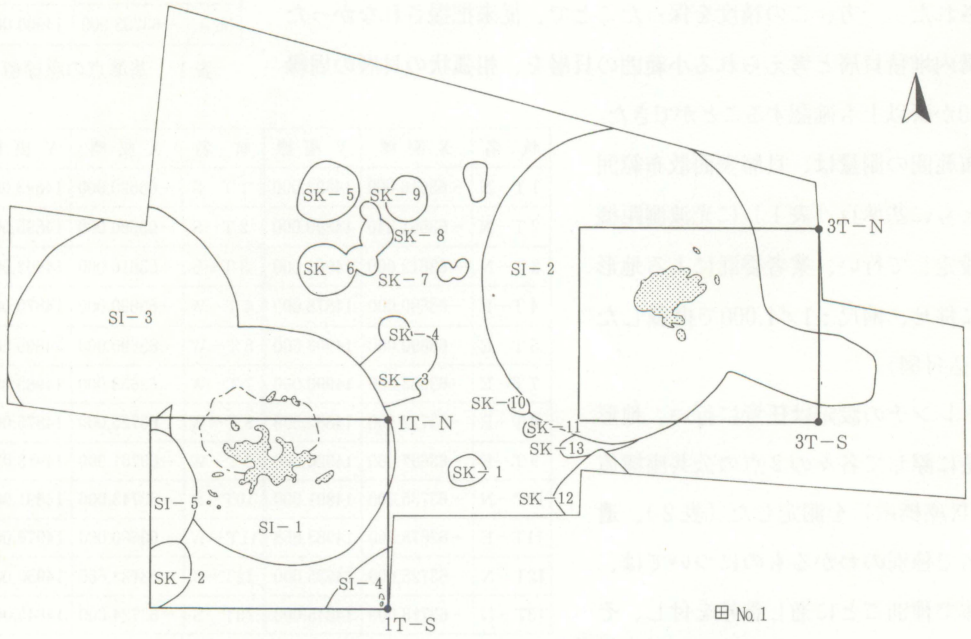
Ⅲ 各トレンチの状況と出土遺物

1．トレンチの概要

トレンチは、過去の調査成果（特に貝層の分布）や、今回のボーリング探査の内容を参考にして、貝層の堆積状況や遺構の分布する区域を把握することを目的として設定した（ただし、6Tは畑地の状況と日程の都合から調査を行わず、欠番とした）。その結果、限られた範囲のなかであったが、集落の広がり、貝層の内容を概括的に捉えることができた。また、トレンチの設定ができず内容の把握が不充分なところについても、今後、確認調査を行う場合、必要となる区域を指摘しうる成果を得た。

1T・3T（第3図）

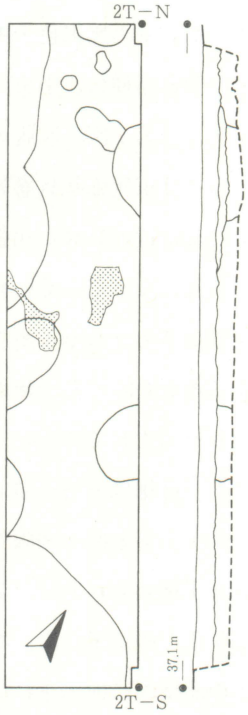
いずれもボーリング探査で範囲が確認された、小範囲の貝層の性格を知るために設定した。1Tでは住居跡の検出面に、3Tでは張り出し部をもつと思われる住居跡検出面に、それぞれ貝層の分布が認められ、いずれも遺構内堆積貝層であることがわかった。このためより詳しく内容を知るため、両トレンチ間を拡張し、遺構と貝層の範囲の把握に努めた。その結果、堀之内1式期以降の住居跡と考えられるSI-1～5、堀之内1式期の土坑であるSK-1、時期は未確定だが土坑と考えられるSK-2～13を確認し、遺構が密に分布する区域であることが把握された。耕作が表土下、約40cmの遺構確認面近くまでおよんでいるため、これらのうちSI-2とSK-1については継続して調査を行い、その内容は遺構の項で記述した。それ以外ではSI-1、SI-3、SK-3～5で遺物が出土しているが、検出面上に限られるため本節の土器の項に収載した。



第3図　1T・3Tおよび検出遺構（1：160）

2Ｔ（第４図、図版３）

トレンチ設定位置は、大略的には馬蹄形を呈す貝層分布が途切れ、東西に弧状に分布する接点にあたる。貝層の表面散布も認められないため、探査限界深度以下の遺構内貝層の有無を確認することと、貝層分布が途切れる位置の遺構分布状況を把握するため設定した。その結果、二次堆積と考える小貝層ブロックと、詳細は不明であるが、多数の遺構の重複が確認された。また後期後半～晩期前半主体の遺物が包含されていた。

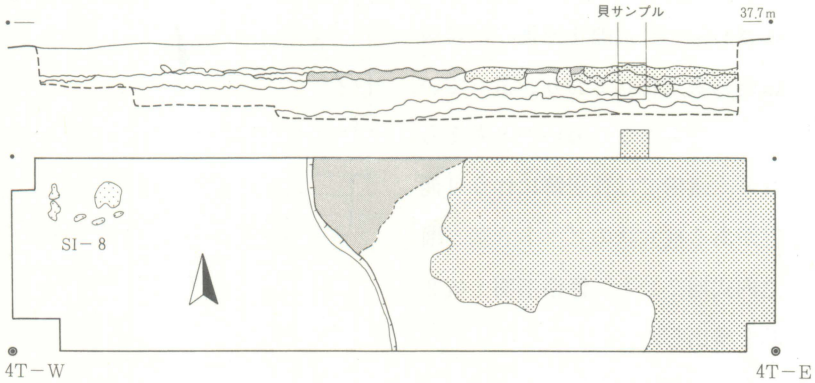


第４図　２Ｔ　（１：120）

４Ｔ（第５図、図版３）

トレンチ設定位置は、遺跡最高地点にある西側の弧状貝層の外縁部にあたる。ボーリング探査で捉えられた貝層の状態と、貝層外縁部の遺構の有無を確認するため設定した。その結果、貝層は富士新期テフラを含むと思われる明褐色土層との層位関係で、堀之内１式の可能性が考えられた。これらの層の上面が耕作によって表土化しているため、全体的な層位関係が捉えられないが、かなり微妙な範囲ながらも明褐色土層の下面が貝層端部と、貝層に時期的に伴う黒色有機質土層上に堆積するためである。図示した位置で貝層のコラムサンプルを採取し、新期テフラも任意にサンプリングした。

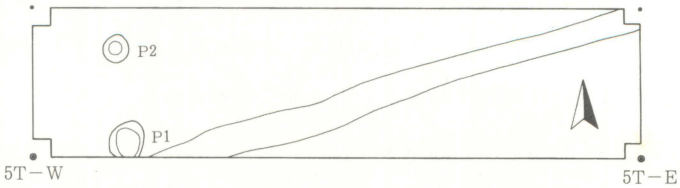
また貝層外に遺物集中が認められたため、精査し掘り下げた。その結果、床面がローム層まで達していない位置につくられた住居跡を検出し、焼土を確認した軟質な面を床面と考えた。新期テフラ層を切って構築されており、主体的な出土土器から加曽利Ｂ２～３式期の所産と考えられる。



第５図　４Ｔ　（１：80）

５Ｔ（第６図、図版３）

中央部のくぼ地に向かう、西側の弧状貝層内側の緩傾斜面に設定した。弧状貝層内側の遺構分布の有無を確認するためである。その結果、細別時期不明ながら縄文期の遺構は、柱穴状のピット２基が検出されただけにとどまり、

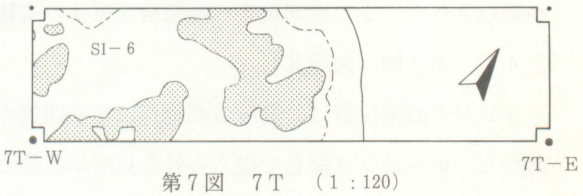


第６図　５Ｔ　（１：100）

遺構分布は薄かった。ローム層上面までの層厚は平均して約70cmであるが、このうち耕作土以下の約40cmの黒褐色土中に後期後半～晩期前半主体の土器が比較的多く包含されていた。他遺跡の例と同様に、中央部のくぼ地がこの時期の遺物包含層となる可能性が考えられる。

7T（第7図、図版3）

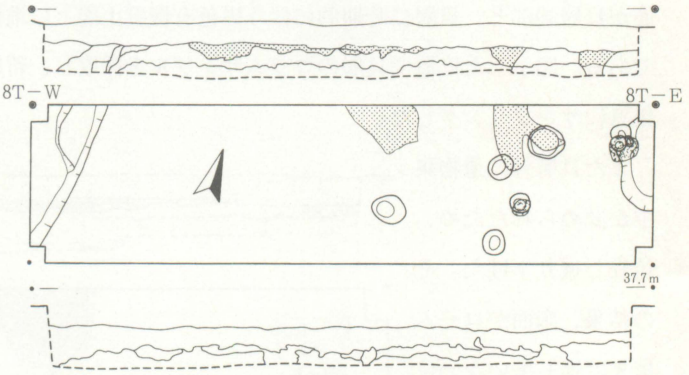
当初は東側弧状貝層外縁部の遺構の有無を把握するために設定したが、ボーリング探査によってこの位置の貝層が相弧状外の小貝層であることが判明したため、その性格の把握を目的とした設定になった。その結果、住居跡内に堆積すると考えられるイボキサゴ主体の貝層であることがわかった。検出面上で、土器などが数多く出土している。本住居跡はSI-6としたが、詳細は遺構の項で説明する。



第7図　7T　（1：120）

8T（第8図、図版4）

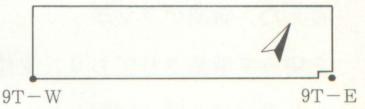
従来捉えられていた畑地内の西側弧状貝層の末端の堆積状況と、この位置の遺構の有無を確認するため設定した。ボーリング探査では把握できなかった薄い堆積の混貝土層末端がトレンチの北壁際に検出されたが、南壁では表土化した貝片しか観察されなかった。この結果、従来より把握されていた道際まで延びた貝層は既に表土化しており、遺っているとしてもかなり薄い層と考えられる。遺構では住居跡に伴う可能性がある柱穴状のピット6基（堀之内式期？）と、性格不明土坑2基を検出した。



第8図　8T　（1：100）

9T（第9図、図版4）

相弧状に分布する貝層の内側のくぼ地に、遺構が所在するのか確認のため設定した。結果的には耕作の進行が著しく、遺存条件が悪いためか検出されなかった。しかし少量出土した土器は晩期前半なので、5Tの所見同様に、詳細不明ながら中央くぼ地は居住域として利用されなかった可能性も考えられる。



第9図　9T　（1：200）

10T（第10図、図版4）

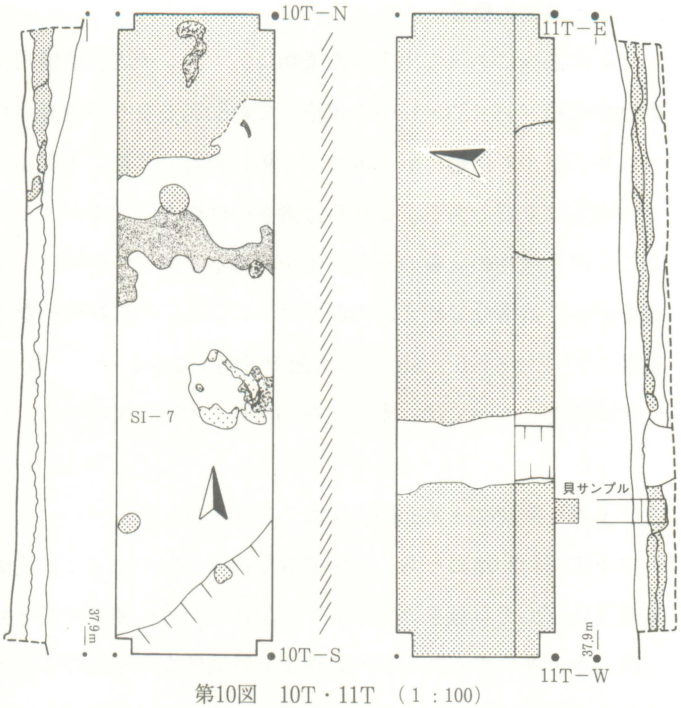
前回の調査では山林であったため、ボーリング探査がおよばなかった区域である。草刈後、地膨れ状に盛り上がった部分に貝の散布が認められ、獣骨の破片も目についた。8Tと道路を挟

んだ位置にあたるため、西側の弧状貝層との関係、貝層の状態、遺構の有無の把握のため設定した。

その結果、地膨れは道路付設時の盛土と考えられ、以下に検出された貝層はほぼ水平に堆積していた。また8T側の貝層とのつながりは不明ながら、西側弧状貝層の南限が捉えられた。

貝層南限に接して、床面硬化部や貝層を伴う柱穴、土器片を埋設した炉を確認したので、詳細不明ながら住居跡と考えた。

貝層からの獣・魚骨の出土量は肉眼的にも多量である。



第10図　10T・11T　（1：100）

11T（第10図、図版4）

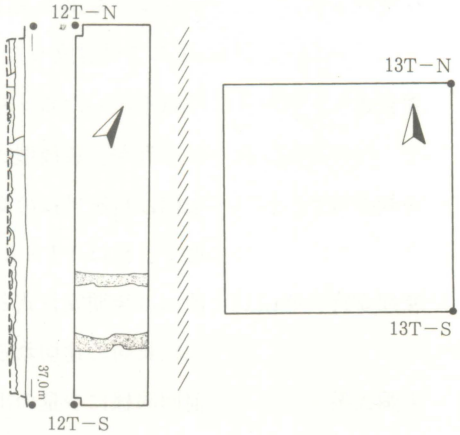
前回の調査で存在は確認されていたが、やはり山林内にあったため正確な範囲が把握されなかった東側の弧状貝層の末端の状態を調べ、遺構の有無を確認するため設定した。その結果、一部に新しい時期の溝がはしり破壊を受けているが、層厚約10～20cmの混土貝層、混貝土層を発掘区のほぼ全域に検出できた。ボーリング探査の成果と考え合わせると、貝層の末端はこのような状態で漸次薄くなるものと思われ、探査の限界を考えると正確な末端の状況は確定されなかった。また、貝層下に土坑と思われる落ち込みを検出し、図示した位置で貝層のコラムサンプルを採取した。

12T（第11図、図版4）

未探査区域は残るが、現状では貝層分布が遺跡南部には認められない。探査限界深度以下の遺構内貝層の有無を確認するため設定した。その結果、縄文期の遺構は検出されず、時期的には新しい轍状となった道状遺構を検出したにとどまった。

13T（第11図、図版5）

ボーリング探査で捉えた小貝層の性格把握のため設定したが、農作業の障害になった貝層と多量の遺物の二次堆積ブロックであることが判明した。



第11図　12T・13T　（1：200）

2．出土遺物の概要

今回の調査によって出土した遺物は、トレンチ内、遺構内、表面採集のものがある。その総数は整理箱（54×33×15cmの規格）で約60箱となり、調査面積の割には多量である。このうち貝層サンプルで15箱、獣・魚骨で３箱、石器で８箱、土製品や骨角器で約½箱を数えるが、全体の約½は土器である。これらは調査の性格上、大半がトレンチ調査によって得られた資料である。出土遺物の記載のうち大半を占める土器については、トレンチ出土のものに検出面で調査を終えた遺構分を加え、本節で各トレンチごとに特徴的なものを優先して説明し、精査した遺構のSI-２、SI-６、SK-１は次節で説明するが、ページ数の関係ですべての底部を割愛した。

他の遺物については、すべてを一括して本節で説明する。

3．土器（第12図～第30図、図版７～９・11・12）

出土土器約30箱のうち、本項で取り扱う土器の総量は、遺構出土分を除くと22箱を数える。本来ならば出土点数をカウントし、記述のための便宜的な分類にせよ類別毎の傾向を示すべきであるが、多量の点数を数的処理する時間的な余裕はなく、型式学的な認識不足もあって、なし得なかった。ここでは既存の型式名に即して、相対的な数量と出土傾向を概略的に記するにとどめた。なお、多量に出土したが二次堆積であった13T分は、除外している。

称名寺式　前回の調査では出土していないが、伊丹山遺跡でもみられるⅡ式が数点出土している。とくに10Tでは貝層下の包含層から検出されている。

堀之内１式　前回の調査同様、最も多く出土しており、２T・４T・５T・９Tを除き、各トレンチや貝層出土土器の主体となる。遺構でも時期のわかるものではSI-８を除き、すべてとなる。１式でも中・新段階が主体となる。

堀之内２式　やはり前回同様に１式に次ぎ、各トレンチで出土した。なかでも10T・11Tで良好な資料が検出された。11Tでは貝層の一つに伴うであろう。

加曽利Ｂ式　前回よりも出土量は少ないが各トレンチで散見され、２T・４T・11T、SI-８では目立った。１式は僅少で、２式以降が主体となる。

曽谷式　認識不足のため、特徴的な部位以外、前後型式との識別はできなかったと思うが、前後型式がそれほどの出土量でないため、少量であろう。

後期安行式　前回は貝層外縁の傾斜地に多く出土したが、ここに近い７Tがやや多い程度で、他は１T・２T・５T・10T・11Tで散見される。Ⅱ式主体。

晩期安行・姥山式　前回は後期安行式と同様の傾向だったが、今回は全体的には少量である。弧状貝層の途切れる２T、貝層内側の５Tでややまとまって出土した。

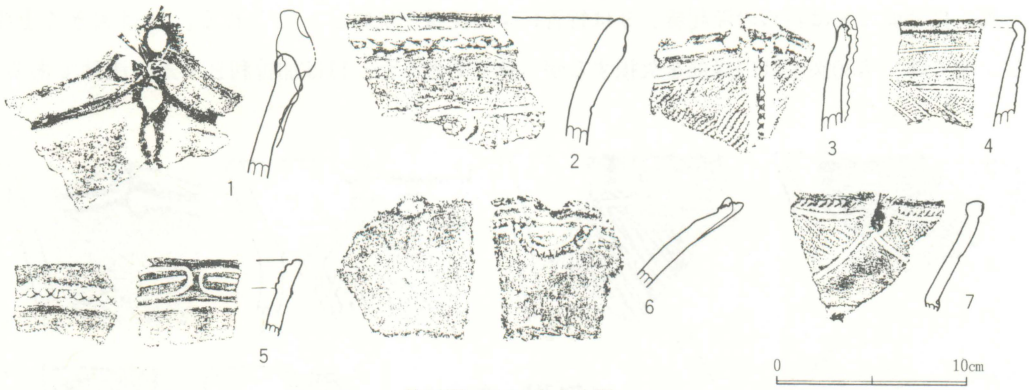
大洞式系　前回同様に少量の出土だが、今回は５TでＣ１式系が３点出土した。

関西系晩期　前回同様に少量の出土だが、今回は２Tで橿原文様の鉢が出土した。

検出面までの遺構調査分を含め、順を追って説明する。

1Ｔ（第12図１～７、図版７）

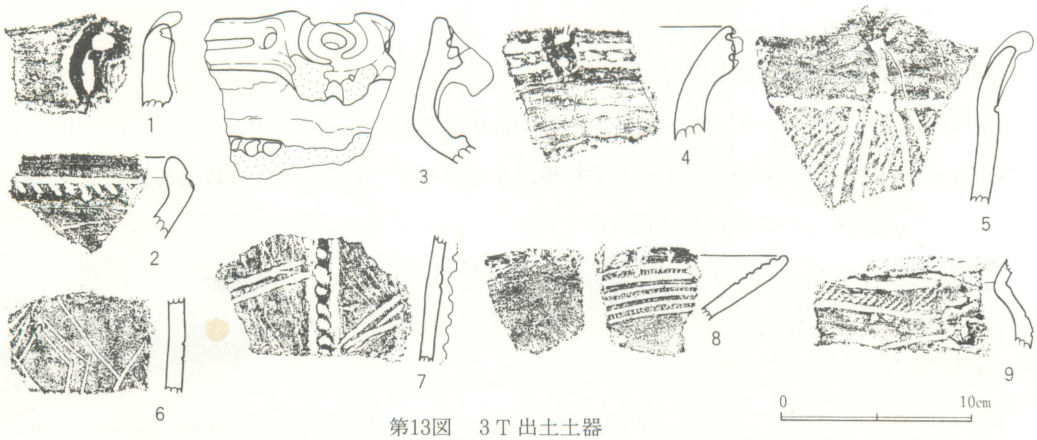
加曽利Ｂ式や曽谷式、後期安行式が少量出土したが、主体は検出された遺構群の帰属時期と思われる堀之内式である。１～３は堀之内１式である。その特徴から１・２は綱取式と類縁関係のある古段階、３は新段階となろう。４～６は堀之内２式である。４は磨消を伴う幾何学文が描かれる。５は口端部内面に沈線による区画文を有す。６は口端部が押捺されくぼみ、口端部内面に隆起線の貼付文がある鉢である。７は加曽利Ｂ３式で、大波状口縁であろう。



第12図　１Ｔ出土土器

3Ｔ（第13図１～９、図版７）

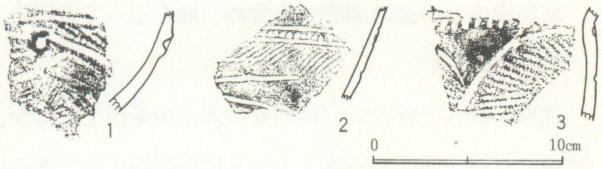
堀之内式が主体で、他には加曽利Ｂ式が少量出土している。堀之内１式新段階のSI-２の検出位置である。１～７は堀之内式である。１～５は１式古段階に比定できるもので、２・４は西関東系、他は綱取式系と思われる。３は胴部で大きく膨らむ器形となろう。６は１式新段階あるいは２式、７は１式新段階に比定されよう。８は口端部内面に文様帯をもつ加曽利Ｂ１式の鉢、９は口頸部以下が最も膨らむ器形で、加曽利Ｂ２式に比定されよう。



第13図　３Ｔ出土土器

１Ｔ・３Ｔ拡張区（第14図１～３）

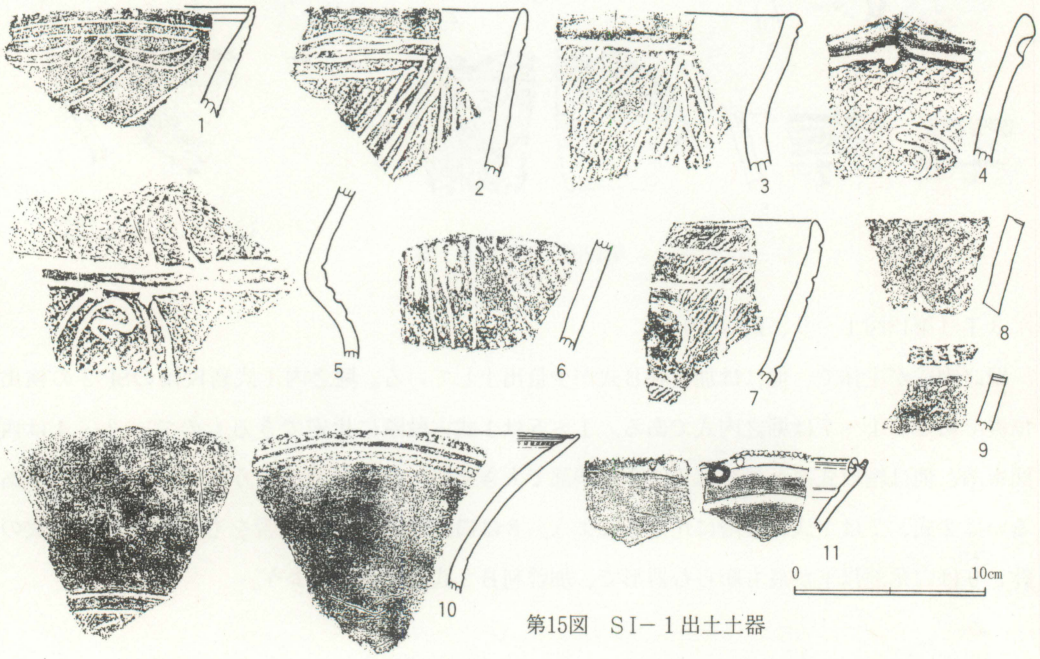
時期的傾向は１Ｔと同様である。１は堀之内式、２は加曽利Ｂ２式、３は加曽利Ｂ３式あるいは曽谷式の胴部である。



第14図　１Ｔ・３Ｔ拡張区出土土器

ＳＩ－１（第15図１～11・第30図１、図版７）

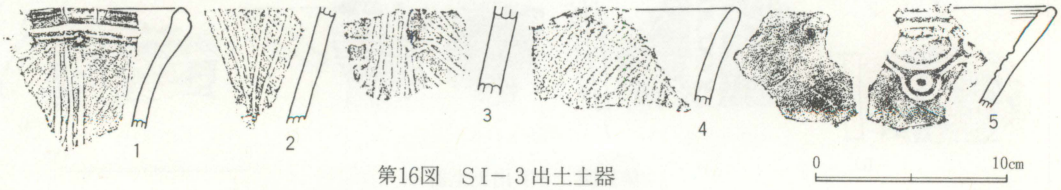
検出面の埋土上面や貝層中に包含されたもので、帰属時期と考える堀之内式を主体とするが、加曽利Ｂ１式まで混入する。１～・10は堀之内式で、１・７・10・第30図１が２式、他は１式であろう。４・５が古段階で、他は中段階以降と思われる。８・９も堀之内式と思われるが、上端の接合面に８は斜めの隆起線、９は竹管による沈線が焼成前に付される。10は大きく上半部が開く鉢、第30図１は口縁部を欠損するが、鉢であろうか。11は加曽利Ｂ１式の浅鉢である。



第15図　ＳＩ－１出土土器

ＳＩ－３（第16図１～５、図版７）

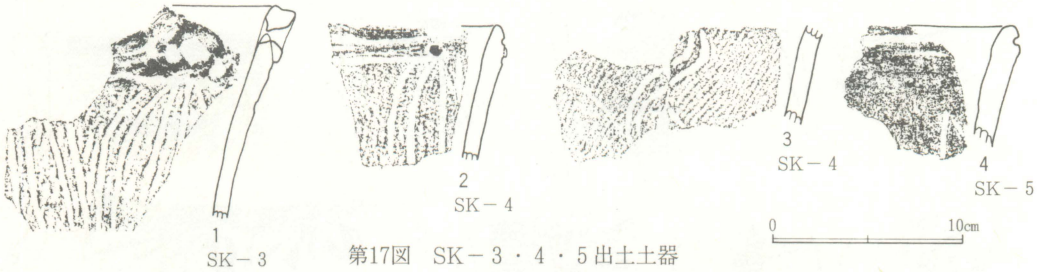
検出面埋土中の資料で、遺構帰属時期の可能性がある堀之内式を主体とする。１～４は古段階を含まない１式であるが、いずれも文様構成などが不明であるため、中段階以降としておく。５は堀之内２式あるいは加曽利Ｂ式の鉢である。



第16図　ＳＩ－３出土土器

SK－3・4・5（第17図1～4、図版7）

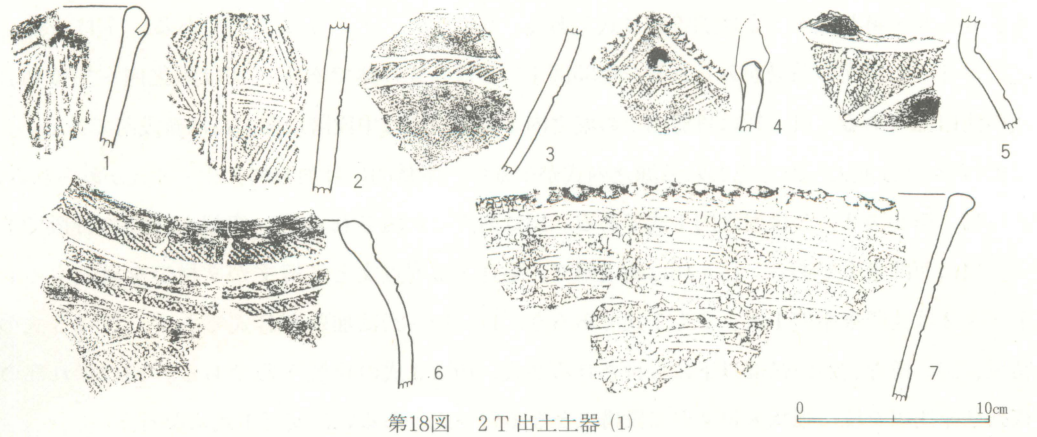
いずれも検出面埋土中資料で、すべて遺構帰属時期の可能性のある堀之内1式だが、1・2が中段階と思われる他は細別できない。1はSK-3、2・3はSK-4、4はSK-5よりの出土である。



第17図　SK－3・4・5出土土器

2T（第18図1～第19図28、図版7）

加曽利B式を主体とし、次いで晩期前半の土器群が少量ながら、良好な資料を提供している。他に堀之内式、曽谷式、後期安行式が出土している。1・2は堀之内式で、集合沈線間の充填から新段階と思われる。3～5は加曽利B式の精製土器で、3は1式、5は算盤玉の器形の2式、4は3式である。7・10は加曽利B式の粗製土器で、10は2式、7は3式である。6・8・11～13・15～18は後期安行式である。8が2式の粗製土器である他は、精製土器である。6・12は1式で、6は胴部上半の襷掛け状入組文が特徴的である。13は帯縄文の状態からすると、曽谷～安行1式であろうか。15～18は2式で、刻み目の付く細隆帯、貼瘤が認められる。15と18は台付鉢になろうか。14・19～29は晩期前半の土器群である。14は2式系譜の3a式で、三角連結部に連続して豚鼻状貼瘤が付くが、縦長の上部は下半が突出する。19～25は玉抱き三叉文や三叉文、入組文などが特徴的で、一部には磨消が認められる。このうち19・22・24は3a式で、19は鉢、21・22は浅鉢である。21・28は3b式で、28（粗製）の枠状区画間には偏平な貼瘤が付く。他は3a～3b式としておく。27は外傾頚部が縄文帯となる。29は関西系晩期の鉢で、橿原文様成立期の相対ジグザグ文が認められるが、施文順序などに本来のものと異なりをみせる。この文様モチーフは関東地方では稀少例だが、安行3b式に併行しようか。



第18図　2T出土土器（1）

第19図　2Ｔ出土土器 (2)

4Ｔ・SI－8（第20図１～22・第30図２～５、図版８）

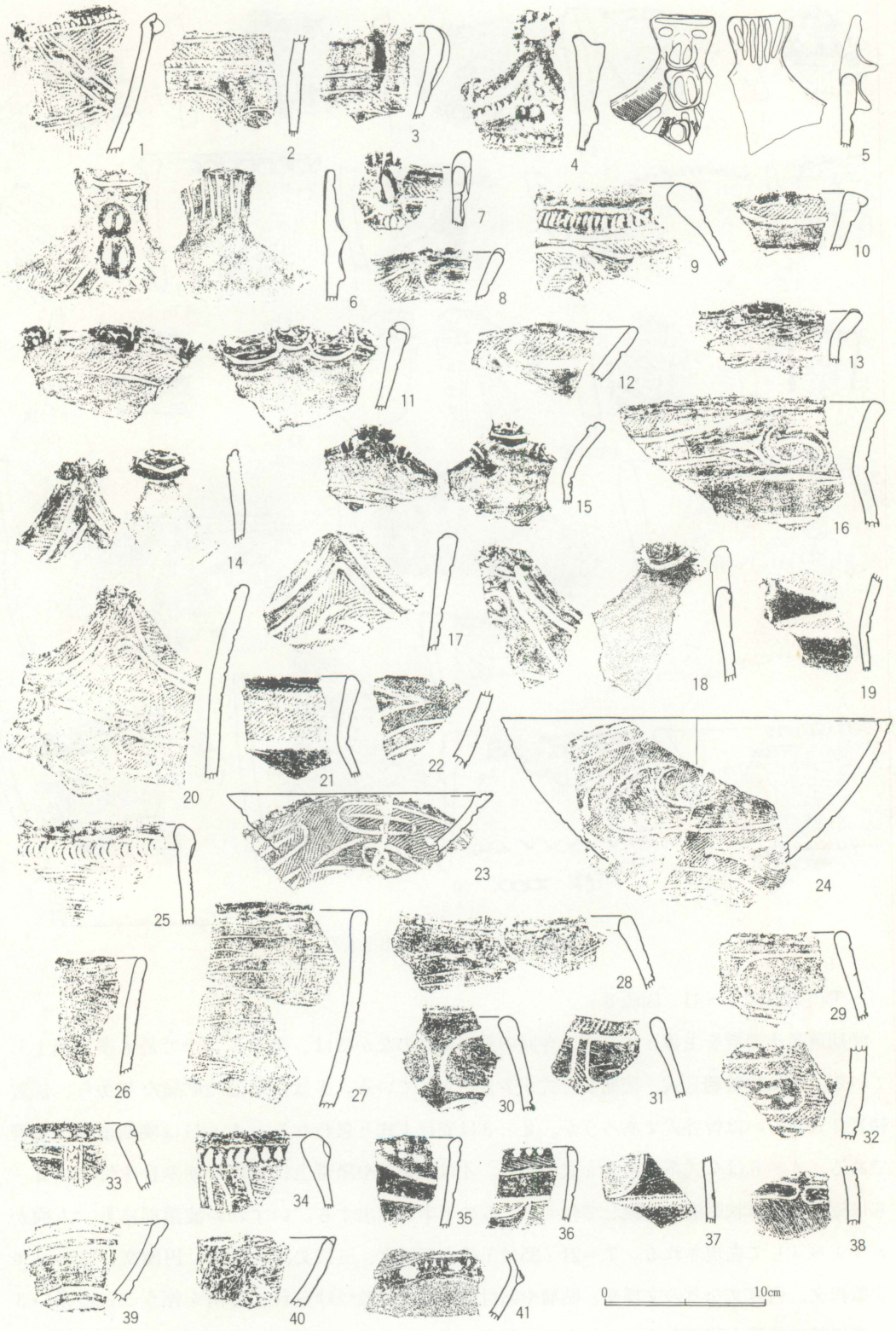
4Ｔは貝層の上面までと、北壁に沿って一部を掘り下げた範囲の資料である。従って、堀之内式期と考えられる貝層や、以下の包含層から得られた資料は少量である。全体では加曽利Ｂ式を主体的に、堀之内式・後期安行式も少量出土しており、貝層からは微量の堀之内式が出土した。１～10・第30図４・５は4Ｔ出土である。１～５は堀之内１式で、１を除き新段階である。４・５は同２式で、４は口縁部が開く鉢、５は壷様の特殊な器形で、内面に蓋受け様の稜を有す。６～９・第30図４・５は加曽利Ｂ式である。６は１式、７・８は２式である。７は浅鉢、８には「つ」字文の系譜がみられる。第30図４・５は２式の鉢である。10は堀之内～加曽利Ｂ式の注口部である。11・12は貝層出土の堀之内１式で、12は中段階以前、11は新段階である。

SI-8からは混入したと思われる堀之内式が少量で、主体的には加曽利Ｂ２・３式がみられる。13～16・第30図２・３は堀之内１式である。13は列点文が施されるが、突起が該期の特徴である。14は西関東系である。15・16は新段階で、集合する列点文と沈線文が文様帯を構成する。第30図２は西関東系の１式、３も１式であろう。17・19～22は加曽利Ｂ式である。17は３式の精製、20は紐線文が口縁部以下にも付される２式、19は３式の粗製土器である。18は括れ部の複列結節沈線を境に弧状入組文が二段構成となる曽谷式、あるいは安行１式になろうか。

第20図　4T・SI－8出土土器

5T（第21図1～41、図版8）

晩期前半土器群を主体とするが、今回の調査地点のなかでは、本トレンチで最も多く出土している。他に加曽利B式、後期安行式が少量出土している。1は口端部の貼瘤などから、加曽利B3式あるいは曽谷式であろうか。2・3は安行1式と思われる。4～41は晩期前半土器群である。4～6は2式系譜の3a式である。4は波頂部や隆帯上に幅広な刻み目を付す。5・6は縦長の豚鼻状貼瘤が連続して付くが、5の下半は突出する。いずれの波頂部にも、人面がデフォルメして表現される。7～21・35は玉抱き三叉文、三叉文、入組文、円圏文、ステッキ状孤線文、列点文などの文様や、貼瘤や貼付隆起線に特徴づけられ、磨消を伴うことが多い3a式以降の精製土器である。7・9は安行3a式で、9は口端部に紐線文が巡る。9は安行3a式あるいは3b式で、8・10～20は3b式（姥山式）である。10・11などは浅鉢と思われる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
10cm

第21図　5T出土土器

14・17～20は安行３ｂ式（姥山式）の大波状口縁となるが、このうち18～20は姥山式としてよいであろう。14・17は明瞭な沈線そのものの描出と、文様構成に前浦式への系譜がうかがえる。21は外傾する頸部に縄文帯が認められる。22～24は大洞Ｃ１式系で、いずれも鉢であろう。ただ磨消処理は丁寧でなく、縄文施文部が突出しない。39は沈線文で構成される鉢で、大洞ＢＣあるいはＣ１式か。25～38は安行３ａ式以降の粗製土器で、枠状区画文のある29～32・38、条線の26～28、細密沈線充填の36・37は安行３ｂ式（姥山式）である。40・41は無文の鉢である。

７Ｔ（第22図１～10・第30図６、図版９）

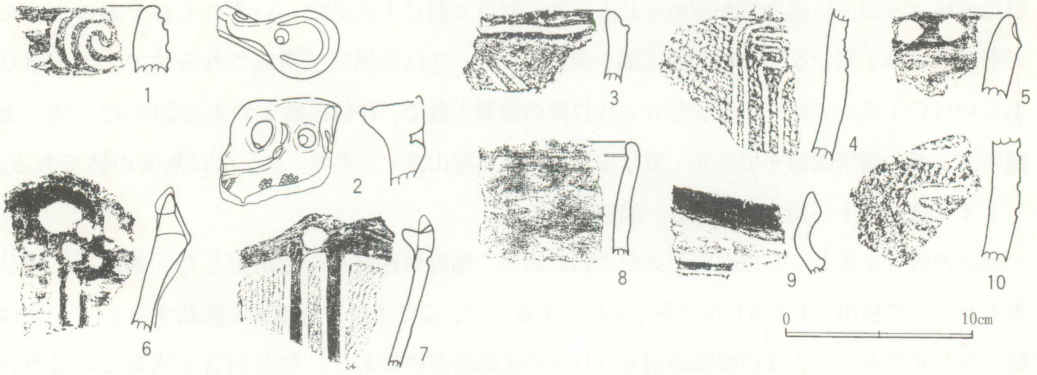
堀之内式を主体とし、後期安行式がこれに次ぎ、加曽利Ｂ式も少量出土した。堀之内１式は本トレンチで検出されたＳＩ-６で多くを紹介するので、ここではそれ以外を記載する。１・２は堀之内２式である。３は口端部の刻み目以下の沈線帯が稀である。加曽利Ｂ３式あるいは曽谷式であろうか。４～10、第30図６は後期安行式である。４・５は帯縄文と縦長の貼瘤が特徴的な１式精製土器で、４は縄文帯が４条ある大波状口縁である。６～９、第30図６は粗製土器。６・７・第30図６は１式で、６には２式につながる縦沈線がみられる。８・９は口縁部が内傾する２式で、９はあるいは３ａ式までの可能性があろう。10は２式の注口土器の注口部である。

第22図　７Ｔ出土土器

８Ｔ（第23図１～10、図版９）

出土土器のほとんどが堀之内式で、１式が主体となる。５・８に２式の可能性がある他は、１式である。６は古段階、１は渦巻沈線文を口縁部区画の単位文とする西関東系の中段階、２・

4・10は中段階以前と思われる。10はＰ１からの出土である。７は口唇部がＳ字状にねじれ、端部以下には、整った沈線で区画された丁寧な磨消が施される。新段階であろうか。



第23図　８Ｔ出土土器

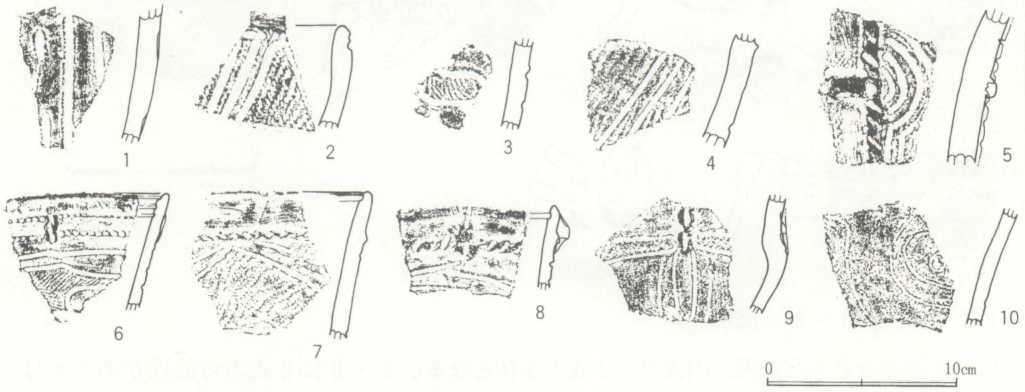
９Ｔ（第24図１～５）

耕作が深くおよんでいたために少量の出土で、図示したもの以外は摩耗の著しいものが多かった。１から４は後期安行式で、２は２式、４は１式である。５は安行３ａ式であろう。

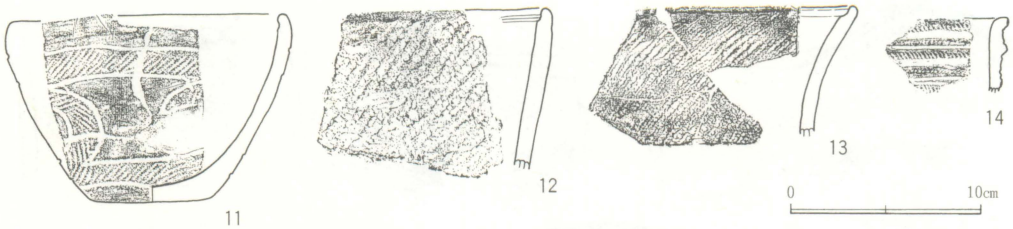
第24図　９Ｔ出土土器

10Ｔ（第25図１～第26図14、図版９）

貝層およびSI-７の上面までと、トレンチ西壁に沿って掘り下げた範囲の資料である。堀之内式を主体的に出土した。他に称名寺式１片、後期安行式が少量出土した。１は貝層下の包含層から出土した称名寺Ⅱ式である。２～13は堀之内式で、２～５は１式である他は、口端部内面の稜線、「８」字貼付文、刻み目付き隆起線、磨消が発達した幾何学的構成の区画文などが特徴的な２式である。このうち11は鉢である。14は安行２式の台付鉢であろう。



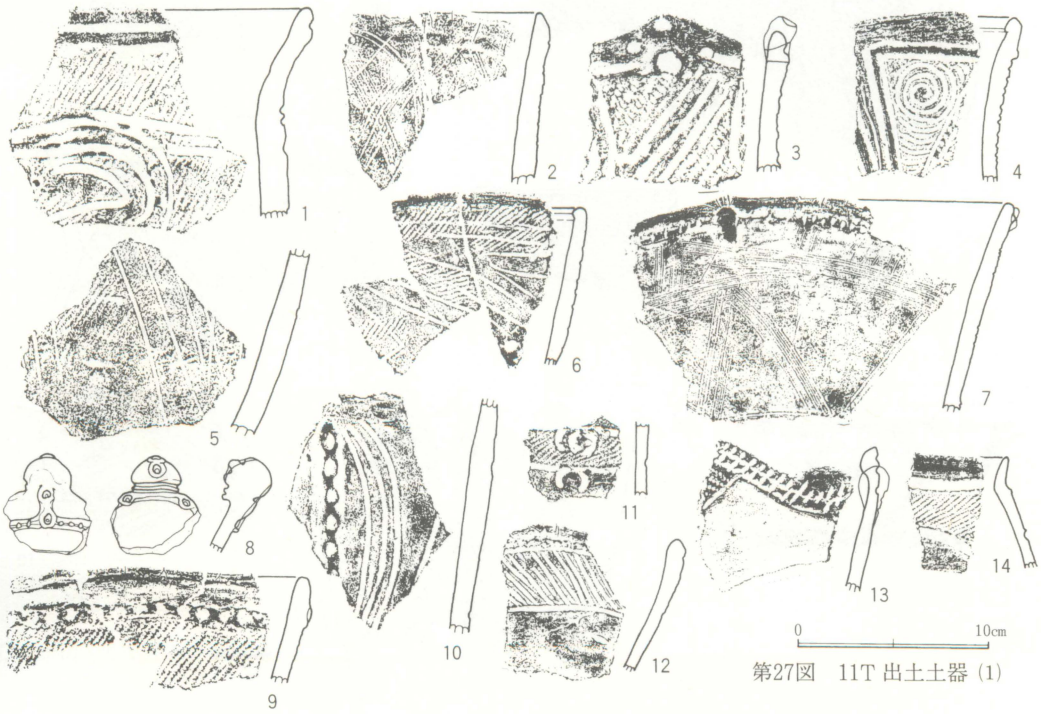
第25図　10Ｔ出土土器 (1)



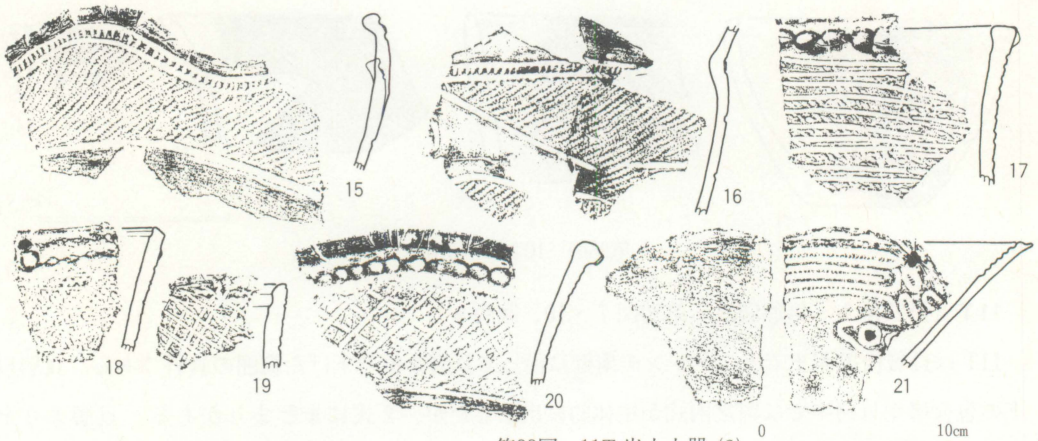
第26図　10T 出土土器 (2)

11T（第27図１～第28図21・第30図７～10、図版９）

11T は貝層検出面までと、トレンチ南壁に沿って貝層を掘り下げた範囲の資料である。貝層以下の包含層や貝層中では堀之内式が主体的に出土したが、２式にまとまりがある。貝層より上層では堀之内式～後期安行式が出土するが、上層になるにつれて漸次、新しいものが主体となる傾向がある。１～10・第30図７～９は堀之内式である。１～５・第30図７は１式で、１・３は太沈線から古段階、４・５・第30図７は新段階と思われる。６～10は２式である。６は縄文を充填しているが、必ずしも区画内に施されない。７・第30図８は口縁部の隆起線以下に幾何学的構成の文様帯がつくられるが、７は沈線だけによる描出である。８は小形深鉢の口端部に付く突起だが、加曽利Ｂ１式まで継続するものである。10は凹み付き隆起線が垂下するが、胴部文様帯の中軸上に付されよう。11～21・第30図10は加曽利Ｂ式で、11～16・21は精製土器である。11・13・21は１式で、21は浅鉢である。14・16は２式で、14は算盤玉形の鉢である。12・15・第30図10は３式で、第30図10は内屈する口縁部に「つ」字文系譜の文様や孤線文が施され、刻み目付き隆帯以下には斜条線が施される。17～20は粗製土器で、19・20は２式である。



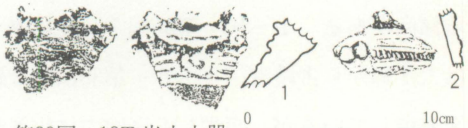
第27図　11T 出土土器 (1)



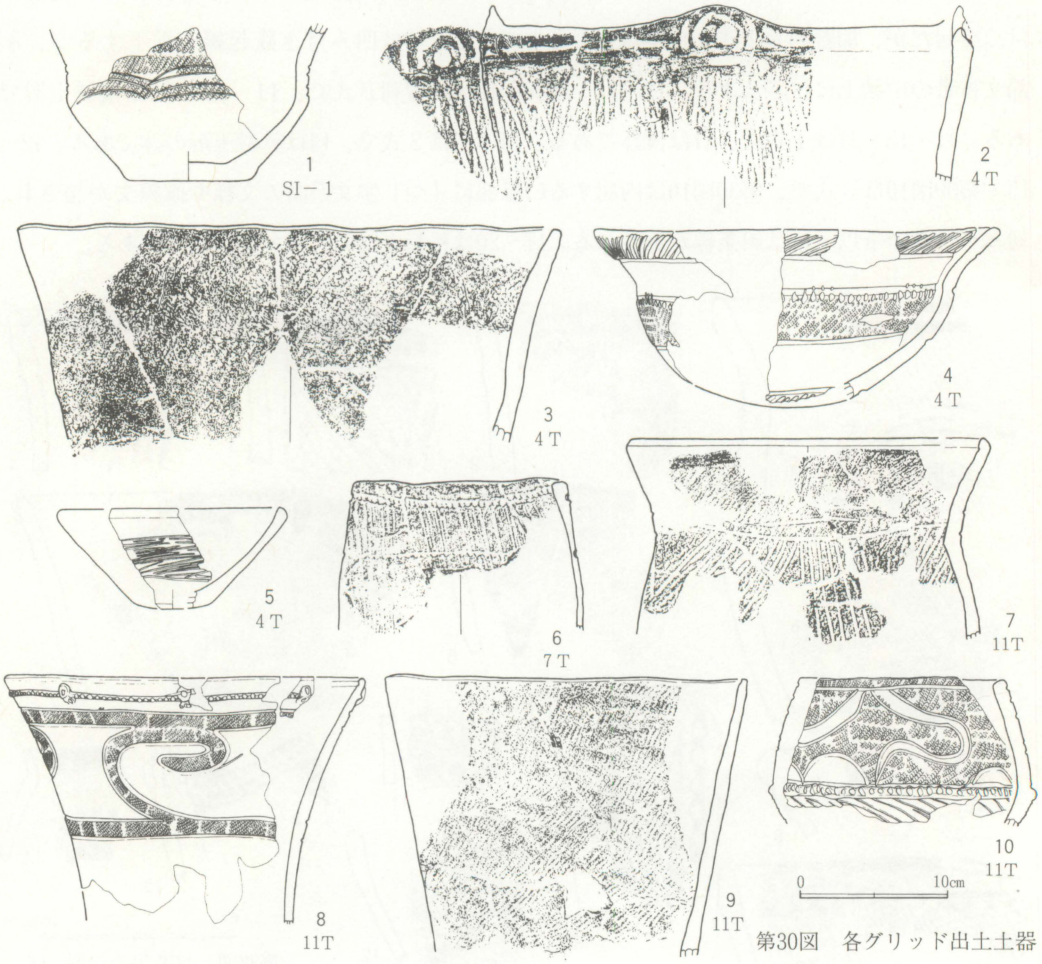
第28図　11T 出土土器 (2)

12T（第29図１・２）

少量の出土で、摩耗したものも認められた。堀之内式、加曽利Ｂ式、後期安行式が出土している。１はＢ１式の鉢、２は安行２式の精製土器である。



第29図　12T 出土土器



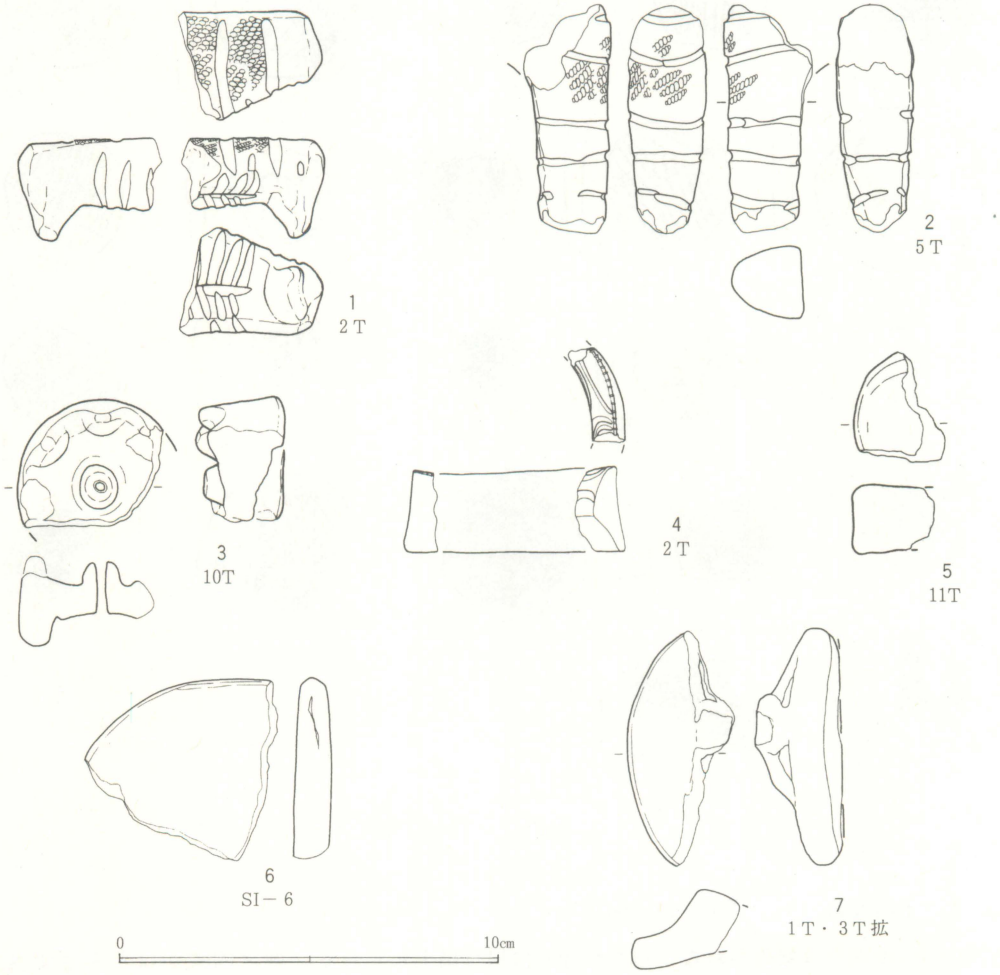
第30図　各グリッド出土土器

3．土製品（第31～33図、図版13、表３）

今回の調査で出土した土製品は、土偶２点、土製耳飾３点、蓋状土製品１点、板状土製品１点、土製円盤22点、土器片錘14点である。ここでは、土偶～板状土製品までの土製品と、土器片利用の再生品である土製円板、土器片錘にわけて簡略に述べ、属性を表３で示した。

(1) 土製品（第31図１～７、図版13）

１・２は安行式のみみずく土偶で、１は左手、２は右足である。時期的特徴のある文様を施す部位ではないため決め手を欠くが、いずれも３ａ～３ｂ式と考えられる。３～５は耳飾である。３は中心に穿孔がされ、周縁に貼瘤が巡ろう。４は滑車形で、端部と内面に沈刻した文様が施される。いずれも晩期前半に比定できるか。５は素文のため、後期以降としておく。６は後期前半の蓋状土製品で、つまみは複数か。７は板状土製品で、表裏ともミガキが丁寧である。欠損のため不明だが、土製円板の可能性はあろうか。出土遺構から堀之内式期と考えられる。

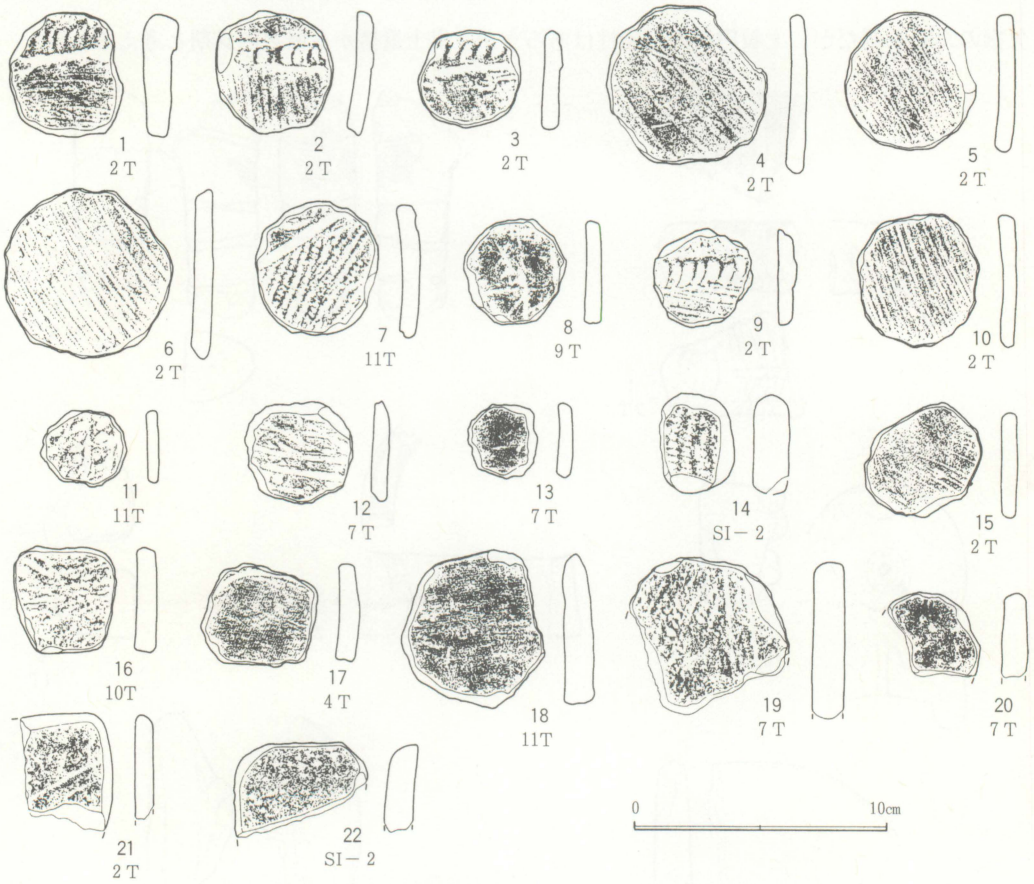


第31図　土　製　品

以上、土偶については従来の13点（山本 1989）に２点を追加した。その他は前回の報告資料（野村 1973）に追加するもので、耳飾は３点を追加し６点、蓋状土製品は１点を追加し７点となった。また新たに、板状土製品が１点出土している。

(2) **土製円板**（第32図１～22、図版13）

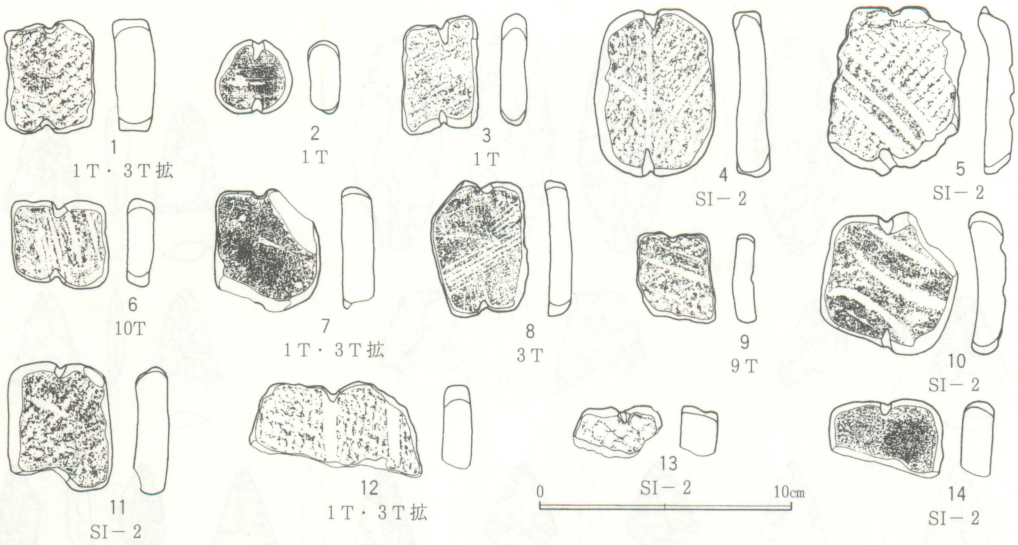
22点が出土したが、形状や計測値にばらつきがある。このうち時期の判別したものは堀之内１～安行式で14点を数えるが、時期的には前回の報告資料９点の範疇と思われる。少数の堀之内１式と加曽利Ｂ式を除き、10点が安行式粗製土器となるが、これらはいずれも円形に仕上げられ共通性がある。５を除き、薄く曲率の小さい土器上半部を使用しているが、製作にあたり選択がはたらいたのであろうか。



第32図　土 製 円 板

(3) **土器片錘**（第33図１～14、図版13）

前回の調査では報告されなかったが今回は14点出土している。堀之内式がほとんどすべてと思われる。観察可能な１～10では、素材となった土器の正位軸に対して直交して切り込みを入れたもの６点（３～７・９）、平行するもの２点（１・２）、斜めのもの２点（８・10）となる。



第33図　土器片錘

土製品

挿図No.	注記No.	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	時期
1	2T－66	土偶	2.7	3.8	19.9	安行3a～3b
2	5T－3	土偶	6.0	2.4	25.1	安行3a～3b

挿図No.	注記No.	種別	推定径	現存高	重さ	時期
3	10T－2	耳飾	4.6	2.4	22.2	晩期前半
4	2T－66	耳飾	5.8	2.2	4.2	晩期前半
5	11T－2	耳飾	2.0	1.8	9.4	後期以降
6	SI－6－17	板状土製品	5.2	1.0	22.8	不明
7	1T・3T拡	蓋状土製品	8.1	2.2	17.7	後期前半

土器片錘

挿図No.	注記No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	長短比	重量 (g)	保存
1	1T・3T拡－1	4.4	3.4	0.773	30.0	
2	1T－1	3.1	2.9	0.935	11.9	
3	1T－3	4.5	3.1	0.689	17.6	
4	SI－2－104	6.5	4.8	0.738	48.8	
5	SI－2－468	6.4	5.3	0.828	46.3	
6	10T－4	3.9	3.4	0.872	17.4	
7	1T・3T拡－1	4.2	4.2	1.000	(28.1)	一部欠
8	3T－1	5.2	3.9	0.750	22.9	
9	9T－1	3.5	3.0	0.857	(10.9)	一部欠
10	SI－2－128	5.4	5.3	0.981	(36.7)	一部欠
11	SI－2－414	4.9	4.0	0.816	(34.3)	半欠
12	1T・3T拡－1	(6.8)	(3.7)	－	(33.6)	半欠
13	SI－2－465	(2.0)	(3.5)	－	(10.3)	半欠
14	SI－2－468	(4.5)	(2.9)	－	(16.5)	半欠
平均		5.0	4.2	0.855	33.9	
最大		6.5	5.3	1.000	48.8	
最小		3.5	3.0	0.738	17.4	

土製円板

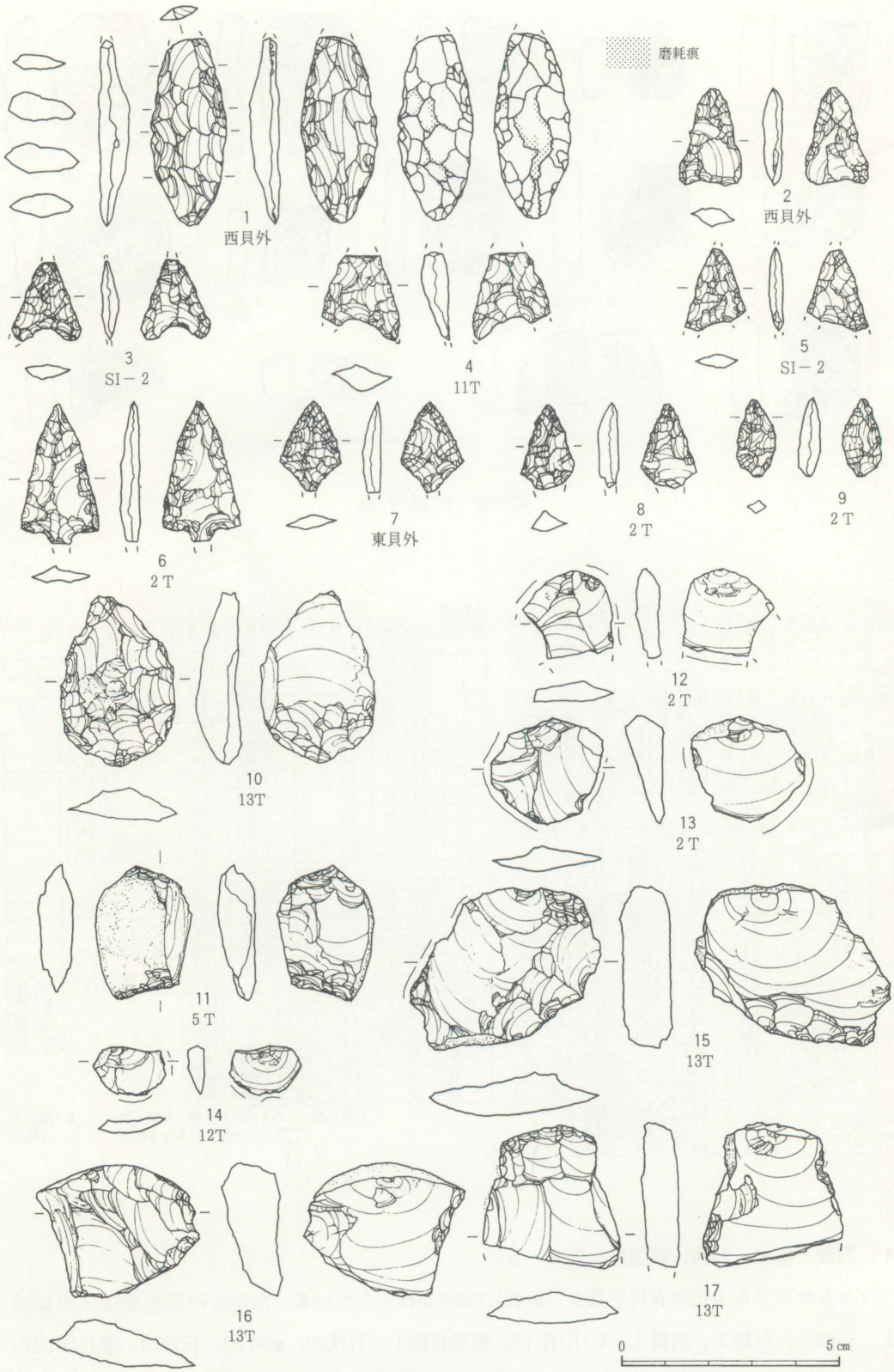
挿図No.	注記No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	長短比	重量 (g)	分類	時期	保存
1	2T－65	4.7	4.5	0.957	28.2	A1	安行粗製	
2	2T－20	4.7	4.6	0.979	18.2	A1	安行粗製	
3	2T－66	4.0	3.7	0.925	13.0	A1	安行粗製	
4	2T－66	6.3	6.0	0.952	(33.4)	A1	安行粗製	一部欠
5	2T－66	5.3	5.1	0.962	23.1	A1	安行粗製	
6	2T－17	6.6	6.5	0.985	38.0	A1	安行粗製	
7	11T－1	5.0	4.9	0.980	25.4	A1	加曽利B	
8	9T－1	4.1	4.0	0.976	13.8	A1	安行粗製	
9	2T－66	4.0	3.7	0.925	11.3	A2	安行粗製	
10	2T－66	5.0	4.8	0.960	17.4	A2	安行粗製	
11	11T－50	3.3	2.9	0.879	6.2	A2	加Bの粗製?	
12	7T－1	4.2	3.9	0.929	13.1	A2	加Bの粗製?	
13	7T－1	2.9	2.8	0.966	5.7	A2	?	
14	SI－2－462	3.8	3.0	0.789	17.9	B	?	
15	2T－66	4.6	4.0	0.870	13.6	C	安行粗製	
16	10T－59	4.1	4.1	1.000	18.2	C	?	
17	4T－20	4.6	3.9	0.848	18.5	C	?	
18	11T－1	6.0	5.6	0.933	44.4	C	?	
19	7T－1	(6.2)	(6.0)	－	(48.5)	－	堀之内1	破損
20	7T－1	(3.5)	(3.2)	－	(11.5)	－	?	破損
21	2T－66	(4.5)	(3.7)	－	(16.5)	－	?	破損
22	SI－2－463	(5.3)	(3.7)	－	(21.1)	－	?	破損
平均		4.6	4.3	0.934	19.2			
最大		6.6	6.5	1.000	44.4			
最小		2.9	2.8	0.789	5.7			

分類凡例：　A1…円形、擦った箇所あり　B…楕円形
A2…円形、打ち欠きのみ　C…不整形

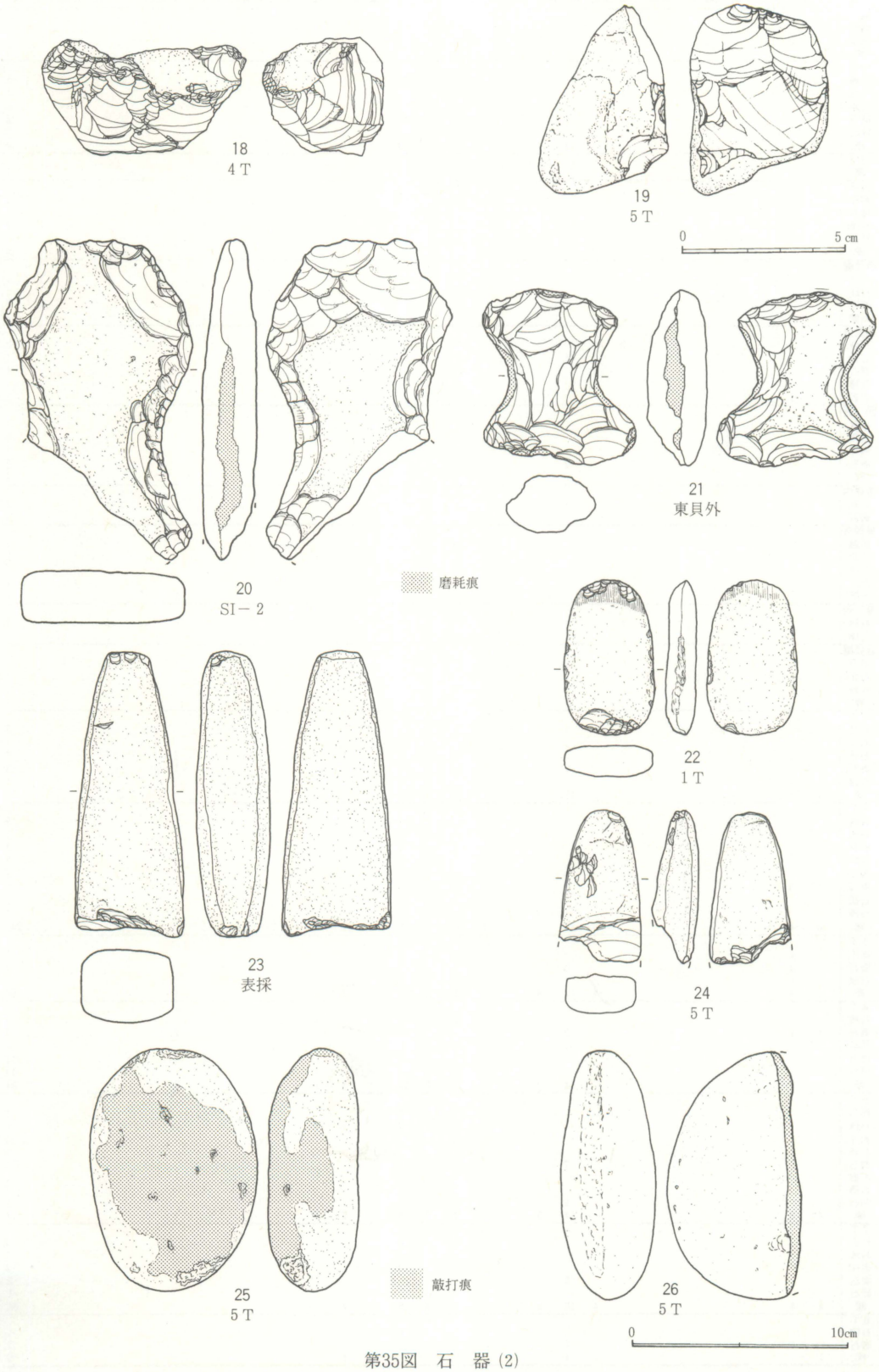
表3　土製品属性

4．石器（第34・35図、図版14、表4・5）

コラムサンプル出土の資料を除き、総数1,196点が出土している。全体の石器組成は、尖頭器1、石鏃9、石錐1、削器1、U・R-fl 26、楔形石器1、石核29、剥片20、石斧20、磨石類127、石皿18、叩石9、石棒類11、砥石3、軽石製品37、礫 880、石製品1、不明2となっている。


磨耗痕
1
西貝外
2
西貝外
3
SI－2
4
11T
5
SI－2
6
2T
7
東貝外
8
2T
9
2T
10
13T
12
2T
13
2T
11
5T
15
13T
14
12T
16
13T
17
13T
0
5cm

第34図　石　器 (1)


18
4 T
19
5 T
0
5 cm
20
SI－2
磨耗痕
21
東貝外
22
1 T
23
表採
24
5 T
25
5 T
敲打痕
26
5 T
0
10cm

第35図　石　器 (2)

器種	流紋	安山	多安	玄武	閃緑	石斑	蛇紋	黒曜	砂岩	硬砂	泥岩	粘板	珪質	珪頁	頁岩	チャ	緑凝	凝灰	玉髄	レキ	石英	緑片	結片	ホル	軽石	リモ	ヒン	石閃	不明	計
SI-1																														
剥片								1																						1
石皿		1																												1
礫	1									1						1														3
SI-2																														
石鏃								1								1														2
UR								1																						1
石斧										1																				1
磨石		1								1																				2
軽石																									5					5
礫	1	7								14	1					19		1	1											44
SI-3																														
礫	1																													1
SI-6																														
剥片																2														2
磨石		1																1												2
石棒																						1	1							2
軽石																									7					7
礫									3	1	1					7		3												15
西貝層																														
UR																1														1
石核														1		1														2
剥片																1														1
石棒																							1							1
西貝外																														
石鏃								2																						2
石斧										1																				1
磨石						1																								1
石棒																						1								1
尖頭		1																												1
西　表																														
UR																			1											1
石核				1												2														3
剥片														1		1														2
磨石		1								2																				3
礫													1									1								2
東貝内																														
石斧										1												1								2
磨石		1																												1
東貝外																														
石鏃																1														1
UR																1			1											2
石核																1														1
剥片								1																						1
石斧																								1						1
東　表																														
石核								1																						1
石棒		1																												1
北貝層																														
磨石										1																				1
石皿		1																												1
叩石		1																												1
礫													1																	1
1 T																														
UR										1		1			1															3
剥片																		1												1
石斧		1								3								1						2						7
磨石		1								1														1						3
石皿		1																												1
礫	1	11							1	11				2		23		4			1					3				58
2 T																														
石鏃								1								1														2
石錘																1														1
UR								1								2														3
石核															1	1														2
剥片										1					1															2
磨石	1	3								3					1															8
石皿										1																				1
石棒																						1								1
礫	6	24							5	47			4	6	1	120		11	3				1	10		1			2	241
3 T																														
剥片		1																												1
磨石		2								5																				7
石皿		1																												1
礫	4	4							4	12	4			2	3	25		3	1		1			1						64
4 T																														
石核														1					1											2
磨石	1	1								2		1												2						7
叩石										1																				1
砥石																							1							1
軽石																									11					11
礫		8								14	3				2	28		3	1					2						61
5 T																														
楔形																1														1
石核														1		4			1											6
剥片														3																3
石斧							1																							1
磨石						1				7																				8
石皿									1																					1
石棒																						1	1							2
叩石										2																				2
礫	4	8								14	5			2	2	6		2	1					1						45
7 T																														
UR																3														3
石核																1														1
剥片																2														2
磨石										2														1						3
軽石																									1					1
礫	4	4							4	10	2				3	8		1												36
8 T																														
石核																1														1
磨石		1								1																				2
礫	1	1							1	4				1				1												9

器種	流紋	安山	多安	玄武	閃緑	石斑	蛇紋	黒曜	砂岩	硬砂	泥岩	粘板	珪質	珪頁	頁岩	チャ	緑凝	凝灰	玉髄	レキ	石英	緑片	結片	ホル	軽石	リモ	ヒン	石閃	不明	計
9 T																														
U R															1	1														2
砥石											1																			1
礫	3								6	5					2	12		2												30
10 T																														
石核																1														1
剥片																1														1
磨石	1	2								1																				4
軽石																									6					6
礫		2							2	3					1	11			1											20
11 T																														
石鏃																1														1
U R								1																						1
剥片														2																2
磨石		2								1																				3
叩石										1																				1
軽石																									3					3
礫	1	4							1	6	4					9		1			1		1	1		1				30
12 T																														
U R														1																1
礫	2	1								3						5														11
13 T																														
石鏃																1														1
削器														1																1
U R										1				4	1	1														7
石核																7								2						9
剥片										1																				1
石斧		2								2														2						6
磨石	5	28	1		2					29		1				2								1			1	1		71
石皿	2	5	2							2						1														12
石棒																						2	1							3
叩石	1	1								1						1														4
砥石										1																				1
軽石																									4					4
礫	25	31							6	62	6		4		1	55	1	3	9	1	1		1	3						209
石製								1																						1
不明																						2								2
表採																														
U R																			1											1
石斧																								1						1
磨石										1																				1

出土石器組成表凡例
流紋＝流紋岩 安山＝安山岩 多安＝多孔質安山岩 玄武＝玄武岩 閃緑＝閃緑岩 石斑＝石英斑岩 蛇紋＝蛇紋岩 黒曜＝黒曜石 硬砂＝硬砂岩 粘板＝粘板岩 珪質＝珪質岩 珪頁＝珪質頁岩
チャ＝チャート 緑凝＝緑色凝灰岩 凝灰＝凝灰岩 レキ＝レキ岩 緑片＝緑色片岩 結片＝結晶片岩 ホル＝ホルンフェルス リモ＝リモナイト ヒン＝ヒン岩 石閃＝石英閃緑岩

表4 石 器 組 成

No.	位 置	器 種	石 材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	No.	位 置	器 種	石 材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）
1	西貝外	尖頭器	安山岩	(41.7)	16.7	6.9	(5.0)	14	12 T	U·R-fl	珪質頁岩	11.1	17.8	4.0	0.7
2	西貝外	石 鏃	黒曜石	21.6	(10.1)	4.4	(1.1)	15	13 T	削 器	珪質頁岩	36.8	44.2	11.6	17.2
3	SI－2	石 鏃	黒曜石	(18.1)	15.8	4.3	(0.7)	16	13 T	U·R-fl	珪質頁岩	31.1	37.6	14.0	13.6
4	11 T	石 鏃	チャート	(19.9)	(17.9)	6.6	(1.7)	17	13 T	U·R-fl	珪質頁岩	33.5	32.0	8.6	10.2
5	SI－2	石 鏃	チャート	(18.9)	(12.1)	3.7	(0.8)	18	4 T	石 核	珪質頁岩	36.0	63.4	37.5	76.6
6	2 T	石 鏃	チャート	(32.0)	[17.9]	9.9	[(2.0)]	19	5 T	石 核	珪質頁岩	57.7	42.2	40.6	106.3
7	東貝外	石 鏃	チャート	(20.6)	14.4	4.1	(1.0)	20	SI－2	打製石斧	硬 砂 岩	(158.1)	(92.7)	25.1	(354.8)
8	2 T	石 鏃	黒曜石	(19.5)	12.5	5.0	(0.9)	21	東貝外	打製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	79.7	72.4	31.6	161.9
9	2 T	石 錐	チャート	18.0	9.1	5.2	0.8	22	1 T	礫 斧	硬 砂 岩	70.1	41.7	13.9	64.1
10	13 T	石 鏃	チャート	38.9	25.2	10.5	9.6	23	表 採	磨製石斧	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	130.5	50.3	34.0	371.9
11	5 T	楔形石器	チャート	30.8	22.5	9.0	7.3	24	5 T	磨製石斧	蛇 紋 岩	(69.6)	(37.9)	(20.8)	(72.3)
12	2 T	U·R-fl	チャート	(10.1)	(21.0)	6.1	(2.3)	25	5 T	磨 石 類	石英斑岩	111.2	77.8	41.2	548.4
13	2 T	U·R-fl	チャート	24.6	[25.6]	8.9	[4.1]	26	5 T	磨 石 類	硬 砂 岩	(113.3)	(62.3)	(43.7)	(437.4)

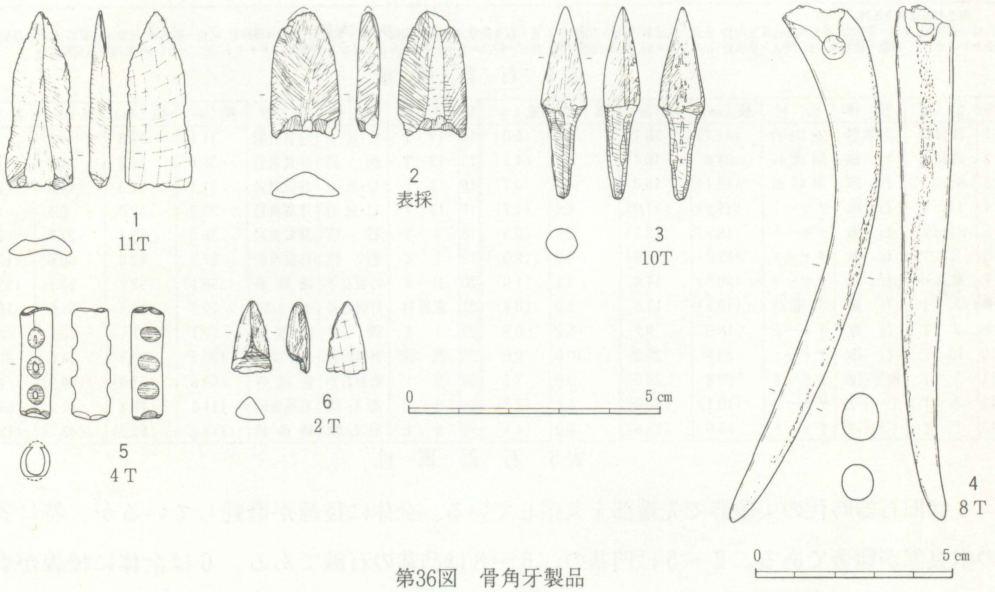
表5 石 器 属 性

1は旧石器時代の尖頭器で先端部を欠損している。全体に稜線が磨耗しているが、特に器体の中央部が顕著である。2～5は凹基の、6～8は凸基の石鏃である。6は全体に稜線が磨耗している。7の基部の両面には黒色の付着物が少量みられる。あるいはアスファルトかもしれない。9は一見、石鏃のようにも思われるが、先端部が磨耗していることから石錐とした。10は従来、尖頭器あるいは石鏃などといわれてきたものだが、「里浜貝塚」などで尖頭器様石器とよばれた石器かもしれない。ここでは一応、石鏃としておく。11はチャートの円礫を素材とした楔形石器である。12～17はU·R-flと削器である。15は刃部の角度が非常に鈍角なので、石核とした方がよいかもしれない。18・19は石核で、19にはポジティブな面がみられる。20・21は打製石斧、22は礫斧、23・24は磨製石斧、25・26は磨石類である。26は破損面にも敲打痕がみられる。

5．骨角牙製品（第36図、図版13、表６）

図示したものは６点で、属性は表６に示した。１～３は鏃である。１はイノシシ牙製で内面は入念に擦られ、縁辺はきわめて薄く仕上げられる。稜を切る加工が下端に認められるが、基部は欠損する。２は鹿角製で、基部の欠損状態から有茎と考える。３も鹿角製で、段をもつ有茎である。断面形が丸みをおびる。４は鹿角製の棒状加工品とよばれるもので、表裏からの穿孔は対向しない。用途は不明。５は鳥類管状骨製の管状の垂飾で、側面に規則的な抉りが入るが、一部は孔があくまで行われている。６はイノシシ牙製で、器種不明の加工品である。

前回の報告（野村 1973）では鏃４点、刺突具１点、銛１点、笄２点、加工痕のある鹿角２点が出土しているが、今回は貝層をあまり掘り下げなかったため、出土点数はそれほど多くない。図示したもの以外では、人工的なものかどうかは定かでないが、サメ類の椎体の穿孔品がある。他に加工痕のある鹿角４点と、哺乳類の管状骨３点が出土した。また、前回出土例のある貝器は検出されなかった。



第36図　骨角牙製品

挿図No.	注記No.	種　　別	材　　質	長さ cm	幅 cm	備　　考
1	11T－２	鏃	イノシシ牙	3.48	1.33	貝層上面。基部欠損。
2	表　採	鏃	鹿　　角	(2.45)	1.37	強く、深い擦痕あり。基部欠損するが、有茎か。
3	10T－58	鏃	鹿　　角	3.75	0.89	２層。有茎で、段をもつ。
4	8T－４	棒状加工品	鹿　　角	13.2	1.6	穿孔は対向しない２方向からで、孔径６mm。
5	4T－12	管状垂飾	鳥類管状骨	2.17	0.67	側面に抉りが入り、一部は孔があく。
6	2T－68	器種不明加工品	イノシシ牙	1.4	0.79	貝層中一括。

表６　骨角牙製品属性

6．動物遺体（表７）

確認調査という限られた範囲で検出された資料であるが、それにも関わらず多種、多量の動物遺体が発見され、前回の知見同様に、本貝塚には多くの動物遺体が包含されていることが再認識された。今回は本格的分析を記載するにいたらなかったため、概要などの中間報告を行い、将来に備えたい。なお、種同定とその所見については、軟体動物を当文化財センター　西野雅人、脊椎動物を千葉県立中央博物館　小宮　孟氏にそれぞれお願いした。

(1)　同定結果

今回、同定されたのは発掘および表面採集と、４T・11T・SI-２の貝層コラムサンプルから得られた資料で、その種名は表７に示した。全体の分析が進めば、新たな種名の追加がされよう。

１．貝　類	
腹足綱	
イボキサゴ	*Umbonium* (*Suchium*) *moniliferum*
カワニナ科種不明	Pleuroceridae gen. & sp. indet.
ウミニナ属	*Batillaria* spp.
ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
タカラガイ科種不明	Cypraeidae gen. & sp. indet.
カコボラ	*Monoplex parthenopeum echo*
アカニシ	*Rapana venosa*
イボニシ	*Thais* (*Reishia*) *clavigera*
アルテンスマツムシガイ	*Indomitrella martensi*
アラムシロ	*Reticunassa festiva*
バイ	*Balylonia japonica*
テングニシ	*Hemifusus tuba*
腹足綱種不明	
二枚貝綱	
サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
イタヤガイ科種不明	Pectintnidae gen. & sp. indet.
イタボガキ	*Ostrea denselamellosa*
マガキ	*Crassostrea gigas*
イタボガキ科種不明	Ostredae gen. & sp. indet.
イシガイ科種不明	Unionidae gen. & sp. indet.
シオフキ	*Mactra veneriformis*
バカガイ	*Mactra quadorangularis*
ミルクイガイ	*Tresus keenae*
サビシラトリガイ	*Macoma contaburata*
ムラサキガイ	*Hiatura diphos*
シオサザナミガイ科種不明	psammobiidae gen. & sp. indet.
キヌタアゲマキガイ属	*Solecurtus* sp.
マテガイ	*Solen strictus*
カガミガイ	*Dosinorbis* (*Phacosona*) *japonicus*
アサリ	*Ruditapes philippinarum*
オキアサリ	*Gomphina* (*Macridiscus*) *aequilatera*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
オキシジミ	*Cyclina sinensis*
オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
二枚貝綱種不明	
２．節足動物	
甲殻綱	
フジツボ	Thoracica fam. indet.
３．魚　類	
軟骨魚類	
板鰓亜綱	
ネズミザメ目種不明	Lamniformes fam. indet.
軟骨魚綱	
ニシン目	
ニシン科種不明	Clupeidae gen. & sp. indet.
ウナギ目	
ウナギ	*Anguilla japonica*
ボラ目	
ボラ科種不明	Mugilidae gen. & sp. indet.
スズキ目	
スズキ属	*Lateolabrax* sp.
アジ科種不明	Carangidae gen. & sp. indet.
マダイ	*Pagrus major*
ヘダイ	*Sparus sarba*
クロダイ属	*Acanthopagrus* sp.
サバ属	*Scomber* sp.
カサゴ目	
コチ	*Platycephalus indicus*
カレイ目	
カレイ科種不明	Pleuronectidae gen. & sp. indet.
フグ目	
フグ科種不明	Tertaodontidae gen. & sp. indet.
４．鳥　類	
カモ目	
カモ科種不明	Anatidae gen. & sp. indet.
５．哺乳類	
霊長目	
ヒト	*Homo sapiens sapiens*
ウサギ目	
ノウサギ	*Lepus brachyurus*
クジラ目	
種不明	Cetacea fam. indet.
食肉目	
タヌキ	*Nyctereutes procyonoides*
偶蹄目	
シカ	*Cervus nippon*
イノシシ	*Sus scrofa*

表７　動物遺存体種名一覧

(2) 動物遺体の概要

今回は、同定した資料が全体の一部であり、また同定したものについても数的処理は貝類の一部が行われているだけである。ここでは以下の類別ごとに、前回報告の内容（金子他 1973）にもふれながら、現段階でのおおよその傾向について述べることにする。

貝　類

腹足綱12種、二枚貝綱20種が同定された。前回同定され今回みられなかったものには、ウラシマガイ・ナガニシ・アカガイがあげられる。また、キサゴ・ホソウミニナとされたものは、今回のイボキサゴ・ウミニナ属でよいであろう。今回新たに同定されたものとして、腹足綱ではカコボラ・カワニナ科種不明など5種、二枚貝綱ではバカガイ・ミルクイガイなど10種があげられる。

魚　類

13種が同定された。ただし、0.5㎜の試験フルイで水洗分離し選別した試料は、同定されていないので、ハゼ科などの小形種が同定される可能性があろう。前回同定され今回みられなかったもののなかには、魚骨からは特定し得ないものが含まれているのでふれない。今回の発掘と表面採集で見つかった資料では、スズキ属とマダイ・フグ科の頻度が、村田川流域の諸貝塚に比べてかなり高くなると予想される。またコラムサンプルの資料では、ニシン科が主体的であるが、村田川流域の諸貝塚のサンプルでは出現頻度の低い、アジ科およびサバ属の頻度がかなり高くなる見込みである。

鳥・哺乳類

両者ともに前回に同定されたものには、不確かなものも含まれるので詳しくはふれないが、鳥類は、前回も多くみられたカモ科種不明が同定された。哺乳類は6種が同定されたが、発掘による資料では、イノシシ・シカの成獣の骨が最も多い。ヒトの骨は下顎骨の断片的なもので、出土状況からは埋葬か否か、確認できなかった。

7．貝サンプル（表8～11）

弧状貝層に設定したトレンチ内（4T・11T）と、遺構内貝層（SI-1、SI-2）から、計13か所42カットのサンプルを採取した。いずれも後期堀之内式期と考えられる。今回は、表8のコラムサンプルについて、貝類の集計・計測のみ行った。分析は1990年度の誉田高田貝塚で行った方法によった。また各サンプルからは、少量の炭化植物と多量の魚骨も検出されたが、魚類の頻度が圧倒的に高い。しかし現時点で分析作業は未着手で、今後の課題である。

(1) 採取方法

今回扱った資料は、表8に示したように30×30×5㎝の垂直コラムを基本としたものである。ただし、SI-2では 貝層上面が水平でなかったため、露呈面までの土層を除外したcut 1の容量

	採取法・量	時　期	備　　考
SI－2－A	30×30×5㎝ 垂直コラム×5カット	堀之内1	主体貝なく、多種のまじりの貝の残り良いが1～4㎜破砕貝も多量 ①・②で小型魚骨多量
4T	30×30×5㎝ 垂直コラム×7カット	堀之内	破砕貝主体 ①～④で小型魚骨多量
11T	30×30×5㎝ 垂直コラム×6カット	堀之内 1～2	貝少なく残り悪いが、本来は完形が多かったと思われる ①～⑤で小型魚骨多量

表8　貝サンプル一覧

は不足している。なお、未了の資料は、一括や任意で採取したサンプルである。

(2)　**貝類の組成比率**

表9・10から読み取れるように、4Tと11Tはよく似た傾向を示すのに対して、SI-2-Aはかなり異なった様相である。

4T・11T　個体数、重量ともイボキサゴが最も多く、個体数で94％以上と圧倒的である。他の貝ではツメタガイ・シオフキ・アサリがやや多く出ている。

SI-2-A　貝種は4T・11Tがともに16種にとどまったのに対し、ここでは24種と多数である。個体数ではイボキサゴがやや多いものの、重量は微少である。重量の比率でみると、どのカットでも特定種に片寄らず、多種から構成されていることが特徴である。

(3)　**貝類の計測値**

現場での観察では、採取地点ごとに違いがあるように思われたため、計測可能な個体はすべて実施した。このうち比較的まとまって計測可能な個体の得られたツメタガイ・アカニシ・イボニシの腹足類3種、サルボウガイ・ハマグリの二枚貝類2種を表11に示した（出現しない前後の分布域は、省略した）。しかし結果としては、計測値を比較するには試料数が少なく、安定した資料は得られなかった。今後はサンプルサイズを大きくするなど、方法が検討される必要がある。今回はこの5種について現地での所見をあわせ、資料から読み取れるおおよその傾向などを述べるにとどめる。

ツメタガイ　調査中の所見では4Tに大形が多く、SI-2では小さな個体まであることが記録されていたが、ある程度その傾向を示している。

イボニシ　普通、殻高3.0～3.5㎝とされているが、大きな個体が混じる。サンプル以外であるが、最高で殻高5.3㎝ほどのものがある。

サルボウ　大きさのばらつきがきわめて大きい。

ハマグリ　SI-2では小形がまとまっており、4Tでは大きな個体が多かったが、4Tのサンプル中には計測可能な個体がほとんどは入らず、比較できなかった。

SI−2−A	Cut 1				Cut 2				Cut 3				Cut 4				Cut 5				合計			
	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)
イボキサゴ	145	70.4	27.8	4.4	264	44.4	63.2	2.5	51	16.1	12.8	0.6	83	27.1	23.9	1.2	108	67.9	27.5	8.7	651	41.2	155.2	2.1
ツメタガイ	21	10.2	150.7	23.6	35	5.9	307.2	12.3	24	7.6	138.3	6.6	16	5.2	93.2	4.9	2	1.3	26.0	8.2	98	6.2	715.4	9.6
カコボラ		0.0		0.0	1	0.2	89.1	3.6		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	89.1	1.2
アカニシ	1	0.5	21.9	3.4	2	0.3	23.9	1.0	4	1.3	55.5	2.6	4	1.3	188.9	9.9	2	1.3	9.1	2.9	13	0.8	299.3	4.0
イボニシ	3	1.5	7.4	1.2	36	6.1	105.7	4.2	20	6.3	62.5	3.0	15	4.9	52.7	2.8	9	5.7	25.9	8.2	83	5.2	254.2	3.4
ﾏﾙﾃﾝｽﾏﾂﾑｼｶﾞｲ		0.0		0.0	1	0.2	0.2	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.2	0.0
アラムシロ		0.0		0.0	1	0.2	0.2	0.0		0.0		0.0	1	0.3	0.1	0.0	1	0.6	0.2	0.1	3	0.2	0.5	0.0
バイガイ	1	0.5	4.5	0.7	1	0.2	8.9	0.4		0.0		0.0	4	1.3	59.3	3.1		0.0		0.0	6	0.4	72.7	1.0
テングニシ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	86.2	4.5		0.0		0.0	1	0.1	86.2	1.2
腹足綱種不明	0	0.0	3.8	0.6	0	0.0	0.7	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.6	0.3	0.1	1	0.1	4.8	0.1
サルボウガイ	4	1.9	54.0	8.5	21	3.5	277.9	11.1	18	5.7	238.1	11.3	11	3.6	115.3	6.0	0	0.0	3.1	1.0	54	3.4	688.4	9.2
イタヤガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	10.6	0.5		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	10.6	0.1
イタボガキ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	5.7	0.3	1	0.3	34.8	1.8		0.0		0.0	1	0.1	40.5	0.5
マガキ	2	1.0	23.8	3.7	6	1.0	57.7	2.3	1	0.3	68.9	3.3	33	10.8	40.5	2.1	10	6.3	6.1	1.9	52	3.3	197.0	2.6
イタボガキ科		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	2.4	0.114	0	0.0	1.6	0.084		0.0		0.0	0	0.0	4.0	0.1
シオフキ	10	4.9	28.9	4.5	40	6.7	173.0	6.9	18	5.7	53.7	2.6	8	2.6	11.6	0.6	1	0.6	3.8	1.2	77	4.9	271.0	3.6
バカガイ	1	0.5	11.6	1.8	26	4.4	237.3	9.5	20	6.3	323.4	15.4	22	7.2	301.1	15.7	7	4.4	49.2	15.5	76	4.8	922.6	12.3
ミルクイガイ		0.0		0.0	0	0.0	17.8	0.7	0	0.0	18.4	0.9	1	0.3	57.6	3.0		0.0		0.0	1	0.1	93.8	1.3
サビシラトリガイ		0.0		0.0	1	0.2	0.7	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.7	0.0
シオサザナミガイ科		0.0		0.0	5	0.8	11.2	0.4	1	0.3	0.2	0.0	0	0.0	4.6	0.2		0.0		0.0	6	0.4	16.0	0.2
ムラサキガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	10.0	0.5	1	0.6	11.2	3.5	2	0.1	21.2	0.3
ｷﾇﾀｱｹﾞﾏｷｶﾞｲ属		0.0		0.0	1	0.2	0.4	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.4	0.0
マテガイ	1	0.5	3.2	0.5	38	6.4	33.3	1.3	69	21.8	90.5	4.3	41	13.4	46.5	2.4	12	7.5	9.0	2.8	161	10.2	182.5	2.4
カガミガイ	7	3.4	154.8	24.3	18	3.0	306.2	12.2	24	7.6	507.0	24.1	25	8.2	458.2	24.0	2	1.3	62.9	19.8	76	4.8	1489.1	19.9
アサリ		0.0		0.	1	0.2	0.0	0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.7	0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.7	0.0
ハマグリ	7	3.4	127.9	20.0	90	15.2	561.1	22.4	49	15.5	234.7	11.2	18	5.9	64.1	3.4	2	1.3	39.2	12.4	166	10.5	1027.0	13.7
オオノガイ	3	1.5	17.7	2.8	6	1.0	116	0.5	18	5.7	134	6.4	21	6.9	39.7	2.1	1	0.6	5.6	1.8	49	3.1	208.6	2.8
二枚貝綱種不明		0.0		0.0	0	0.0	216.1	8.6	0	0.0	146.4	7.0	0	0.0	221.8	11.6	0	0.0	38.3	12.1	0	0.0	622.6	8.3
合計	206	100.0	638.0	100.0	594	100.0	2503.4	100.0	317	100.0	2103.1	100.0	306	100.0	1912.4	100.0	159	100.0	317.4	100.0	1582	100.0	7474.3	100.0

表9　貝類の組成比率 (1)

左：SI−2−A

下：4T

最小個体数と破片も含めた重量を示す。SI−2−Aでは、二枚貝種不明としたものが、重量で8.3%を占めてしまった。しかし、このうちオオノガイとシオサザナミガイ科が多いと思われ、特にオオノガイの重量は、ここに示したより実際はかなり大きくなる可能性がある。

4T	Cut 1				Cut 2				Cut 3				Cut 4				Cut 5				Cut 6				Cut 7				合計			
	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)
イボキサゴ	1881	95.3	609.4	44.2	1406	92.7	495.7	37.6	1335	93.4	412.1	40.7	429	94.9	97.8	43.5	141	98.6	24.3	40.6	39	97.5	7.1	31.6	8	100.0	1.4	51.9	5239	94.2	1647.8	41.0
カワニナ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.2	0.4	0.2		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	0.4	0.0
ウミニナ属	0	0.0	0.2	0.0	2	0.1	0.5	0.0	1	0.1	0.1	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	3	0.1	0.8	0.0
ツメタガイ	19	1.0	237.9	17.3	41	2.7	415.9	31.6	16	1.1	114.3	11.3	9	2.0	50.7	22.6	0	0.0	1.0	1.7	1	2.5	8.6	36.4		0.0		0.0	86	1.5	828.0	20.6
アカニシ	2	0.1	60.1	4.4	1	0.1	5.1	0.4	4	0.3	36.7	3.6		0.0		0.0	1	0.7	8.6	14.4		0.0		0.0		0.0		0.0	8	0.1	110.5	2.8
イボニシ	1	0.1	4.8	0.3		0.0		0.0	1	0.1	4.4	0.4	1	0.2	3.3	1.5		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	3	0.1	12.5	0.3
アラムシロ	0	0.0	0.9	0.1	7	0.5	1.5	0.1	4	0.3	0.9	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	11	0.2	3.3	0.1
腹足綱種不明	0	0.0	1.6	0.1	0	0.0	1.3	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	2.9	0.1
サルボウガイ	2	0.1	44.9	3.3	0	0.0	9.6	0.7	1	0.1	13.1	1.3	0	0.0	0.1	0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.4	1.8		0.0		0.0	3	0.1	68.1	1.7
マガキ	5	0.3	28.6	2.1	3	0.2	4.7	0.4	1	0.1	9.6	0.9	0	0.0	1.4	0.6	0	0.0	0.2	0.3		0.0		0.0		0.0		0.0	9	0.2	44.5	1.1
イシガイ科		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.5	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.5	0.0
シオフキ	47	2.4	269.1	19.5	40	2.6	145.7	11.1	41	2.9	245.3	24.2	9	2.0	43.4	19.3	0	0.0	3.9	6.5	0	0.0	1.3	5.8		0.0		0.0	137	2.5	708.7	17.6
マテガイ	2	0.1	1.1	0.1	1	0.1	0.4	0.0	2	0.1	1.4	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	5	0.1	2.9	0.1
カガミガイ	1	0.1	5.7	0.4	0	0.0	20.2	1.5	0	0.0	1.3	0.1		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	27.2	0.7
アサリ	7	0.4	25.5	1.9	8	0.5	44.5	3.4	7	0.5	47.1	4.6	1	0.2	3.9	1.7	1	0.7	5.3	8.9		0.0		0.0		0.0		0.0	24	0.4	126.3	3.1
ハマグリ	6	0.3	71.1	5.2	8	0.5	75.1	5.7	15	1.0	109.2	10.8	2	0.4	20.4	9.1	0	0.0	13.7	22.9	0	0.0	2.6	11.6		0.0		0.0	31	0.6	292.1	7.3
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.3	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	0.3	0.0
二枚貝綱種不明	0	0.0	17.2	1.2	0	0.0	96.7	7.3	0	0.0	16.9	1.7	0	0.0	3.3	1.5	0	0.0	2.8	4.7	0	0.0	2.9	12.9	0	0.0	1.3	48.1	0	0.0	141.1	3.5
合計	1973	100.0	1378.1	100.0	1517	100.0	1316.9	100.0	1429	100.0	1013.2	100.0	452	100.0	224.7	100.0	143	100.0	59.8	100.0	40	100.0	22.5	100.0	8	100.0	2.7	100.0	5562	100.0	4017.9	100.0

11 T	Cut 1				Cut 2				Cut 3				Cut 4				Cut 5				Cut 6				合 計			
	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)
イボキサゴ	32	82.1	7.7	12.5	201	86.6	65.7	19.9	383	94.6	96.2	27.9	389	93.7	101.1	28.4	671	96.0	178.6	55.7	352	96.4	81.3	56.7	2028	94.1	530.6	34.1
ウミニナ属		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.3	0.1		0.0		0.0	1	0.0	0.3	0.0
ツメタガイ	4	10.3	19.4	31.4	10	4.3	73.5	22.3	6	1.5	32.5	9.4	4	1.0	20.1	5.6	1	0.1	8.9	2.8	5	1.4	34.9	24.4	30	1.4	189.3	12.2
アカニシ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	4.2	1.2	1	0.2	9.9	2.8		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	14.1	0.9
イボニシ		0.0		0.0	1	0.4	0.6	0.2	1	0.2	3.7	1.1		0.0		0.0	2	0.3	1.7	0.5		0.0		0.0	4	0.2	6.0	0.4
アラムシロ		0.0		0.0	3	1.3	0.9	0.3	0	0.0	0.2	0.1	1	0.2	0.2	0.1	6	0.9	0.8	0.2		0.0		0.0	10	0.5	2.1	0.1
腹足綱種不明		0.0		0.0	0	0.0	1.7	0.5	0	0.0	0.5	0.1	0	0.0	1.7	0.5	0	0.0	0.2	0.1		0.0		0.0	0	0.0	4.1	0.3
サルボウガイ		0.0		0.0	0	0.0	4.5	1.4	4	1.0	67.9	19.7	0	0.0	12.9	3.6	1	0.1	12.2	3.8	0	0.0	0.5	0.3	5	0.2	98.0	6.3
マガキ		0.0		0.0	1	0.4	0.6	0.2	0	0.0	0.3	0.1	0	0.0	0.3	0.1	0	0.0	0.1	0.0	0	0.0	0.4	0.3	1	0.0	1.7	0.1
シオフキ	1	2.6	23.9	38.7	10	4.3	114.4	34.7	6	1.5	45.8	13.3	1	0.2	4.9	1.4	3	0.4	6.4	2.0	0	0.0	0.3	0.2	21	1.0	195.7	12.6
シオサザナミガイ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.3	0.2	0.1	1	0.0	0.2	0.0
マテガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.4	0.1	0	0.0	0.5	0.1	0	0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.9	0.1
カガミガイ		0.0		0.0	3	1.3	48.1	14.6	1	0.2	45.3	13.1	0	0.0	8.3	2.3	1	0.1	11.7	3.6	0	0.0	0.3	0.2	5	0.2	113.7	7.3
アサリ	1	2.6	6.8	11.0	0	0.0	1.7	0.5	1	0.2	1.8	0.5	2	0.5	2.2	0.6		0.0		0.0	1	0.3	0.8	0.6	5	0.2	13.3	0.9
ハマグリ	1	2.6	3.9	6.3	3	1.3	7.8	2.4	2	0.5	36.1	10.5	15	3.6	174.8	49.1	13	1.9	92.7	28.9	5	1.4	21.4	14.9	39	1.8	336.7	21.6
オキシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.2	1.8	0.5		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.0	1.8	0.1
オオノガイ		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.5	1.3	0.4	0	0.0	1.1	0.3	1	0.3	0.2	0.1	3	0.1	2.6	0.2
二枚貝綱種不明		0.0		0.0	0	0.0	10.3	3.1	0	0.0	7.9	2.3	0	0.0	17.7	5.0	0	0.0	6.2	1.9	0	0.0	3	2.1	0	0.0	45.1	2.9
合 計	39	100.0	61.7	100.0	232	100.0	329.8	100.0	405	100.0	344.6	100.0	415	100.0	355.9	100.0	699	100.0	320.9	100.0	365	100.0	143.3	100.0	2155	100.0	1556.2	100.0

表10 貝類の組成比率(2)

ツメタガイ－殻高

殻高(mm)	SI-2-A	(%)	4T	(%)	11T	(%)	合計	(%)
22.5－25.0	3	10.0	2	3.8	2	28.6	7	7.8
25.0－27.5	4	13.3	7	13.2		0.0	11	12.2
27.5－30.0	4	13.3	5	9.4	1	14.3	10	11.1
30.0－32.5	6	20.0	11	20.8	1	14.3	18	20.0
32.5－35.0	4	13.3	10	18.9	2	28.6	16	17.8
35.0－37.5	3	10.0	5	9.4	1	14.3	9	10.0
37.5－40.0		0.0	5	9.4		0.0	5	5.6
40.0－42.5	1	3.3	7	13.2		0.0	8	8.9
42.5－45.0	3	10.0		0.0		0.0	3	3.3
45.0－47.5		0.0		0.0		0.0	0	0.0
47.5－50.0	2	6.7		0.0		0.0	2	2.2
50.0－52.5		0.0		0.0		0.0	0	0.0
52.5－55.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
55.0－57.5		0.0	1	1.9		0.0	1	1.1
合 計	30	100.0	53	100.0	7	100.0	90	100.0
	試料数	30	試料数	53	試料数	7	試料数	90
	平 均	33.08	平 均	33.51	平 均	30.18	平 均	33.11
	標準偏差	7.13	標準偏差	5.95	標準偏差	4.97	標準偏差	6.30

アカニシ－殻高

殻高(mm)	SI-2-A	(%)
22.5－25.0		0.0
25.0－27.5		0.0
27.5－30.0	1	10.0
30.0－32.5		0.0
32.5－35.0		0.0
35.0－37.5	1	10.0
37.5－40.0		0.0
40.0－42.5	3	30.0
42.5－45.0	1	10.0
45.0－47.5	1	10.0
47.5－50.0	1	10.0
50.0－52.5	1	10.0
52.5－55.0		0.0
55.0－57.5	1	10.0
合 計	10.0	100.0
	試料数	10
	平 均	43.50
	標準偏差	7.77

イボニシ－殻高

殻高(mm)	SI-2-A	(%)
22.5－25.0	4	5.9
25.0－27.5	8	11.8
27.5－30.0	21	30.9
30.0－32.5	14	20.6
32.5－35.0	10	14.7
35.0－37.5	6	8.8
37.5－40.0	3	4.4
40.0－42.5	2	2.9
42.5－45.0		0.0
45.0－47.5		0.0
47.5－50.0		0.0
50.0－52.5		0.0
52.5－55.0		0.0
55.0－57.5		0.0
合 計	68	100.0
	試料数	68
	平 均	30.88
	標準偏差	4.10

サルボウガイ（左）－殻長

殻長(mm)	SI-2-A	(%)
22.5－25.0	1	2.2
25.0－27.5	1	2.2
27.5－30.0	1	2.2
30.0－32.5	2	4.4
32.5－35.0	5	11.1
35.0－37.5	2	4.4
37.5－40.0	5	11.1
40.0－42.5	7	15.6
42.5－45.0	6	13.3
45.0－47.5	8	17.8
47.5－50.0	3	6.7
50.0－52.5	2	4.4
52.5－55.0	1	2.2
55.0－57.5	1	2.2
合 計	45	100.0
	試料数	45
	平 均	41.25
	標準偏差	7.13

ハマグリ（左）－殻長

殻長(mm)	SI-2-A	(%)
22.5－25.0	2	4.1
25.0－27.5	3	6.1
27.5－30.0	4	8.2
30.0－32.5	12	24.5
32.5－35.0	9	18.4
35.0－37.5	5	10.2
37.5－40.0	6	12.2
40.0－42.5	4	8.2
42.5－45.0	2	4.1
45.0－47.5	2	4.1
47.5－50.0		0.0
50.0－52.5		0.0
52.5－55.0		0.0
55.0－57.5		0.0
合 計	49	100.0
	試料数	49
	平 均	34.26
	標準偏差	5.50

表11 貝類計測値分布

Ⅳ 検出遺構と出土遺物

今回は確認調査ということで、遺構の掘り下げは行わないのが基本である。しかし、検出面の遺存状況や遺物の出土状況などで、精査したほうがよいのではと判断される遺構については、必要と思われる段階まで行った。

1．住 居 跡

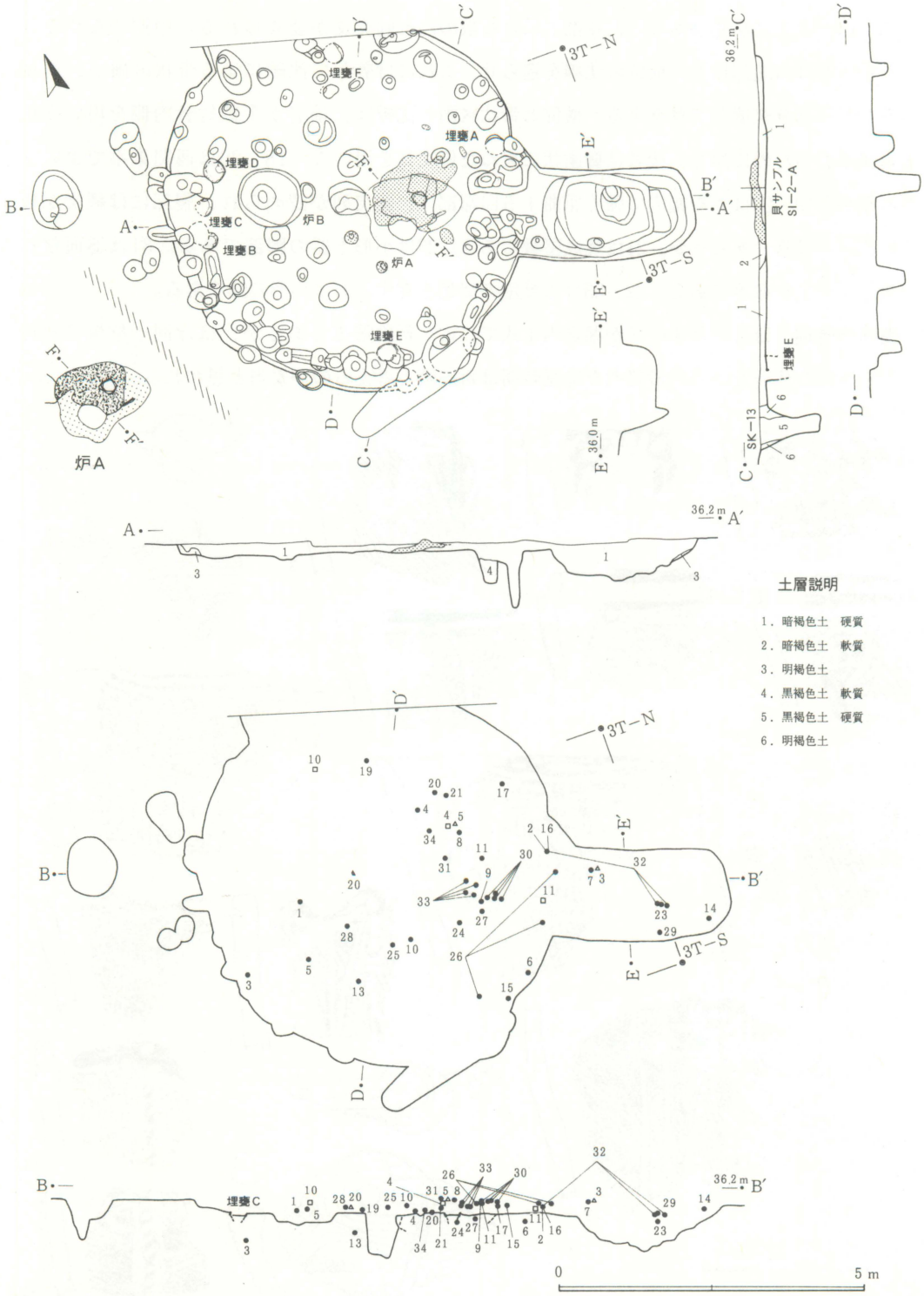
SI－2（第37～39図、図版5・6・10・11）

ボーリング探査で把握された貝層の性格を確認するため3Tを設定したが、遺構と思われる落ち込みが確認されたので拡張した結果、柄鏡形住居跡が検出された。検出面上約5㎝まで耕作がおよんでいることと、時期のわかる貝層コラムサンプル採取することを目的として精査した。床面を露呈し柱穴と炉Bを掘るところまで調査を行い、埋甕A～Fの6基と重複する炉Aはそのままのこし、将来調査が行われる場合に備え、砂を入れて埋め戻した。

規模と構造　立替の重複があるので、ほぼ東側に柄部を有す現存するプランで計測するが、内側の円形部で径約6m、奥壁から柄部の中軸上で約8.6mを測り、比較的大形である。北側の調査区外が未調査で、他の住居跡とも切り合っている。柱穴は計80か所以上が検出されたが、中央よりのものを除き多くが壁柱穴構造に伴うであろう。炉や埋甕、柄部に付設する連結ピットのあり方とともに、立替の個々の様子が想定できるが、これは後述する。床面は比較的軟質で、西側の壁際が約10cmほど他より高いが、全体的にそれほどレベル差はない。東側柄部の先端には重複した土坑が掘られ、西側の柄部は浅く立ち上がったためプランは残されず、先端の土坑と連結ピットを認めるだけである。

埋土と貝層　埋土は比較的に単純な構成となっており、硬質な暗褐色土である1層がほぼ全域に堆積している。貝層は住居埋土形成中に堆積したもので、土層断面から観察すれば、床面中央部東側の炉Aの上面に、北東方向から投棄されたと思われる。また、掲載した遺物の出土位置以外は図示していないが、貝層堆積範囲より相対的に上層に遺物の集中が認められ、ほぼ同方向からの投棄と考える。図示した位置で貝層コラムサンプルを採取した。

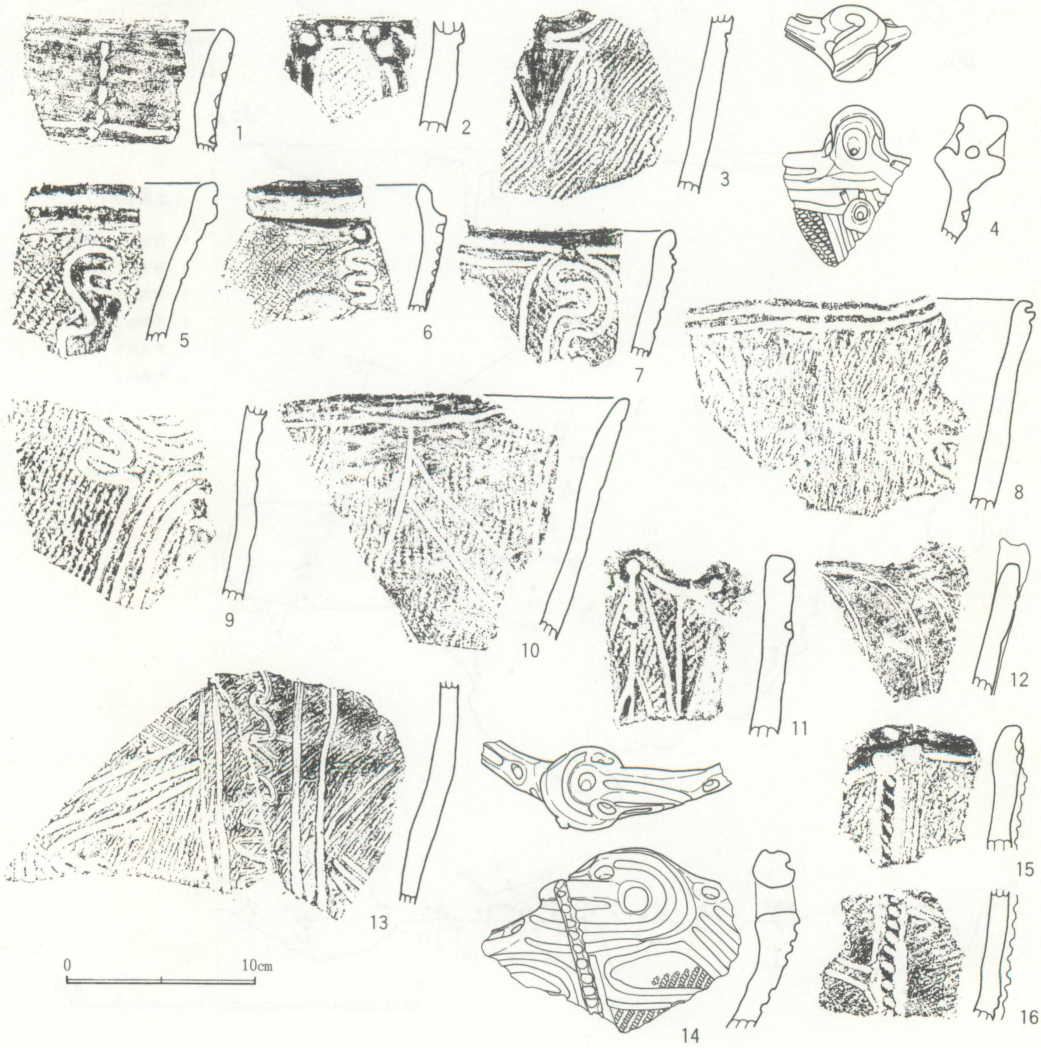
出土土器（第38図1～第39図34）　すべて堀之内式で22を除き、他は1式で古～新段階のものまで混在する。1～8は古段階と思われる。1～6は綱取式との強い類縁関係を示す土器である。1は幅広な口縁部無文帯に、縦位の刺突列が施される。3はスペード文が垂下している。4は口端部上にS字をモチーフとし、紐をねじったような把手が付く。5は内部を磨消して無文とした蕨手文が垂下する。6は口端部以下の円形刺突文から、強く蛇行した深い沈線が垂下する。8の沈線は器面にくい込むように強く引かれる。9～11は中段階と思われる。9・11は単沈線の集合で単位文を描出するとともに、縦位に区画する効果をもつ。12は中～新段階のいずれか。13～17・21・23・30は新段階であろう。13は垂下する縦位の文様間を、ジグザグ状の


埋甕F
埋甕A
埋甕D
埋甕C
埋甕B
炉B
炉A
埋甕E
3T－N
3T－S
貝サンプル
SI－2－A
SK－13
36.2m
36.0m
炉A
土層説明
1．暗褐色土　硬質
2．暗褐色土　軟質
3．明褐色土
4．黒褐色土　軟質
5．黒褐色土　硬質
6．明褐色土
0
5 m

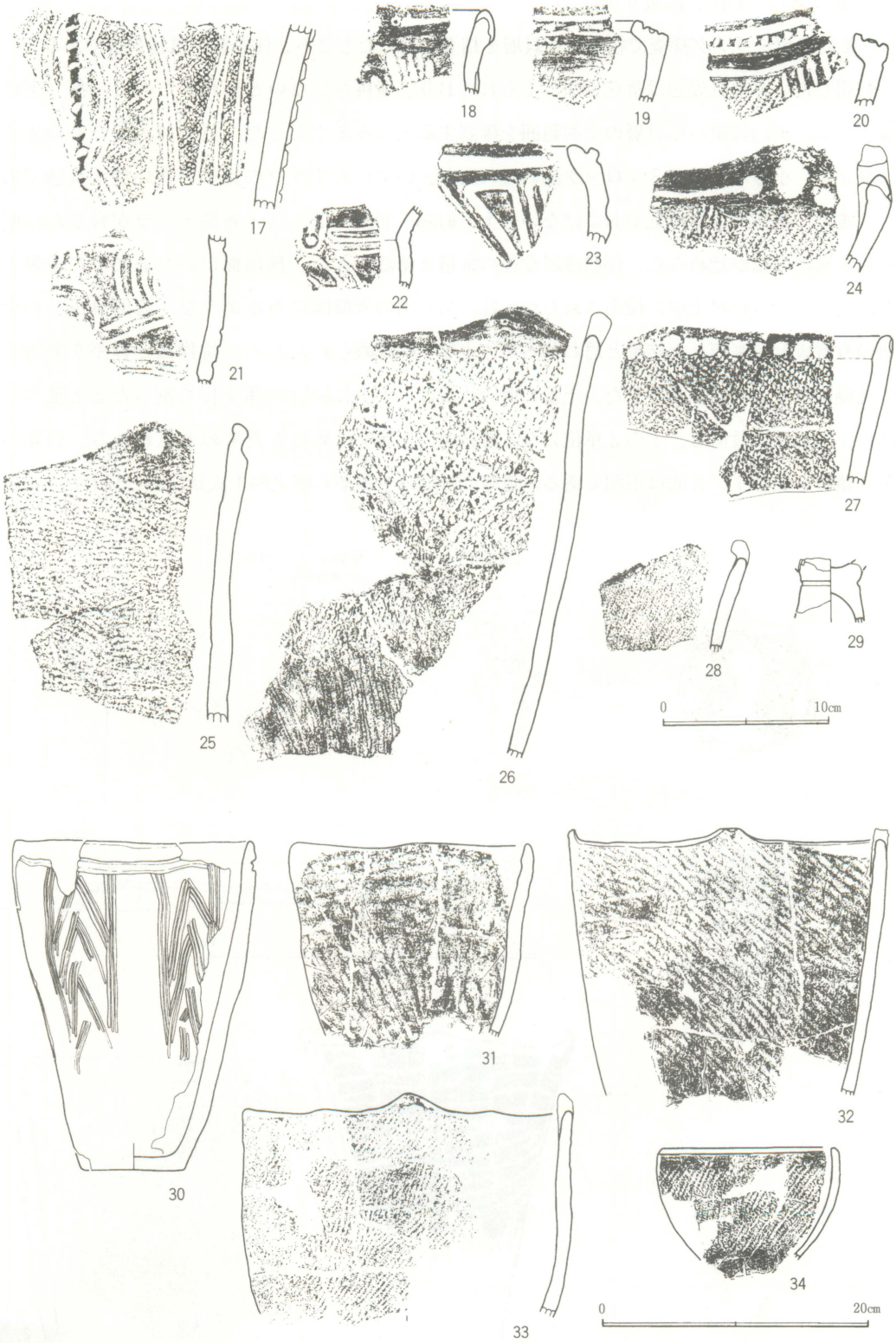
第37図　SI－2 (1)

集合沈線が充填する。14～17は口端部から縦位あるいはやや斜めに、刻み目付き隆起線が垂下する。14は中央に穿孔があり、口端部上には複数の円形刺突文が認められる。中期的なつくりである。30は口端部以下に横位の沈線を巡らせ、これに付着して沈線による帯状区画が、連続山形モチーフを充填して垂下する。横位と帯状区画の沈線は、前者が半截竹管内側を用い立たせ気味で引いたのに対し、後者は櫛歯状に束ねた施文具を用いる。18～20は西関東系でよいであろうか。19・20はやや幅広で強く屈曲する口端部に、刺突列が認められ、胴部には縄文が施される。新段階であろうか。21は焼成堅緻である。29は小形土器の脚部である。31は器面整形が粗く、凹凸が顕著である。32・33は4単位の突起を有す。34は小形の鉢である。

遺構の時期　ほとんどすべてが堀之内1式で、古～新段階まであるが、ほぼ同一位置で建替が想定される住居なので、最終的な廃絶時期は新段階と考えるのが妥当と思われる。



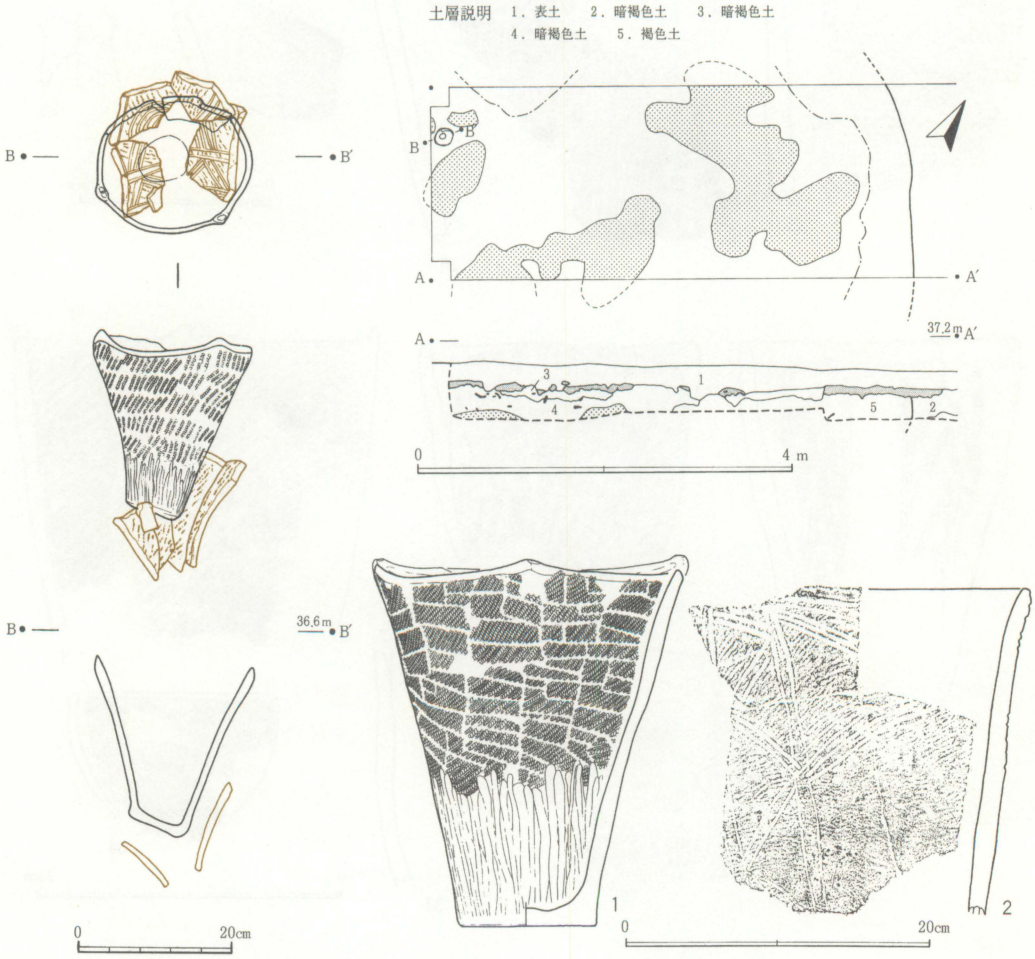
第38図　SI－2 (2)



第39図　SI－2 (3)

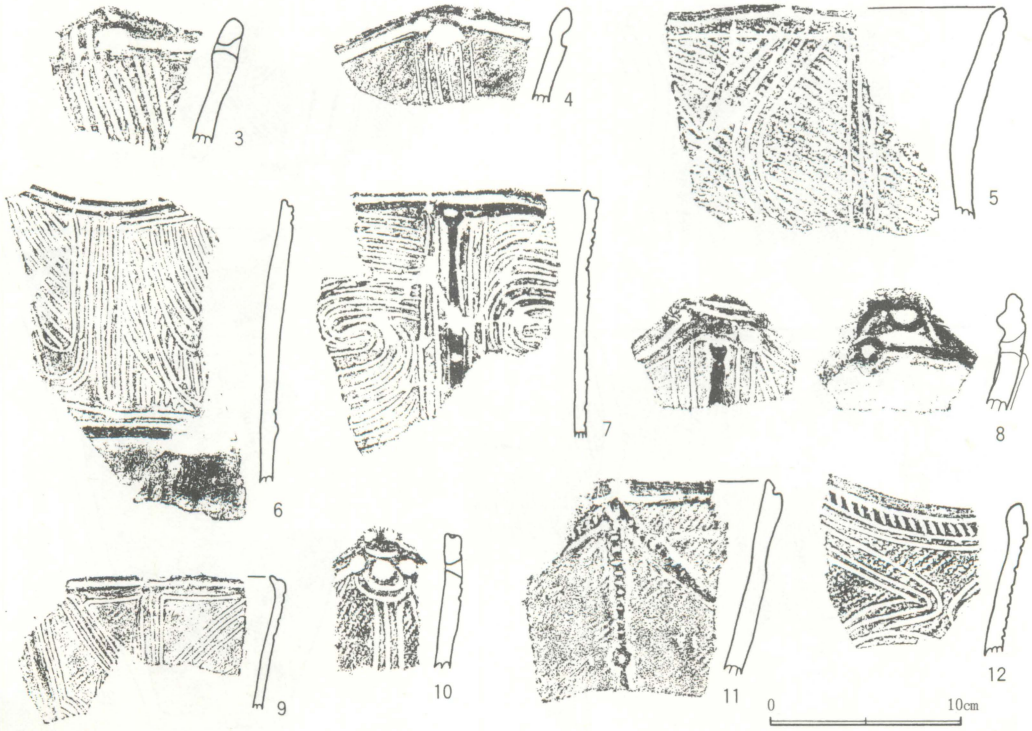
SI－6（第40～43図、図版6・12）

7T内のボーリング探査で検出した貝層を精査したしたところ、住居跡内堆積貝層であることが判明した。本地点周辺は落花生がつくられており、深耕されないと思われたので、掘り下げは、トレンチ内に限って貝層の上面範囲を確認するところまでとした。貝層は大きなもので2ブロック、小さなもので3ブロック認められたが、いずれもキサゴの比率の高い混土貝層である。また、耕作による撹乱がおよばない表土下約20～30cmには、富士新期テフラが含まれる明褐色土層の堆積が認められ、住居跡埋没後の堆積と確認できた。検出面にいたるまでに多量の堀之内1式土器が埋土中に検出されたが、特に第40図の微細図にあるような土器埋設が、貝層間の有機成分が腐朽した結果と思われる黒色土層中に認められたため、耕作面との差を考慮して記録後取り上げることとした。土器の埋設状況は、土中に同一個体を打ち割った2と他の小破片を五徳状に設置し、1の3単位になる波状縁の土器をはめ込んだものと思われる。管見の限り類例を知らず、目的は不明である。遺構の時期は土器から堀之内1式新段階と思われる。

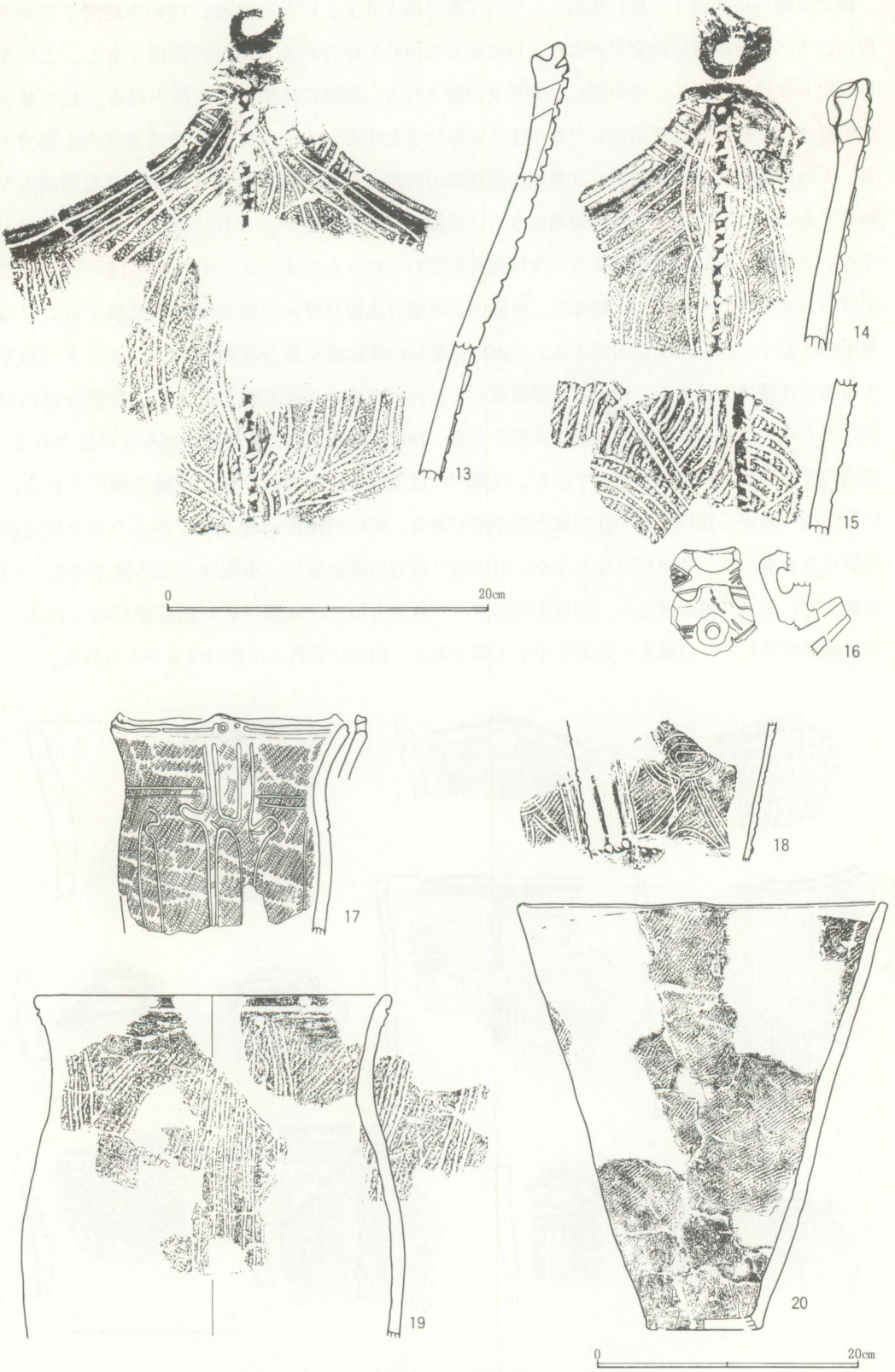


第40図　SI－6 (1)

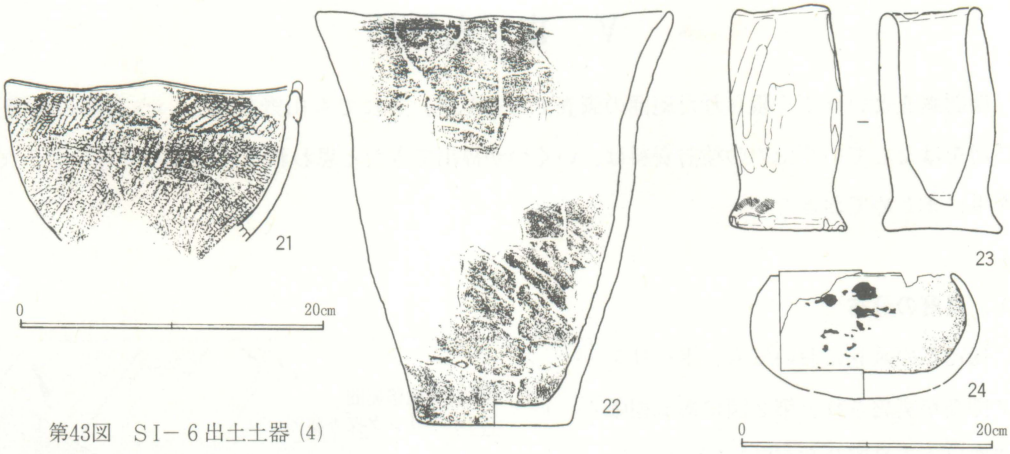
出土土器（第40図１～第44図24）　すべて堀之内１式で、17が古段階、19が中段階？である他は、すべて新段階に比定できよう。17は中心に円孔の穿たれる３単位の突起を有し、これを単位にH状文が垂下し、その間には蕨手文が配される。頚部には横位の沈線が巡る。19は集合沈線によって描出される退化した蕨手文？を単位文とする。１・２は土器埋設遺構の土器である。１は口端部に稜を有すが、３単位の波頂部の突起に集約される。縄文施文後の器面調整が顕著である。２～５は、集合沈線間にさらに沈線を充填させるが、これは横位の区画文効果となる。文様帯下端に隆起線による一次区画文が認められるものは、６・７・９・12～15・18があげられよう。６・７は同一個体で、区画内には集合沈線で幾何学的な図形を充填する。９は薄手の土器で、口縁端部が内屈する。区画内は縦位の隆起線や集合沈線間を、ジグザグに垂下する集合沈線で充填する。13～15は波頂部から刻み目の付いた隆起線が垂下し、縦位分割の単位になろう。区画内には集合沈線が充填される。18は文様帯下端の隆起線に刻み目が付される。磨消の伴う３本の隆起線が垂下するが、区画内には幾何学的な図形が集合沈線で描出される。16は欠損するが、注口土器の注口部と把手部である。20は口端部に緩やかでゆるやかな突起状の膨らみをもつが、４単位になろうか。21は折り返し口縁を呈し、小波状となる鉢である。22は無文で、ケズリ痕が著しい。23は小形のコップ状の土器で、底部付近に指紋が認められる。24は摩耗が著しく、口縁も不確実な小形土器である。内面に赤彩と漆様の付着がみられる。



第41図　SI－６（2）



第42図　SI－6 (3)

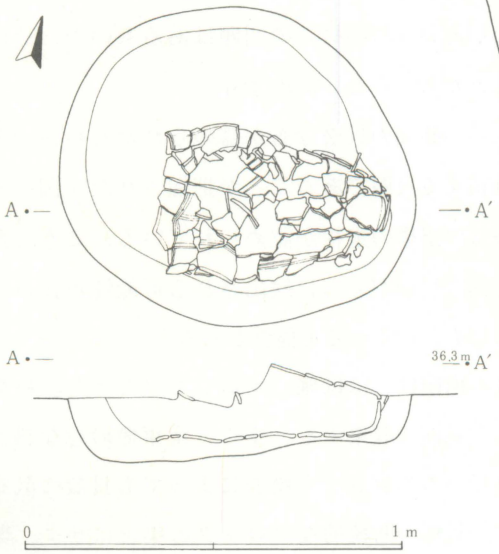


第43図　SI－6出土土器(4)

2．土　坑

SK－1（第44図、図版6・12）

1T・3T拡張区で検出された土坑で、大形深鉢1個体が横倒し状態で埋設されていた。確認面上の5㎝未満まで耕作されており、土器も上半部に大きく欠損が認められたため、完掘した。平面形は約95×80㎝の楕円形で、深さは確認面から約20㎝となる。単一の土層で埋められ、土器埋設状況から墓の用途も考慮される。1は堀之内1式中段階の大形深鉢で、4単位の浅い叉状の突起が付く。



第44図　SK－1

V まとめ

確認調査というごく限られた範囲の調査であったが、それでも山野貝塚という遺跡の保護・活用をはたしていくための検討資料は、いくつか提出できたと思われる。以下の項目にそって、簡単にまとめておきたい。

1．貝層の分布

1973年の調査においても、ボーリング探査が実施され、第2図にある相弧状を呈する貝層分布が捉えられている。今回の調査では第45図に示したように、従来から認識されている遺跡範囲について、ほぼカバーする形でボーリング探査することができた。探査は、約1mメッシュの間隔で行い、各地点で確実に感触を味わえる貝層（いわゆる混貝土層でもあまり薄くなければ可能）を限定的に「貝層あり」として捉え、その分布をさらに細かく詰めて範囲とした。このため、1973年の既調査範囲を除き、従来相弧状と捉えられていた貝層はもっと複雑で、ボーリングで捉えられない薄い貝層の扱いの問題はあるものの、それぞれがいくつかのブロックの集合となっていることがわかった（折込付図）。

第45図　貝層調査範囲

また、この相弧状の分布外側に、20か所以上の小範囲の貝層分布が認められたため、一部にトレンチを設定して確認した結果、遺構内に堆積する貝層であることが把握された。図にみられるように北西部に最も密に分布しており、多くの遺構の重複が認められている。こうしたことから、北側および西側の未探査区域に、小範囲の貝層がさらに検出される可能性が強い。また、東西いずれの相弧状分布外側の未探査区域にも、ひろがる可能性があろう。

前回捉えられなかった相弧状貝層のそれぞれの南限は、ほぼ確定することができた。精査にもかかわらず、相弧状の分布はひとまず図示した範囲で収束する。また、南東側の急な斜面はほとんど未探査なので確定はしていないが、地元の方のお話でも踏査によっても貝殻の散布は確認されず、分布の可能性は薄い。このように、貝層が断続的なブロックの集合にせよ、環状に分布する地形的な条件があるにもかかわらず途切れることについては、何か理由が考えられ

よう。

これを示唆するものとして、やはり地元の方から聞きおよんだ話がある。それは山野貝塚の立地する区域は永く原野であったが、大正時代後半に開墾されたという。開墾当初は谷際の南東側も全て伐採したが、谷から吹き上げる強風がはなはだしく、昭和初期に谷際の開墾を放棄し、現在にいたっているとのことであった。現在は雑木林が防風林の役目を果たしているが、それでも季節によってはかなりの強風が吹き荒れており、自ら現地踏査時に体験している。

千葉市誉田高田貝塚の報文でも指摘されているように、貝層が部分的に形成されなかった原因の一つとして、立地環境による制約の可能性が考えられる。つまり、縄文時代においても立地環境によっては、防風のため伐採を差し控えたのではなかろうか。その結果、ゴミ捨て場である貝層の分布も、いきおい集落内の切り開かれた範囲に限定されたと考えることもできるのではないかと思われる。

類例の増加がなければ実証性に乏しいかもしれないが、馬蹄形や相弧状の貝層分布の成因について考えるにあたって、立地環境などから検討していくのも一つの方法と思われ、今後の確認調査でも留意すべき点と考える。

2．遺構分布と集落の範囲

限定された範囲であったが、ボーリング探査と確認トレンチによって、従来知られていなかった遺構の分布を捉えることができた。第46図に確認できたものを示すが、時期の確認できたものは西側の相弧状貝層外縁部の例を除き、北西部のSI-2をはじめとする遺構群や東部のSI-6など、堀之内式期のものである。おそらく、この時期の居住域は、貝層外縁から広く外側に展開するものとみられ、面状に大きく広がる貝層分布とそれほど相関しないものと思われる。

第46図　遺構分布概念図

前回の調査で貝層が確認されている、加曽利B式～安行2式の住居跡はほとんど明らかにされておらず、晩期前半についても、包含層の区域が貝層内側に推定されるだけで、堀之内式期以外の居住域は不明といってよい。

また、通例では後期以降には限定されてくる墓域についても、埋葬遺体が確認されておらず、

明らかにし得なかった。僅かに堀之内１式期の土器埋設が伴う土坑１基と、SI-２の埋甕Ａで骨粉が確認されているが、墓域を検討する資料とはなり得ない。

貝を中心とする遺物の廃棄場所は、貝層の分布が示すように、①東西弧状貝層の分布する遺跡内で最も標高の高い場所を中心とする尾根状の区域、②東側弧状貝層の分布する、北側から溺れ谷が入り込む緩斜面を囲む区域、③廃絶された遺構の一部。以上の場所があげられる。また、前回の調査で北側の溺れ谷の入り込む緩斜面には、堀之内式～晩期前半までの多量の遺物包含が認められ、この部分も廃棄場所として利用されたと考えられる。

北西部は遺構の重複が調査範囲外に続くと予想され、その他の区域も隣接する遺跡の遺物散布域との境界は決め難い。仮に集落の範囲を決定する必要が生じた場合、各々の境界については今後の限界確認調査に負うところが大きい。

３．出土土器にみられる集落の時期

本貝塚からは前回の調査と同様に、堀之内式～晩期前半の土器が出土しているが、今回の調査ではこれに加えて、微量ながら層位的に称名寺Ⅱ式土器の出土が確認された。北側から入り込む溺れ谷に面した緩斜面に位置する伊丹山遺跡、小櫃川水系の支谷谷奥に位置する角山遺跡では、この時期を主体としており、今後、本貝塚でも検出例が増加すれば、これらが一つの遺跡群を形成している可能性の傍証となり得よう。

居住域が明らかになった堀之内式期を中心に、後期前半から晩期前半の期間に集落は形成されたと思われるが、現在のところ貝塚の形成期間は、堀之内式～安行２式の後期の間に限られている。しかし、前回の調査に引き続き晩期前半の時期には、東北地方大洞式系や関西系晩期土器が出土し、本集落の交流範囲の広さを物語る資料が提供された。

４．生産活動

絶対的な資料の不足と、分析資料についても完了していないことから、あまり明らかにできないのが現状である。それでも今回の中間報告的な成果から、展望や課題となることについて記しておきたい。

狩猟　動物遺体では、主な狩猟対象となったイノシシ・シカの骨が多数出土しているということがあげられる。これに対して、その道具と考えられる石鏃やその製作過程中の石器類の出土点数が、かなり少ないことが指摘できる。狩猟方法などと考え合わせ、今後検討していく必要がある。

漁撈・貝の採集　魚骨の分析はこれからであるが、その検出頻度は高くなる見込みであり、同定された内容から活発な活動が予想される。魚種について、分析資料の揃いつつある村田川下流域の諸貝塚と比較すると、「ニシン科が主体的など共通するものもあるが、発掘資料ではス

ズキ属・マダイ・フグ科の出現頻度が高い。サンプル資料では村田川諸貝塚では出現頻度の低い、アジ科・サバ属の頻度が高くなる見込みである」という２点が、同定を依頼した小宮　孟氏より指摘されている。分析が進めば、「本貝塚の立地とその出土動物遺体が、東京湾東岸の湾奥部と湾口部の貝塚の中間地帯の様相をよく示す」という従来の見解に対し、具体的なデータをもって検証できると思われる。

貝類はサンプル採取地点で異なりをみせるものの、イボキサゴやハマグリが主体で、松島義章氏のいうＢ群集・Ａ群集（松島 1979他）がほとんどを占める。時期がやや先行するが、後期前半では同時存在する宮ノ越貝塚（能城 1990）と比較すると、ほとんど同一の内容と思われるが、現在のところ山野貝塚では、汽水産のヤマトシジミは検出されていない点で異なる。能城秀喜氏は古地理から想定された縄文時代中・後期小櫃川下流域の海岸線を推定して、中・後期の下流域諸貝塚の５か所について貝類捕獲地・運搬ルートを検討しており、山野貝塚人の小櫃川沖積平野ルート利用の可能性にもふれている。今後、ボーリングコアのデータが明らかにされていけば、指摘されたいくつかの問題点について、ある程度の結論を得ることができよう。

漁具と考えられるものとしては、骨角牙製品や土器片錘・軽石製品が出土しているが、用途の問題など検討すべきものがある。

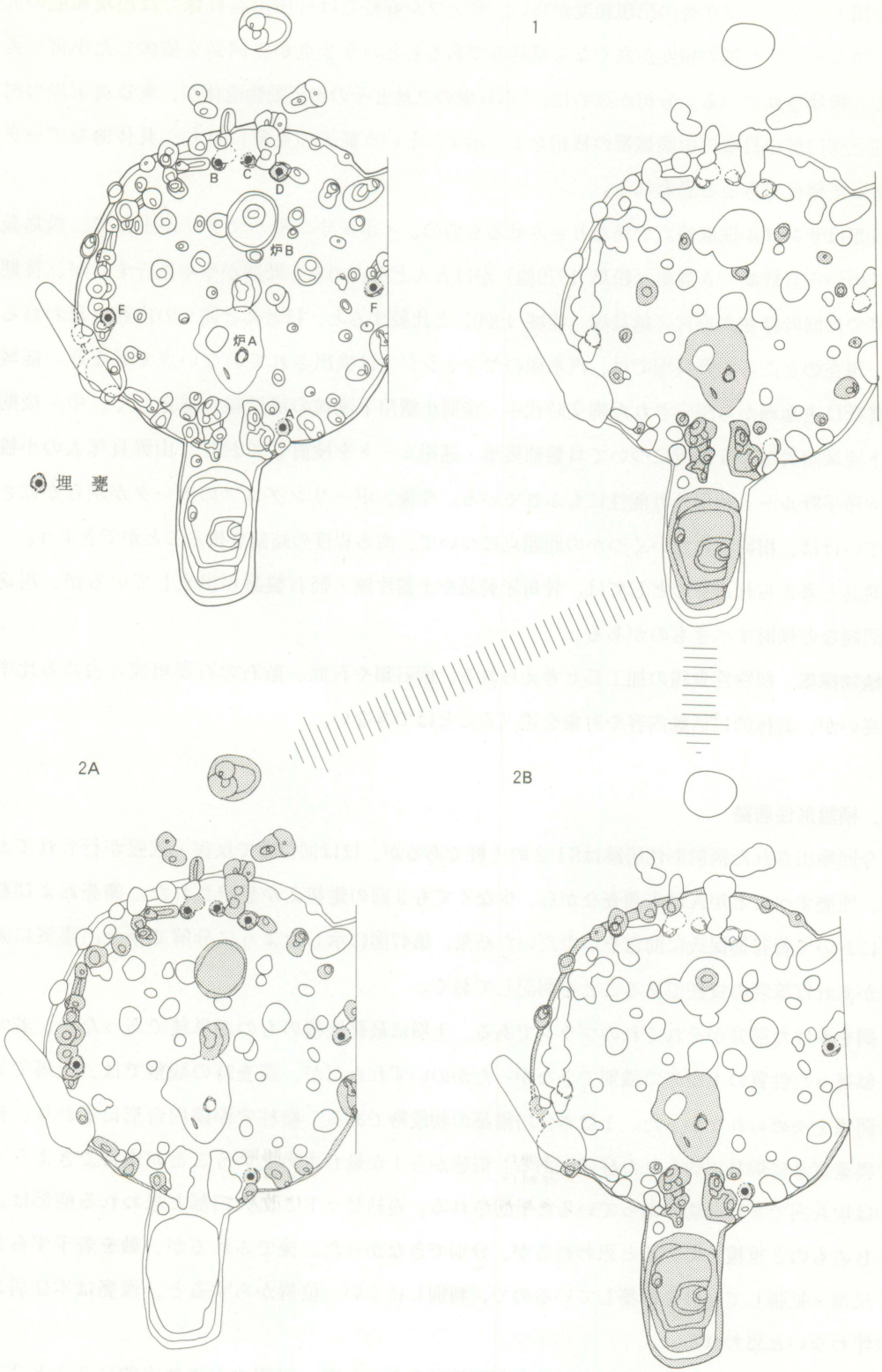
植物採集　植物性食糧の加工具と考えられる、磨石類や石皿、敲石の石器組成に占める比率は高いが、具体的に活動内容や対象を述べることはできない。

５．柄鏡形住居跡

今回検出された柄鏡形住居跡はＳＩ-２の１軒であるが、ほぼ同位置で反復・拡張が行われており、埋甕すべてと炉Ａは未調査ながら、少なくても３回の建替えが想定された。調査および整理において菅谷通保氏に助言をいただいた結果、第47図に示したように分解できた。事実に誤認があれば筆者の責任であることを明記しておく。

網をかけた部分がそれぞれのプランである。土層は最終堆積のものが単純であったか、非常に似通った性質の土なので識別できなかったかのいずれかだが、調査時の観察では、土層で先後関係を決められなかった。１は本住居構築の初段階である。壁柱穴が隅円台形にまわり、他に奥壁寄りに炉Ｂに切られた柱穴がある。形態から１が最も古いということが支持できよう。炉は炉Ａ内で２Ｂと切りあっていると予想される。連結ピットと出入口部と思われる柄部は、２Ｂのものと重複していると思われるが、分別できなかった。後でふれるが、軸を若干ずらして反復・拡張して２Ｂを構築しているので、判別しにくい。位置からすると、埋甕は本住居には伴わないと思われる。

次段階以降は、先後を確定させることが困難である。一応、説明のため便宜的に２Ａと２Ｂとしたが、確定し得ない。２Ａは壁柱穴が一部、壁溝によって連結されながら、円形にまわる。



第47図　SI－2建替えの想定

出入口部が１とほぼ180°反転して付けられるが、基本的には１を反復・拡張している。連結ピットは外側に開く形となる。柄部に穿たれたと思われるピットが単独であるが、これは本体から次第に立ち上がって出入口になる構造であったので柄部の壁は浅く、既に耕作などで失われてしまったためと思われる。出入口部寄りにある炉Ｂが本住居のもので、近接して本期に特徴的な中央部の柱穴が認められる。位置からみると、埋甕で本住居に伴うことが確実なものはＢ～Ｅの４基、可能性のあるものはＡ・Ｆである。なお、Ａには骨粉が認められた。

２Ｂは１の軸を若干ずらして反復・拡張をしたもので、土層断面から２Ａとの先後関係を観察するのは困難であったのでなし得ず、結果的にはプランが最も明瞭となった。壁を掘り込むように壁柱穴がまわるが、出入口部右側では検出されていない。連結ピットと出入口部である柄部は、１とほぼ同位置で重複するが、連結ピット間の空間などは、このままでは拡張した本住居のものとしては狭く、掘り方の外形に近づいた位置で掘りなおしていたと思われる。炉Ｂの底面に奥壁寄りの柱穴がみられる。炉Ａの最終的な広がりは本住居のもので、灰、焼土を主体とする範囲が明瞭に区別された。埋甕で伴う可能性のあるものは、ＡとＦである。

仮に２Ａが１の次段階とした場合、炉Ａ上面に接して堆積する貝層の存在が説明しにくい。逆に２Ｂを次段階と考える場合は、プランの内側に寄りすぎ、床面と同レベルか、若干下になる埋甕Ｂ～Ｄの存在をうまく説明できない。

現状では、反復・拡大例の存在を示すことはできたものの先後についての結論は導き出せず、課題をのこしてしまったことは、大きな反省点である。それでも、反復・拡大の状況を伝えることができ、また柄部が床面より高いレベルにある場合、土坑だけとなってしまうタイプがあることを、改めて示すことはできた。こうした例は重複の場合でも単独の場合でも、注意深く精査する必要を示唆するものである。柄鏡形住居跡は、現在、市原市武士遺跡の約70軒をはじめ、検出例が増加しつつある。さらに精査されることを期するところであり、堀之内式期の大規模集落と予想される山野貝塚にも多く検出されることが予測される。

６．おわりに

悪天候と限定された期間の調査・整理作業であったが、この確認調査の目的である現状の把握と、今後の保護活用のための基礎資料についてはいくつかの課題はのこるものの、既述してきた内容が示すようにひとまず提出できたものと考える。ここに改めて山野貝塚の重要性が認識されたわけだが、これを出発点として現状では良好な状態で保存されている遺跡の保護と活用の方策を、早い段階で具体化していく必要を強く感じている次第である。

最後に、現地調査から整理作業に至るまで、非常に多くの方々の協力があってはじめて本成果がまとめられたことを明記し、心からお礼を申し上げたい。

註以外の主要参考文献

石井　寛　『山田大塚遺跡』1990年

石田広美　「角山遺跡」『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』1980年

市立市川考古博物館編　『シンポジウム　堀之内式土器資料集』1982年

太田文雄　『余山貝塚確認調査報告書』1989年

岡村道雄・森嶋秀一　『里浜貝塚Ⅲ』東北歴史資料館資料集９　1987年

埼玉考古学会他　『シンポジウム　縄文時代後・晩期　安行文化　発表要旨』1992年

埼玉考古学会他　『シンポジウム　縄文時代後・晩期　安行文化　別冊４』1992年

三森俊彦他　『袖ヶ浦町伊丹山遺跡』1979年

蔀　淳一　『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』1990年

鈴木公雄　「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』第36巻第１号　1963年

鈴木公雄　「姥山Ⅱ式土器に関する二、三の問題」『史学』第37巻第１号　1964年

鈴木公雄　「関東地方晩期縄文文化の概観」『歴史教育』第16巻第４号　1968年

鈴木公雄・林　謙作編　『縄文土器大成４　晩期』1981年

袖ヶ浦町編　『袖ヶ浦町史　通史編上巻』1985年

出口雅人　『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』1990年

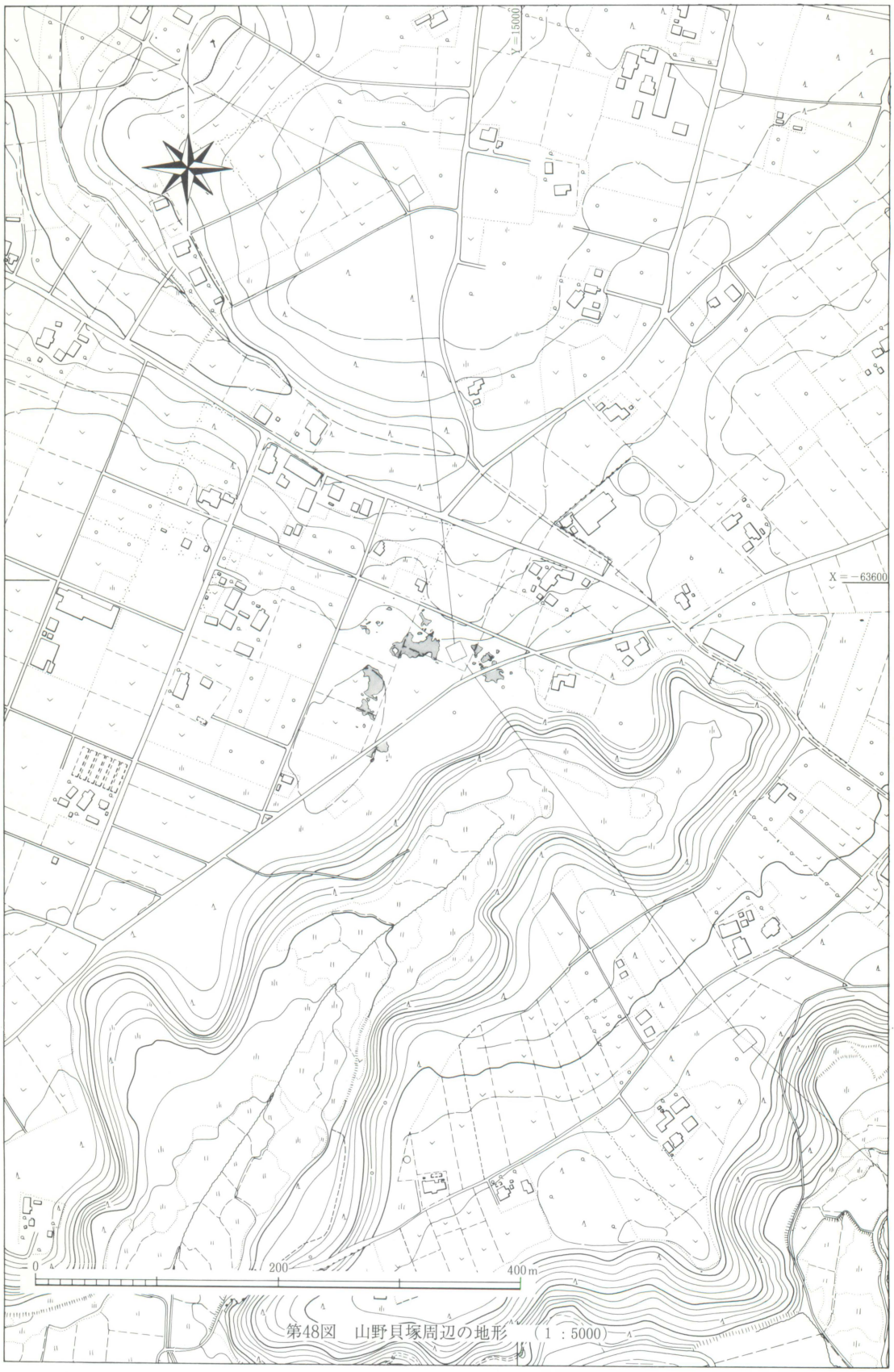
能城秀喜　「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」『千葉文華』第25号 1990年

野口義麿編　『縄文土器大成３　後期』1981年

早川智明　「所謂安行式について－土器型式の再編成に関する予察－」『台地研究№16』1965年

四柳　隆　『小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書』1991年

写　真　図　版

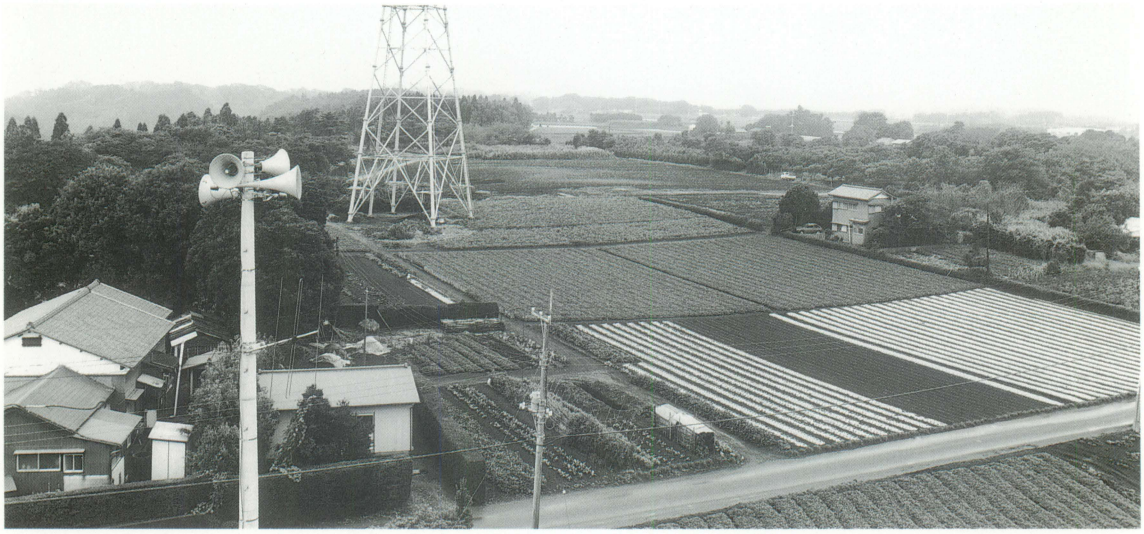


第48図　山野貝塚周辺の地形　（1：5000）

山野貝塚周辺地形の航空写真－昭和47年撮影－　（約１：5,000）

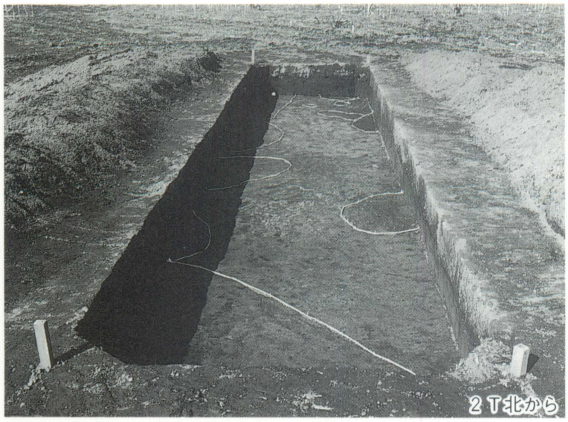
図版 2

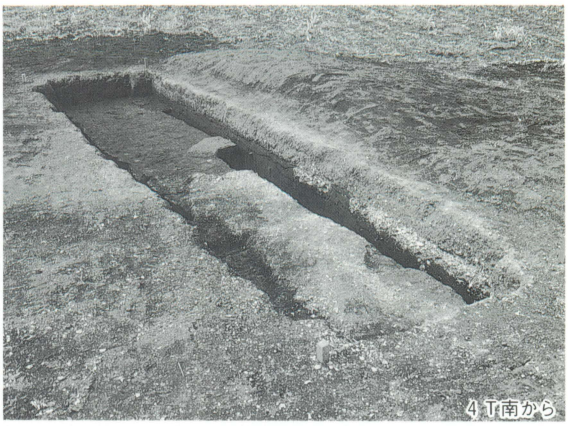
1．遺跡遠景（西から）



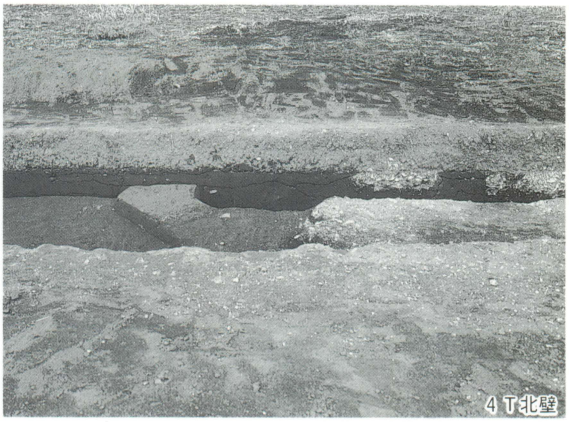
2．遺跡近景（東から）

3．遺跡近景（東南の谷から）


2Ｔ北から

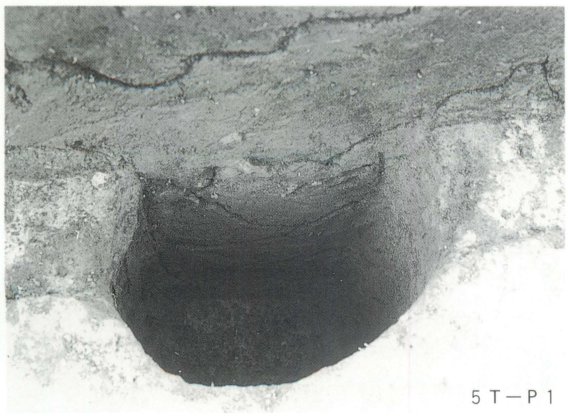

4Ｔ南から

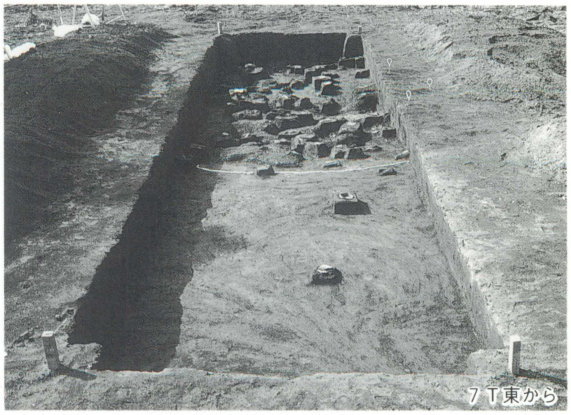
4Ｔ東側


4Ｔ北壁

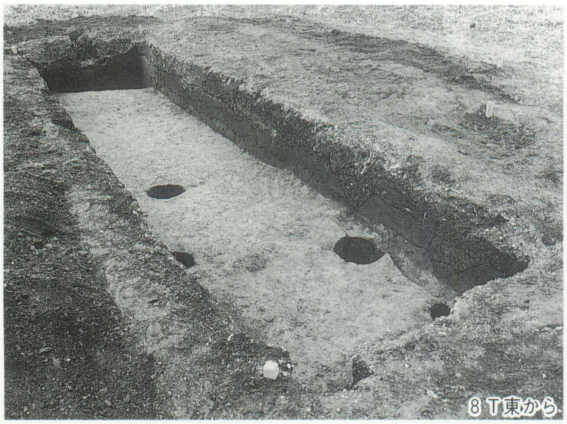
4Ｔ獣骨出土状況

5Ｔ南から


5Ｔ－Ｐ１

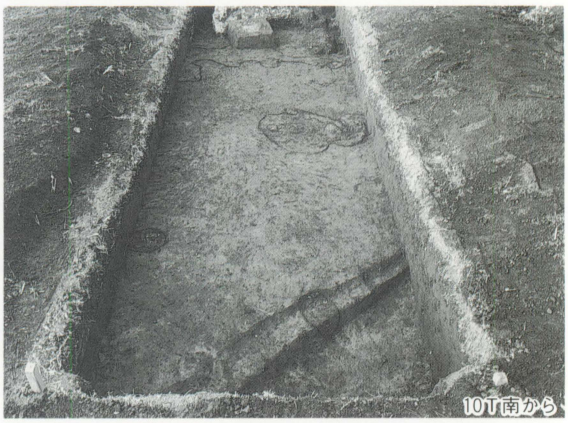

7Ｔ東から

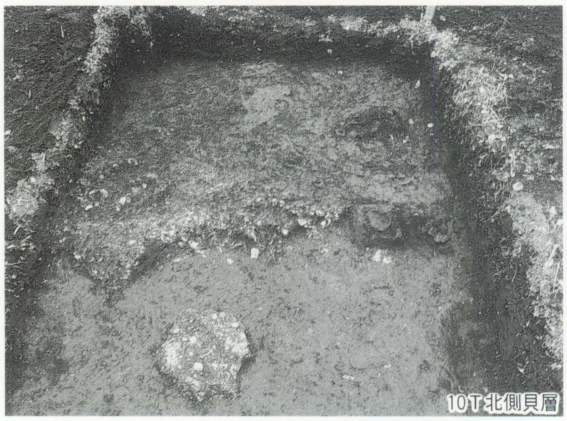
各トレンチの状況（1）

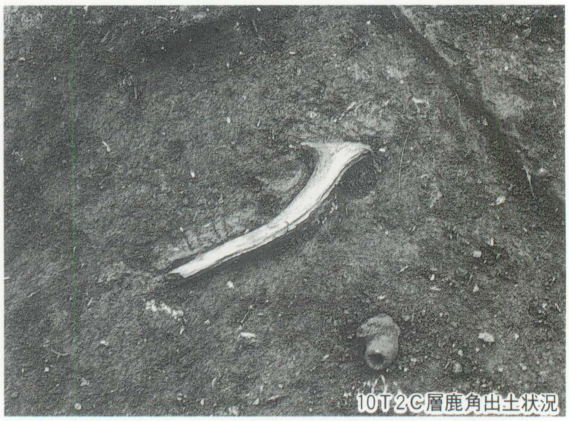

8Ｔ東から

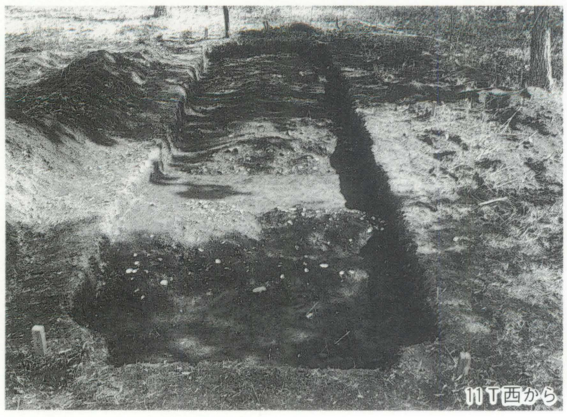
8Ｔ骨角牙製品出土状況

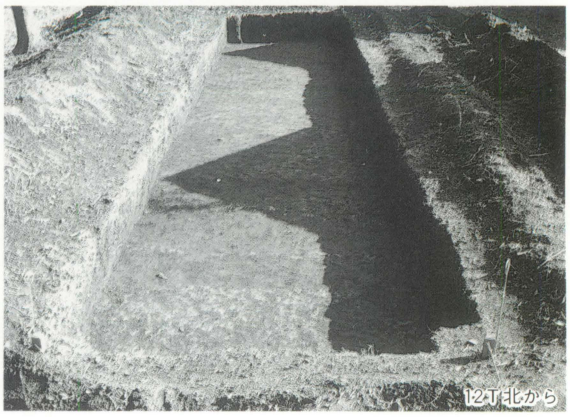
9Ｔ西から


10Ｔ南から


10Ｔ北側貝層


10Ｔ2Ｃ層鹿角出土状況

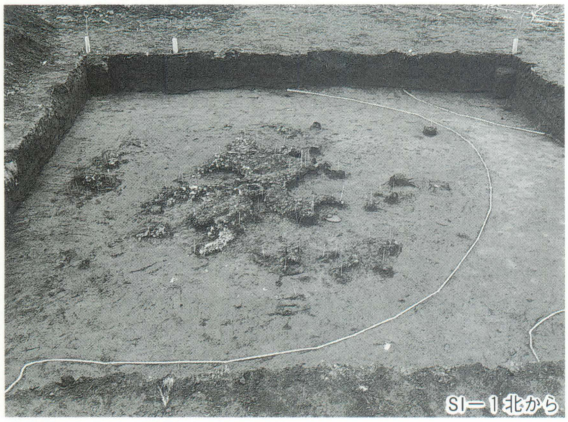

11Ｔ西から

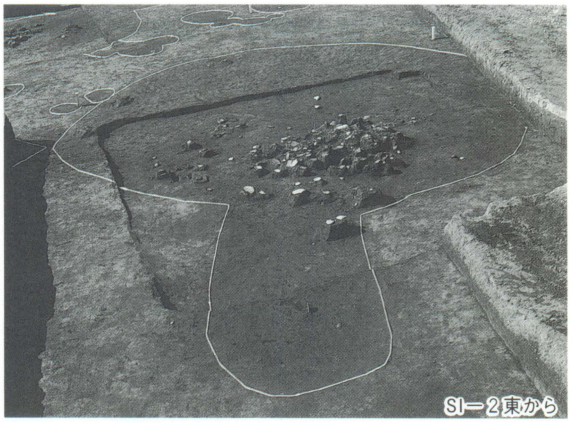

12Ｔ北から

各トレンチの状況 (2)

13T東から

SI－1・SI－2・SI－3西から


SI－1北から


SI－2東から

SI－2貝層 北東から

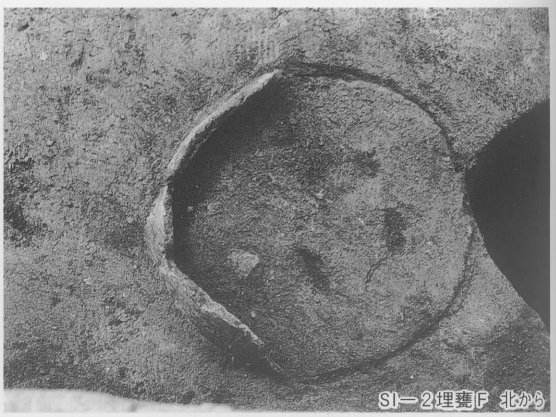
SI－2東から

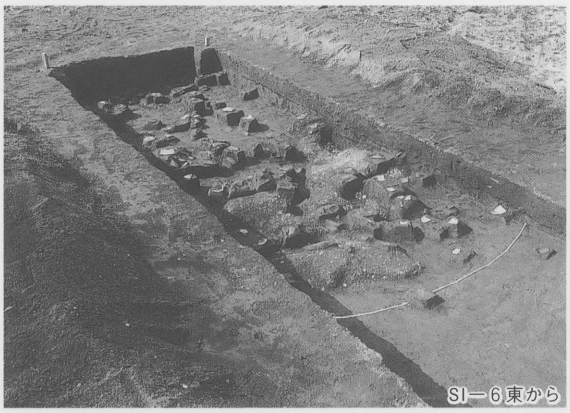
SI－2埋甕A 東から

SI－2埋甕B・C・D・西から

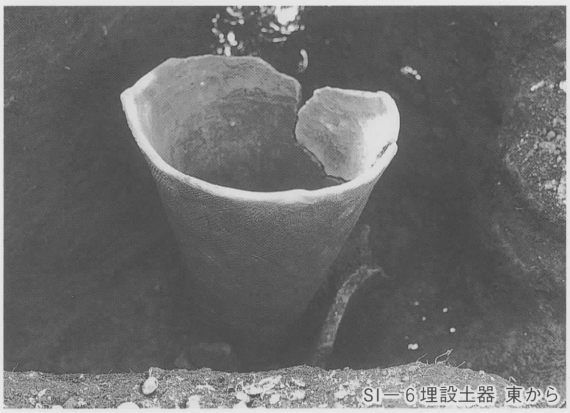
各トレンチの状況 (3) SI－1・SI－2(1)

SI－2埋甕E 南東から

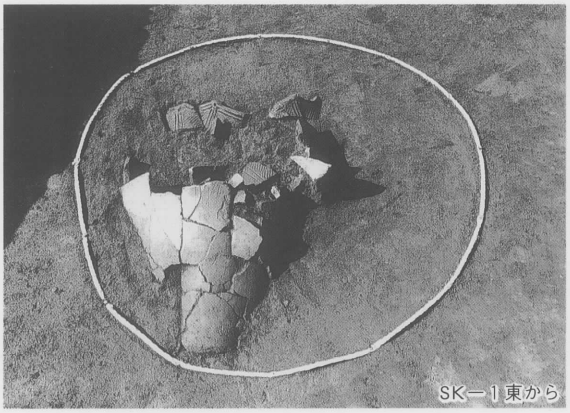

SI－2埋甕F 北から

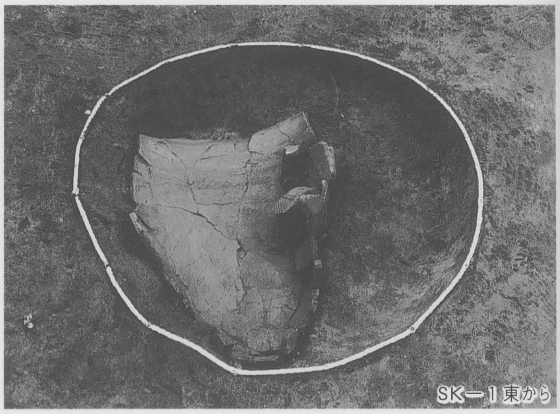

SI－6東から

SI－6北東から

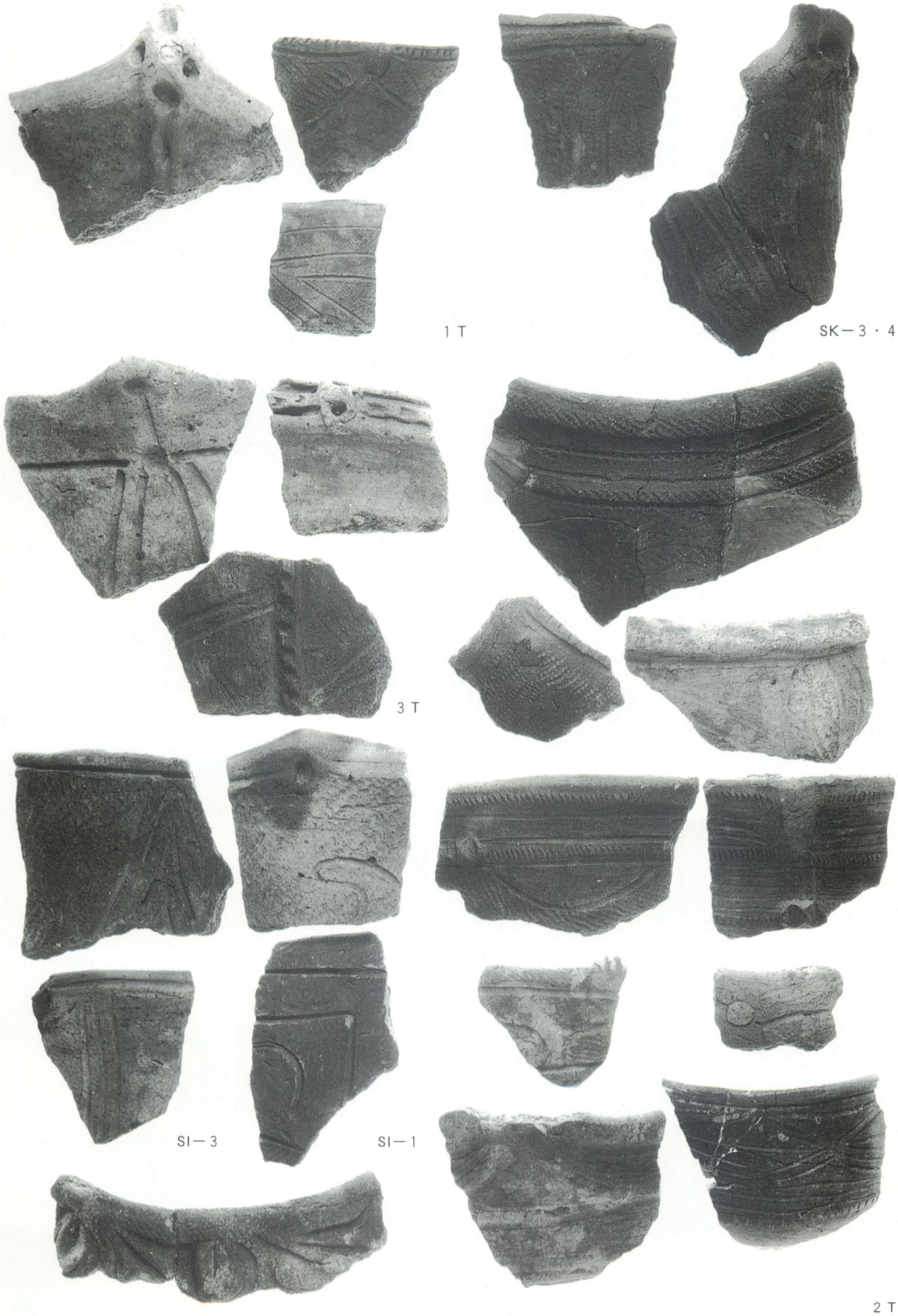

SI－6埋設土器 東から

SI－6埋設土器 東から

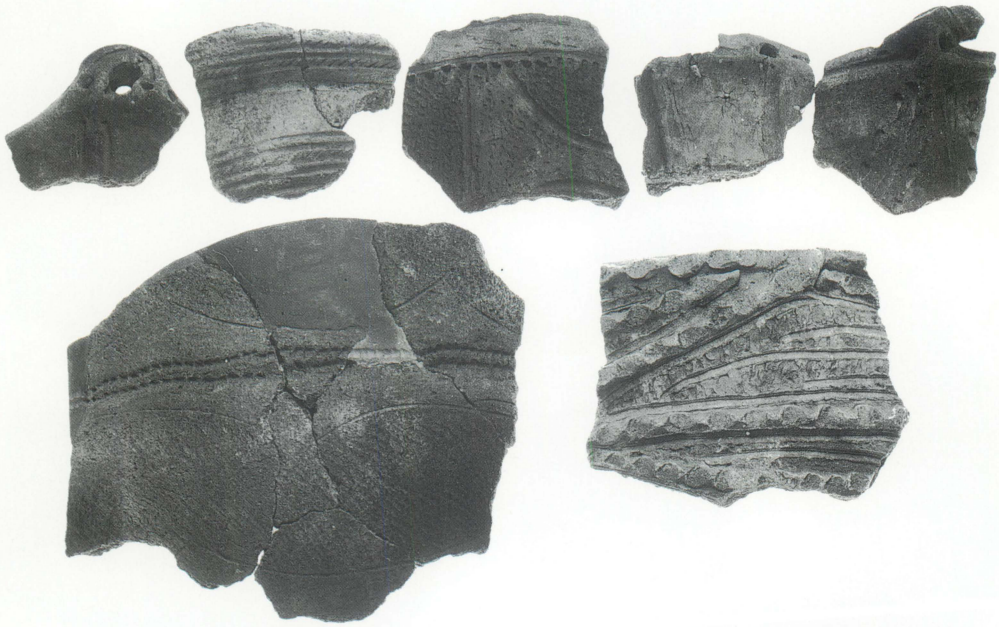

SK－1東から


SK－1東から

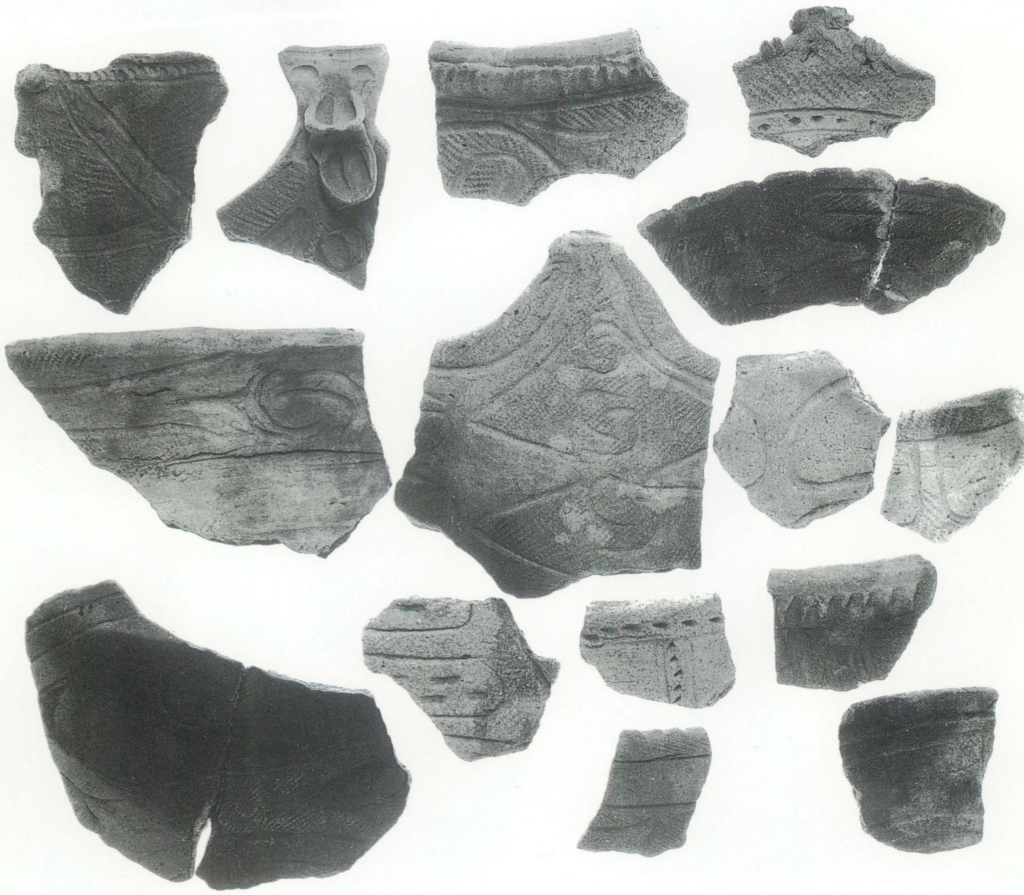
SI－2(2)・SI－6・SK－1



土器（1T・2T・3T・SI－1・SI－3・SK－3・SK－4）



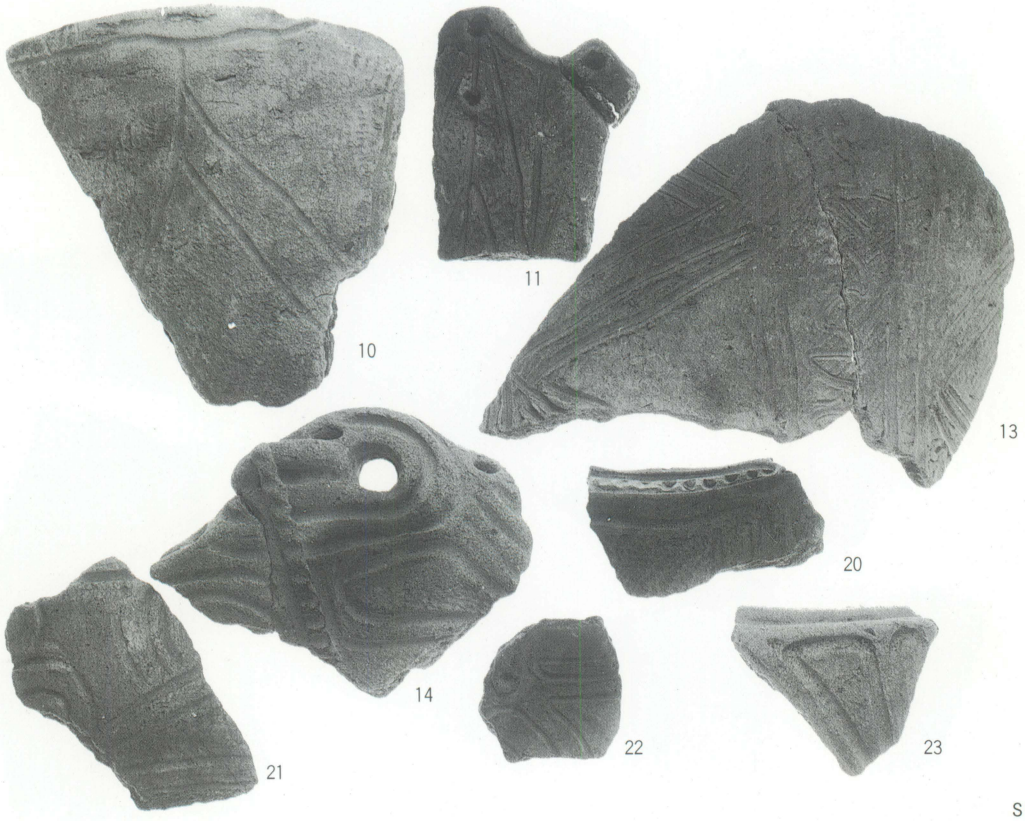
4 T



5 T

土器（4T・5T）

土器（7T・8T・10T・11T）



SI－2

SI－6

土器（SI－2・SI－6）

2
4 T

11
11T

4
4 T

30
S I－2

6
7 T

9
11T

32
S I－2

土器（4 T・7 T・11T・S I－2）

1
SI－6

18
SI－6

20
SI－6

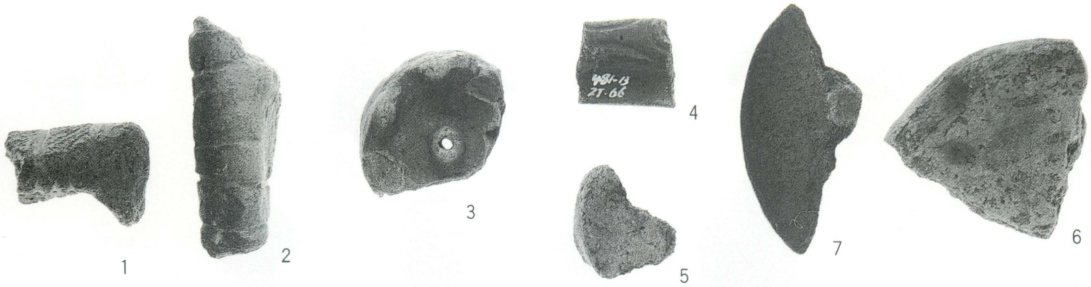
21
SI－6

2
SI－6

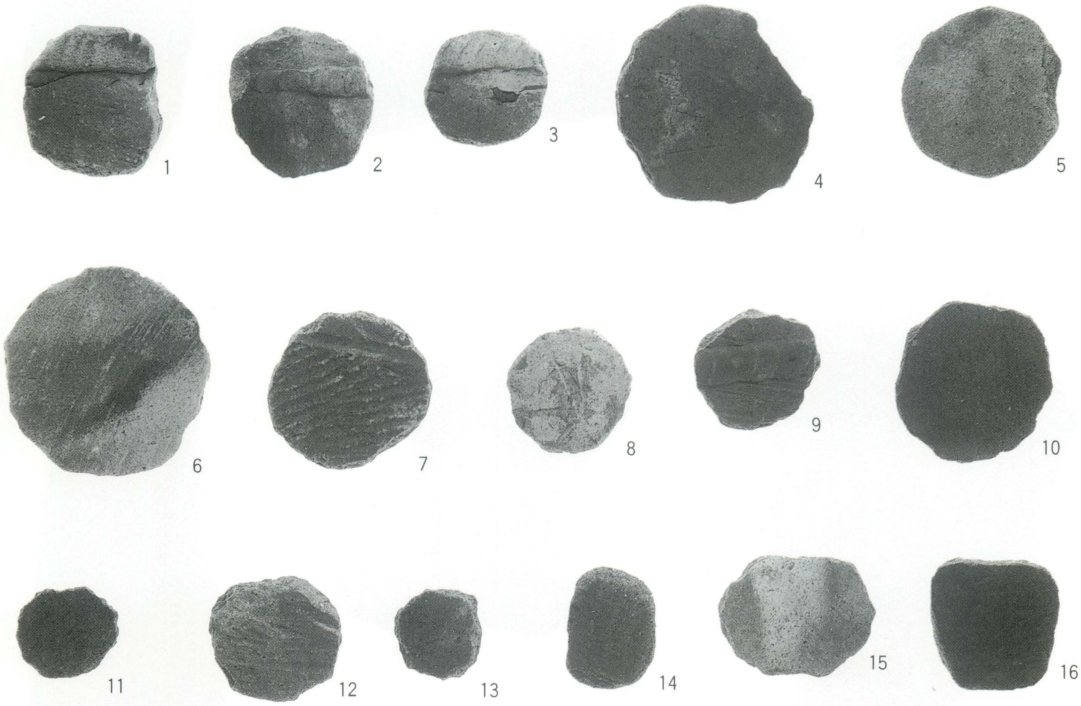
15
SI－6

1
SK－1

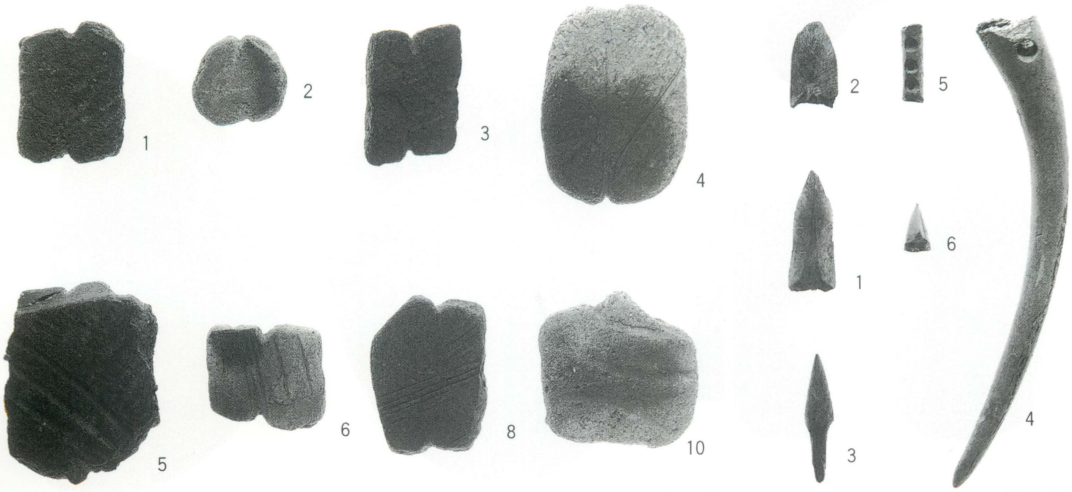
土器（SI－6・SK－1）



土製品

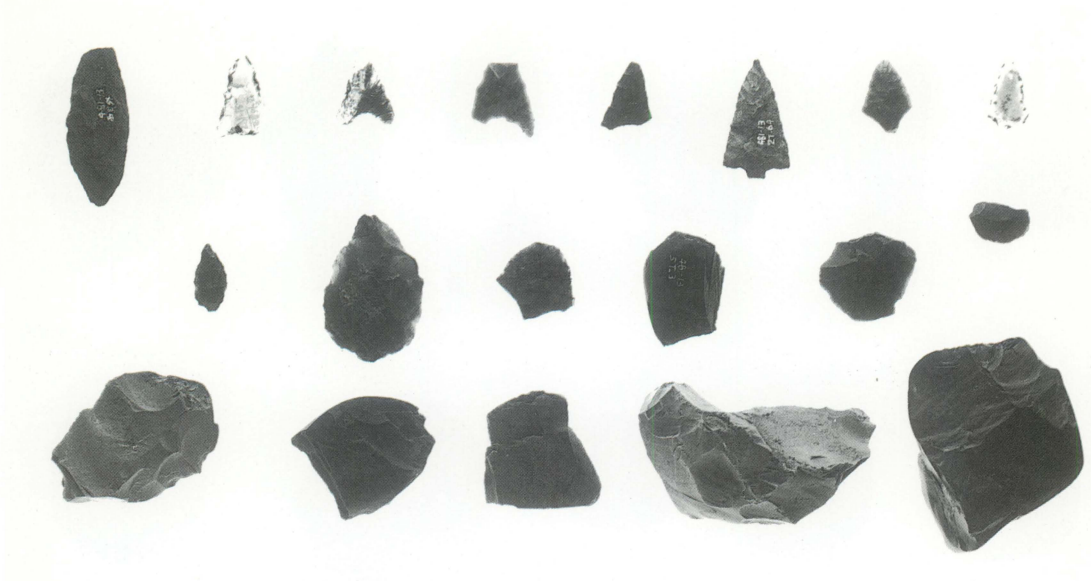


土製円板



土器片錘　　骨角牙製品

土製品・土製円板・土器片錘・骨角牙製品



石器 (1) 尖頭器・石鏃・石錘・楔形石器・UR－f1・削器・石核

石器 (2) 打製石斧・磨製石斧・礫斧・磨石類

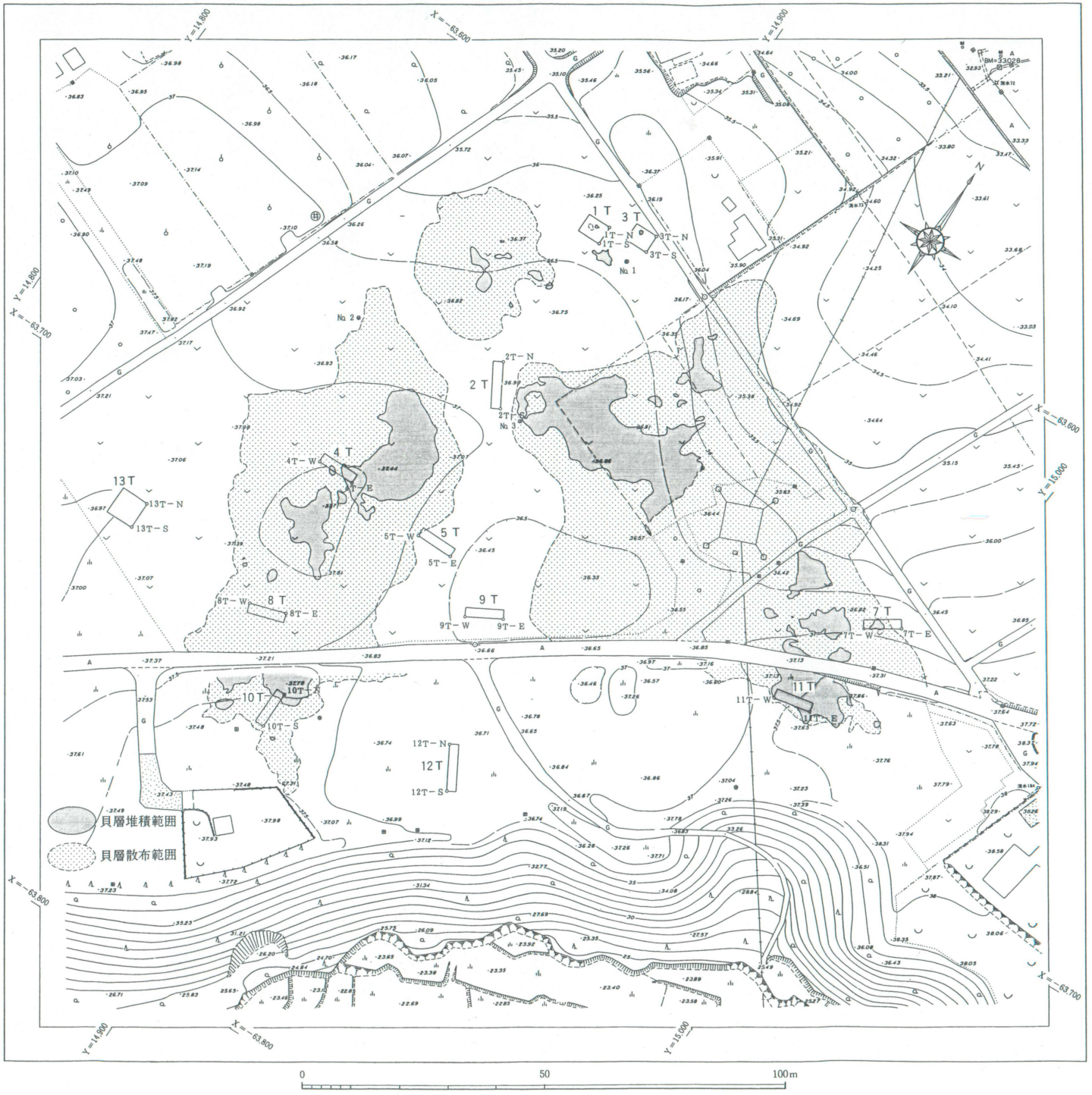
抄　　録

フリガナ	ソデガウラシサンヤカイヅカハックツチョウサホウコクショ
書名	袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第239集
編著者名	上守秀明
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地2
発行年月日	1993年3月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山野貝塚（サンヤカイヅカ）	袖ヶ浦市飯富（ソデガウラシイイトミ）	~~481~~ 229	013	35°25′33″	139°59′50″	1992.10.01～1992.10.30	200㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山野貝塚	貝塚集落	縄文	貝層　20か所以上 住居跡　8軒以上 土坑　13基以上	堀之内～安行3b（姥山）式土器 土偶・耳飾などの土製品 石鏃などの石器類と多量の礫 骨角牙製品	相弧状に広がる貝層の分布範囲を確定 遺構内貝層を20か所以上検出し、居住域を把握

山野貝塚地形測量図


Y=14,800
X=-63,800
Y=14,900
X=-63,700
Y=15,000
X=-63,600
X=-63,900
X=-63,700
1T
1T-N
1T-S
3T
3T-N
3T-S
No.1
No.2
No.3
2T
2T-N
2T-S
4T
4T-W
4T-E
5T
5T-W
5T-E
6T
6T-W
6T-E
7T
7T-W
7T-E
8T
8T-W
8T-E
9T
9T-W
9T-E
10T
10T-N
10T-S
11T
11T-W
11T-E
12T
12T-N
12T-S
13T
13T-N
13T-S
貝層堆積範囲
貝層散布範囲
0
50
100m

千葉県文化財センター調査報告 第239集
袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成5年3月31日発行

発　行　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印　刷　有限会社　ミリオン印刷
千葉市中央区南町3－4－2

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。